
魔術師の戦律

schwarzschild

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師の戦律

【Nコード】

N4384U

【作者名】

schwarzschild

【あらすじ】

カールスラント空軍及び連合軍を独自の観点から支援することを目的に作られた部隊、カールスラント空軍第200独立戦闘飛行隊、通称〈シュバルツアドラー〉。戦闘員はたったの二人と小隊にも満たない小さな独立部隊。されど、この部隊に所属するはへ蒼刻の魔術師・〈紅蓮の戦姫〉と、二人の英雄だった。そして、彼らに新たなる命令が下る。任地はロマーニャ・第501統合戦闘航空団。これは、彼らと501の隊員たちが奏でる戦いの旋律である。

プロローグ（前書き）

新たに追加した、後付けのプロローグです。
そのため、初投稿は2話目となります。

＊注意は2話目の前書きを参照してください。

プロローグ

1944年9月、第501統合戦闘航空団の活躍によりガリアは解放され、異形の軍ネウロイは世界中で活動を弱めつつあった。

しかし、1945年3月、ネウロイは反撃を開始する。

ヴェネツィア上空に突如出現したネウロイの巢は、眼下でトラヤヌス作戦を行っていた第504統合戦闘航空団のウィッチたちを強襲。

戦いの末、ヴェネツィアは陥落し、その脅威はローマに迫る。

これにより、ローマ防衛にあつた第504統合戦闘航空団は壊滅状態に陥つたのであった。

この報を聞いた、各国は危機を募らせていた。

ロンドンに置かれた、ここ連合軍司令部も例外ではない。

そんな中、ミーナ・ディートリング・ヴィルケ中佐は司令官ガランド少将の執務室へと、呼び出されていた。

「ヴィルケ中佐、入ります」

出頭してきた、彼女の姿を見てガランド将軍は渋面を作った。

「やってくれたはね」

「あら？何の話でしょう？」

「各国軍司令部に脅しをかけて、ヴェネツィアへの補給の約束を取り付けたでしょう。それも私の名前を使って」

「将軍の命令だなんて、私は一言も」

おやおや、という顔でミーナは肩をすくめた。
その様子を見た、ガランドはため息をついた。
各司令部から回ってきた情報でミーナがやったことに見当はついている。

「補給はともかく、ウィッチはどうするの？」

自国でも起こるかもしれない、ネウロイの強襲。
この状況下で各国が優秀なウィッチを派遣してはこないだろう。
かつての501のような先鋭部隊を作るのは至難のはず……。
その疑問にミーナは微笑んで答えた。

「將軍、人は集めるものではなく、自然と集まるのですわ」

ガランドはそれを聞いて驚いた。

ミーナにはすでに確信があるのだと。

「あのマロニーが、貴官のことを牝狐とののしっていたことを思い出すわね」

「まあ」

ミーナは心外だと言わんばかりの表情を作る。

その様子を見たガランドは苦笑しながら、手元のクリップボードに目を落とした。

「將軍、それは？」

ミーナは目聡く視線を追ってきて、それを見つける。

「優秀な部下に餞別をと思ってね」

ガランドはミーナにクリップボードを渡した。

ミーナはパラパラ、と資料をめくっていく。

そこに書かれているのは、一つの部隊と二人の隊員。

部隊の名はカールスラント軍第200独立戦闘飛行隊、通称ヘシユバルツアドラー」。

カールスラント空軍及び連合軍を支援するために作られた特殊部隊である。

彼らは転戦を繰り返し、戦況をよくしているの。

だが、その特有性がある故にこの部隊の隊長の私兵部隊となってしまう、東は扶桑、西はリベリオン、南はノエル・カールスラントと気ままに飛び回っているようだ。

そして、その原因となっているのがこの男性。

名前はエイト・グナイナー、階級は少佐。

部隊の隊長で世界でも稀有な男性ウィッチ、つまりウィザードである。

写真に写る風貌は、黒髪に黒のロングコートと全身黒づくめであるものの、眼鏡をかけたその顔立ちはピアニストか神父が似合いそうな優しいお兄さんといったところか。

だが実際には、〈蒼の戦神〉と言われたほどの実力を持ち、カールスラントでも屈指の研究者である。

この部隊を支えるもう一人の女性隊員。

名前はユリアヌス・ティアム、階級は大尉。

困った隊長の補助をする副隊長。

写真に写る風貌は、同じ黒いロングコート着ているが色素の薄い

髪と対になり映えて見える。

きれいな顔立ちからは気品がうかがえる。

その副隊長も戦場では〈紅蓮の戦姫〉と呼ばれ、狂戦士のごとく活躍しているウィッチである。

戦闘員はたった二人の独立部隊。

それが、各地で戦況を覆すような活躍をしているのだから驚く他ない。

もう少し真面目に働いてくれたらと思うのはわがままなのだろうか。

そんな憂鬱を胸にミーナは資料から目を外した。

「どうだろうか？ 気に入ってもらえたかな？」

「ええ、まあ」

ミーナは眉を寄せた。

この部隊が501に組み込まれるのは戦力として申し分ない。

ただ、問題は彼が応じてくれるかどうかだ。

皇帝フリフィード4世に許可を貰い、独自行動をとっている彼らは、カールスラント空軍ウィッチ隊総監のガランド少将の指揮下がない。

彼らを指揮下に収めたいとしたら、陛下か総統閣下、空軍の総司令官ぐらいだろう。

「大丈夫よ」

ガランドは不敵な笑みを浮かべる。

「貴官も彼の性格を知っているでしょう」

少将も人が悪い。

彼の性格は一度会った者ならわかるが、享樂家で周りに優しい。特に女性には甘いといわれるほどだ。

「すでに文書を送ったのだけど……」

ガランドはばつの悪そうな顔をする。

「どうかされたのですか」

「それが、彼がアフリカに飛ぶのと入れ違いになったにみたいなのよ」

「はあ」

「だから、合流が遅くなるかもしれないの。そこは我慢してちょうだいね」

「了解しました」

もともと、来るか来ないかわからない援軍だ。

ミーナは期待しないで待つことにした。

「それと」

ガランドから差し出される一枚の招待状。

「私にですか」

「そうよ。一時間後にまた会いましょう」

ミーナにはそれを受け取る以外の選択肢はなかった。

プロローグ（後書き）

新たに追加したプロローグはどうだったでしょうか。

この内容は書きあぐねていたのですが、2話目の「旅立ち」を書いた結果、書くことにしました。

＊「旅立ち」の結果は2話目の後書きを見てください。

自分の中では「プロローグ」については、とりあえず見せるものになった、
と思っています。

変則的なことをしてしまうでしょうが、これからもよろしく願います。

旅立ち（前書き）

はじめまして、s c h w a r z s c h i l dです。

今回が人生初の投稿となります。（すぐく、緊張します）
短いですがご堪能頂けると、嬉しい限りです。

＊注意

この作品には、オリジナルキャラ、原作の独自解釈、作者のご都合主義などが含まれていると思います。

旅立ち

「暑い」

この場所に来れば誰でも口にするであろう、その言葉をひとり呟いた。

天高く昇り、煌々と輝く灼熱の太陽。

どこまでも続き、まったく生命の息吹を感じない広大な砂地。その一角に設けられたアスファルトの地面に僕は立っていた。

アスファルトの地面、つまり滑走路が設けられているここアフリカ基地は赤道直下にあたり、年中このような暑さだそうだと。

ここに年中いる者の気がしれない……。

各地を転々としていた、僕たちがここに来たのが一ヶ月ほど前。

その頃にはあの第501統合戦闘航空団で活躍した、ウサギ耳の大尉と黒猫……いや、黒豹の使い魔を持つ少尉がいた。

だが、彼女たちは501が再結成することを聞き、飛び出して行ってしまった。

そして、二人と入れ違うように僕たちのもとへ一通の手紙が届く。差出人は、我々カールスラント空軍ウィッチ隊総監のアドルフ・イーネ・ガランド少将であった。

内容は言ったって簡潔。

エイト・グライナー少佐

並びに、ユリアヌース・ティアム大尉

両名はロマーニャに赴き第501統合戦闘航空団を支援せよ

とのことであつた。

そんな訳で僕たちは現在、滑走路にいたのだつた。

その滑走路はというと、扶桑人の隊長さんに「へアフリカの星」とその従者、抱き合っている3人の女の子に整備士の方々など多くの人でごったがえしていた。

アフリカの皆さんは律儀にも、勝手な理由で訪れ、勝手な理由で去っていく僕たちを見送りしてくれるそうだ。

背後から規律のいい足音が聞こえてくる。

振り返ると、兵がひとりこちらに歩み寄ってきた。

どうやら、離陸の準備が終わったようだ。

「グライナー少佐、準備が整いました」

「わかった。よろしく頼むよ」

「はっ」

知らせにきた、副機長に労い言葉をかけると、これまた律儀に敬礼をして機内に帰っていった。

さて、こちらもそろそろ動こうか。

気分を改め、抱き合っている三人の少女の方に歩を進める。

「ユリア、そろそろ出発だぞ」

「ふえ」

声をかけると、一番手前の銀髪をセミロングにした少女が涙声で反応した。

少女はこちらを一瞥すると、再び目の前の少女たちと抱き合った。その横では「ケイ」と呼ばれている隊長さんが愛用のライカを手になやしく動き回っている。

肩をすくめ、僕はひとり飛行機へと向かった。

「待て」

飛行機に乗り込もうと、タラップに足をかけたところで声をかけられた。

声をかけてきたのは、その天才的な技術と天性の美貌で「アフ리카の星」と称される、ハンナ・ユースティーナ・マルセイユ大尉だ。本名はもっと長いらしく、彼女も嫌っていたので覚えていない。

「どうした、ハンナ」

「ファ、ファーストネームで呼ぶな！」

ティナは顔を赤く染めて、怒気を含んだ声を上げる。

これは前に一度アフ리카を訪れたとき見つけたティナの弱点で、本人いわく呼ばれ慣れてないそうだ。

普段、傲岸不遜な彼女がこう呼ぶことで、意外な一面を見れるのからつい使いってしまう。

その証拠にティナの隣にいる、マテイルダが微笑をたたえている。

「ごめん、ごめん。ティナ」

こちらが下手に出て謝ると、彼女は鼻を鳴らして答えてくれた。どうやら許してくれたらしい。

「まったくお前という奴は」

ティナはひとり愚痴っているが問題ないだろう。

そうしていると、少し咳ばらいをした後でこちらをまっすぐ見据えてきた。

何者も恐れない、曇り一つとない目。

砂漠に君臨する彼女にこそふさわしい、その狩人の目で見てきている。

正直言って、怖い。

大抵の人なら立ち竦んでしまうのではないかと、思われるぐらい。そして彼女はこちらに人差し指を突き付け、高らかに宣言した。

「次、来たときこそグライナー、お前に勝ち越してその鼻っ柱を折ってやる」

「くっ、くっくく、あはは」

僕は思わずその宣言を聞いた途端、笑いがこみあげてきてしまった。

「お、お前は何を笑っている!!」

ティナは羞恥の色に顔を染め、こちらに詰め寄ってくる。

それでも僕は一度決壊したこの感情を抑えることができない。

ティナがあと一步も出詰め寄ってきたところでやっと、僕は言葉を出すことができた。

「とっとても、き、きみらしいとお、おもって」

「何？」

「だ、だって、つつつつふつつうは、さ、こおいう、ときは、別れの言葉を、言うものだろ」

腰のあたりにある剣に触れ、〈別れ〉という言葉が頭の中で絵がき出したことでやっと、自制が利くようになってきた。

いま、自分たちは異形の軍ネウロイと戦争をしている真っただ中だ。

そして、戦争である以上、軍人ならば死を覚悟しておかねばならないだろ。

最前線で戦うウィッチなおさらのはず。

なのにティナときたら……。

そんなことを考えていると、急にまた笑いが込み上げてきた。今度は思い出し笑いと、こんなことを考えてしまう自分にだ。

「だから、笑うなと……」

二転、三転と僕の様子を見て、ティナは呆れているようだった。それから、聞こえるような大きなため息をつくと、いきなり彼女の雰囲気が変わった。

先ほどの取り乱したものでもなく、時より見せるふざけた感じでもなく。

普段の、最も彼女ににあう傲岸不遜としか言いようのないオーラがひしひしと伝わってくる。

彼女は声だけで人を貫けるような鋭い言葉を放った。

「お前は、この私が戦いで死ぬとでも思っているのか。それにお前もだ、グライナー！ お前は自らがおいそれと果てる魂だと思っているのか？」

高慢としか言えないけど、決して曲がらない、その偽りのなき言葉に僕の心は貫かれる。

心が大きく震え上がり、闘争心がみなぎってくる。そうして、僕は気づかされる。

ティナが自分を鼓舞してくれたのだと。

弱気な雰囲気や顔とか声とかどこかしらに出ていたのだろう。

そのわずかな機微をカールスラントのトップエースは見逃さない。

ほんと、かなわないな。

そんなことを心の中で呟き、僕は苦笑した。

すると、ティナは満足した顔になる。

僕がお礼を言おうと口を開きかけたとき、彼女はニンマリと意地悪そうな笑みを浮かべ告げた。

「腕だけではなく、心まで錆びついているのかと思ったぞ。

私と対等に渡り合える者は少ないのだから、ちゃんと背筋を伸ばしてなければ困る」

……前言撤回。

彼女が僕を励ましてくれたのは、彼女自身のためらしい。

もつとも、彼女らしい理由が微笑ましく思える。

その勝負はというと、大食い対決に酒の飲み比べ、我慢大会など多岐にわたり、その中でも一番拘るのが模擬戦である。

僕とティナの模擬戦の戦績はというと、36勝13敗30分けである。

しかしながら、この戦績には3年前に訪れた時の戦績も入っており、彼女は有名になり始めたばかりの頃であった。

そして、ここ1ヶ月の戦績では14勝13敗23分けである。

このわずか1勝の差も、ストライカーの圧倒的なスペック差を以ってして、この戦績なのだから何ともいたたまれない。

それだけ彼女は成長し、射撃に関しては人類最高のウィッチと言われるのも、伊達ではなくなった。

対して僕は、ウィザードとして活躍し世界に名を轟かせたある作戦の後、大量の魔力を消耗してしまい半年の入院を余儀なくされた。そのまま興味のあったストライカーの研究をするべく、研究者となり前線から遠ざかっていたのだ。

たびたび、試験運用の名目で前線には出ていたものの、技術を衰えを防ぐ程度でしかない。

最前線で戦い、日々その技術を練磨し続けるティナからすれば、錆びついていると見えるだろう。

そんな僕をティナは好敵手と位置づけ、励ましてくれるのだ。だから、僕は心に思ったことをやはり口にすることにした。

「ありがとう、ティナ」

すると、彼女はそっぽを向いてしまった。

よく見るとこちらに向いている耳は心配になるほど真っ赤に染まりあげている。

僕は横目でこちらを見ているティナに右手を差し出した。

ティナは理解できないといった感じに暫し僕の手を見ていた。
僕の真意に思い当たったようで、僕たちは握手を交わす。
そして、僕は最高の笑顔で、いま思いつく最高の言葉を紡いだ。

「また、空で会おう。砂漠の女神様」

旅立ち（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

本当はこの話をプロログとして書くつもりだったんです。

しかしながら、書いていくと1000字、2000字、3000字。

ついには、4000字に届く勢いで書いてしまいました。（長い
ですよ）

どうやら自分には文章をまとめる能力が低いように感じます。○

r
z

もし、良ければこのことも踏まえて感想をお願いします。

まだまだ若輩者の小生ですが、感想をもとに連載していけたら
と思っています。

連載は不定期となるでしょうが、これからよろしくお願いします。

キャラクター設定（前書き）

魔術師の戦律に出てくるオリジナルキャラクターの設定です。

キャラクター設定

オリジナルキャラ

名前.. エイト・グライナー

性別.. 男

階級.. 少佐

所属.. カールスラント空軍第200独立戦闘飛行隊司令
ノイエ・カールスラント技術省

身長.. 172cm

年齢.. 17歳

生年月日.. 1926年7月23日

特技.. 剣術・狙撃・料理・魔導エンジンの開発など

趣味.. チェス・読書・魔導研究など

通称.. 「蒼刻の魔術師」
「蒼の戦神」

愛称.. 「アハト」
「ハチ」

使い魔…鷲

固有魔法…空間制御

その他の魔法技能…ルーン魔術による付加魔法

（人工魔眼・付加術魔弾などがあげられる）

魔力制御による肉体強化・自然治癒力の上昇など

パーソナルマーク…剣を抱く鷲

機体…OEG-03スペシャル

OEG-05Fスペシャル

OEG-06

武器…Kar98K一グライナーモデル

フルサーGew43一グライナーモデル

マウザーM1918

M712一グライナーモデル

FN M1935

MG42

MG151

MK108

ロングソード

その他

・世界でも稀な男性ウィッチ（ウィザード）

・過去のトラウマから二重人格者となってしまうている。

普段は、温情で享乐的。その性格から物事に流されやすい一面も。
もう一つの人格が現れるときは、冷血で傲慢、直情的な性格に思

われることも少なくない。

しかしながら、根の部分は変わっておらず、仲間思いで正義感が強く、なにより人の死を恐れている。

それ故に自らを顧みない行動をとることも。

・ティーム大尉とは、同じ孤児院で育ったため、兄弟のように大切に想っている。

・初めてのネウロイとの戦闘は10歳の時。

オストマルクでは陸軍士官候補生として戦争に参加。

ウィザードとして戦い始めたのがカールスラント防衛線の最中である。

・狙撃手・指揮官として遠方から全体を把握し、支援する戦法を好む。

天才的な空間把握力と行動予測力の持ち主で前衛としても世界トップレベルの腕前。

その戦法と卓越した技術もあり、いまだ僚機を失ったことがない。ただ、仲間が危機的状况に陥ると体を張って怪我をすることもしばしば。

・カールスラント皇帝フリフィード4世から厚い信頼を得ており、カールスラント軍及び連合軍に対して 影響力の強い第200独立戦闘飛行隊の設立を許された。

・部隊を設立した現在、ノイエ・カールスラント技術省にも研究者として籍を置いている。

専門は魔導研究だが、機械工学にも精通しており、幅広い分野で活躍している。

また、グナイナーの開発するストライカーは搭乗するウィッチの

ことを考え、高性能で安全性に優れ斬新かつ高度な技術が取り入れられている。

そのため、目新しい物好きな皇帝フリフィード4世から重宝され、世界中から高い評価を受けている。

ただ、ストライカーが量産されないのは、コストの高さと生産ラインでの技術的問題が大きい。

・1945年4月現在の公式記録では、撃墜数412機・撃破数106機

＊ただし、カールスラント軍の厳しい撃墜判定に基づいているため、実際はこれ以上の戦果を挙げていると言われる。

・「蒼刻の魔術師」の異名は、魔弾を使うときの詠唱とその戦う姿を見たイメージに由来する。

「蒼の戦神」の異名は、バ・ド・カレー撤退戦、6月4日の伝説的な戦い方と同作戦が行われたガリアのイメージカラーに由来する。

・大戦初期から参戦し、その後各国を飛び回っていたこともあり、多くのウィッチと交流がある。

名前…ユリアヌース・ティアム

性別…女

階級…大尉

所属..カールスラント空軍第200独立戦闘飛行隊

身長..162cm

年齢..16歳

生年月日..1928年2月14日

特技..剣術・料理

趣味..裁縫・ピアノ・チェス

通称..「紅蓮の戦姫」

愛称..ユリア

使い魔..白猫

固有魔法..炎（フرائم）

その他の魔法技能..魔力制御による肉体強化・自然治癒力の上昇など

パーソナルマーク..剣を背負う白猫

機体..OEG-03スペシャル

OEG-05Mスペシャル

武器..MG42

フランベルジェ

その他

- ・ 性格は温厚だが子供のような無邪気な一面も。

- ・ 人に物事を言い聞かす時、抱き寄せる癖がある。

- ・ グナイナー少佐とは同じ孤児院で育ち、兄として慕っている仲。

- ・ 初めて戦場に出たのは、訓練学校を卒業後、1941年の1月にJG26へと配属されたとき。

- ・ マルセイユ大尉やハルトマン中尉など世界のトップエースと比べても、遜色ないといわれるほどの技術を持っている。

- 中・近距離における高機動戦を得意とし、常に周りを気遣って戦うことも多い。

ただ、兄であるグライナー少佐に似てか、傷ついた仲間を守るために無茶をすることもある。

- ・ 1945年4月現在の公式記録では、撃墜数307機とハルトマン中尉に並ぶ記録を持っている。

- ・ 「紅蓮の戦姫」の異名は、ツェルベルス作戦において固有魔法を多用し、狂戦士のごとく戦ったことに由来する

- ・ JG26では前線で戦い、独立部隊配属後は各地を巡っていたため、多くのウィッチと交流がある。

キャラクター設定（後書き）

オリジナル設定については必要に応じて書こうと思います。

黒衣の兄妹（上）（前書き）

いよいよ本編スタートです。

黒衣の兄妹（上）

アフリカを発って、数時間。

僕たちは輸送機の中にいた。

輸送機はJ u 2 5 2、カールスラントの中ではかなりの名作であると思う。

「ねえ、聞いている？ アハト」

語りかけてくるのは銀髪に琥珀色の目の女性。

彼女の名前はユリアヌス・ティアム。

僕の副官でもあり、大切な家族だ。

「き・い・て・る・の？」

「痛い、痛い」

右耳を引っ張る彼女に抗議の声を上げて、振りほどく。

ちなみに左耳はいまでも赤く染まっているだろう。

右手はというと、赤を通り越して青く腫れ上がっている。

これは、飛行機に乗る前に起きた、一連の騒動のせいである。

気の利いたジョークの一言ぐらいいいじゃないか。

それなのに、ティナとユリアときたら……。

過ぎたことを考えても仕方がない。

なんにせよ、現在の問題はケイだ。

ティナのレア写真はともかく、僕がいたぶられるところもきっちりカメラに収めていた。

普通止めるだろうに。

とにかく、あの写真を使って変な記事でも書かれたら大ごとだ。写真を抑える手段は……やはり、ケイに頼み込むしかないだろうか。

手紙では普通、二週間はかかる。

慈悲深い彼女のだ、それぐらいは待ってくれるだろう。支払う対価は大きいだろうが。

っん、っん。

ふいに右ほほに違和感を受ける。

「ん」

振り向くと、ユリアはほほを膨らませ待ち構えていた。はたから見ればかわいいのだが、その目はジトっとこちらを見ている。

この数時間何度も交わした言葉を口にする。

「ごめん、ごめん」

僕が素直に謝った。

「兄さんは今日、何度その言葉を口にした？」

ユリアの口から紡がれたのは、まったく予想外の言葉。いままでだと、ため息について許してくれたのに。

「軽く数えて、70回以上かな」

数えているはずないよ。

僕は肩をすくめながらうそぶいた。

「そう」

ユリアは僕の嘘を見抜いているといわんばかりのため息をつく。

「兄さんは本当に許してもらおうと思っているの?」

「うん」

これは本当。

「本当に悪いと思っているの?」

「うん」

これは嘘。

「なら、罰を与えなきゃね」

「え」

理解が追い付かない僕に、ユリアは諭すように続ける。

「罪を憎んで、人を憎まずというでしょ」

「うん」

「だから、私は兄さんのことを憎んでないよ」

「ありがとう」

それを聞いたユリアは気恥ずかしそうに、でもどこか嬉しそうに微笑んだ。

「でもね、罪を犯した人には罰を与えないといけないよね」

「そうだね」

その通りだ。

だが、それには規定がある。

罪を犯した者に同じ罰を与えようと、人間は考えないのだ。倫理的問題もあれば、心情的問題もあるから。

そのための法律であり、軍規である。

「だから、兄さんへの罰を考えただけ」

「へ？」

「兄さんが今日、謝った回数だけお菓子を作って」

「なんだ、そんなこ……」

僕は了承しかけて言葉に詰まった。
待て。

いま、ユリアは何と言った。

何かとてつもないことを言わなかったか？

会話を脳でリフレインする。

そんな僕の目を彼女は覗き込むように近づいてきた。

「兄さんは嘘付いてたの」

「ぐっ……」

上目遣いのまま、どこか気落ちするように言うユリア。
そんなことをされれば、僕に反論の余地もない。

「わ、わかった」

彼女は花を咲かせたような顔になる。

「ありがとう」

無垢な笑顔に、飾らない言葉。

僕は途端にに恥ずかしくなり、顔をそむけた。

そのまま気を紛らわせようと外を流れる風景に目を向けた。

「うん？」

いま遠くで何か光った。

あれは？

僕は確認しようと席を立ち、左目に手を添えた。

『人工魔眼』

目の色が生来の青から赤く染まっていく。

そしてその奥で輝く、黒き五芒星。

ルーン魔術の中で付加の際、失明の危険性を伴う強力な魔法の一種。

「【？】 天より注ぎし至純の光明を以って、汝の真なる姿を晒し出せ」

魔眼の発動とともに、視力が驚異的に上がり目に見えぬ物まで映し出す。

映し出されたのは、異形の一团と赤く輝くクリスタル。
僕の故郷を焦土に変えた、人類最大の敵。

「ネウロイだ」

＊

兄はネウロイを発見した後、すぐに機長室へ向かった。

もちろん、機長たちと基地への連絡のためだ。

報告を受けた機長たちはあわてた風もなく、平然としていた。

一応は、機長たちも私たち200の一員なのだ。

ちゃんと私たちを信頼してくれている。

しかし、基地の管制塔の方ではあわてているようだった。

その様子には私は肩をすくめる。

無理もないだろう。

彼らが聞いているのは、ほぼ非武装の輸送機が一機やってくるだけ。

ネウロイにかなうはずがない。

さらに、敵の位置はここからおおよそ南西に50キロの距離にいる
そうだ。

豆粒のような敵を発見した兄にも呆れるが、ネウロイたちはさらに呆れさせてくれる。

南西部には地中海が広がり、ネウロイの巢はない。

つまり、奴らは遠路はるばるアフリカからやってきたに違いなかった。

＊

一方、基地では警報が鳴り響き、ウィッチたちはブリーフィングルームに集められていた。

「目標はティレニア海沿岸部で補充員2名及び補給物資を乗せた輸送機を救出。

また、これを襲っているネウロイを撃破することです」

「補充員」

「補給物資」

宮藤、ルッキーニはそれぞれの理由で目を輝かせる。

「位置はここから南南西に400キロのティレニア海、上空6000メートル」

「遠いな」

扶桑生のストライカーはともかく、欧州のストライカーでは航続距離ぎりぎりである。

この基地より近くから、ウィッチを出せる基地はあるはずだ。
接近を許せば、上陸の可能性もあり得る。
ミーナは簡潔に答えた。

「ロマーニヤのウィッチは首都防衛のため、出撃できないそうよ」
そうだった。

宮藤たちが乗ってきた扶桑の輸送機が襲われた時も、ロマーニヤは援軍を送れる状況になかった。

「敵の勢力は」

冷静にバルクホルンが問う。

「50キロ地点からの視認では、大型が2、中型が5の編隊。
ただ、小型は多数いるかもしれないそうよ」

「ええ」

「へえ」

悲鳴を上げるリーネと面白そうに反応するハルトマン。

「出撃はバルクホルン、ハルトマン、シャーリーとルッキーニ、リ
ネット、宮藤の以上6名をお願いします」

「全員でなくて、大丈夫なのか」

「ええ。向こうからの要請もあったけれど、ヴェネツィア方面から
のネウロイでない以上、ここを留守にする訳にもいかないでしょう。」

補充員の2名も戦闘に参加してくれるそうだから」

「うむ」

「それと、現地につき次第、グライナー少佐の指揮下に入ってください」

「その……」

「なに、宮藤さん」

おずおずと、手を挙げる宮藤。

「グライナー少佐って誰ですか」

「輸送機に乗っている補充員の方よ。」

優秀な人には間違いないのだけれど……まあ、実際に会ってもらえば分かるわよ」

「はあ」

「他に作戦について聞きたいことはありませんか」

みな思い思いの顔をしているが、緊急事態であることは分かっている。

「それでは、ストライクウィッチーズ出撃」

「「「「了解」「」「」」」」

黒衣の兄妹（上）（後書き）

どうだったでしょうか。

サブタイトルで分かるようにこの話は（上）・（中）・（下）と続きます。

もともと、一つの話で終わらすつもりだったのですが、長くなっ
てしまいこのような形をとらせていただきました。

さて、次は待ちに待った戦闘シーンです。
どうぞ期待ください。

黒衣の兄妹（中）（前書き）

ついにきた戦闘シーンです。
しっかり、ご堪能ください。

黒衣の兄妹（中）

足の遅い輸送機では、敵に追いつかれるのも時間の問題であった。兄は眼鏡を外し、いつもの優しい糸目ではなく少し見開かれた、きりっとした目で帰ってきた。

すでに戦闘モードである。

「これより、第200独立戦闘飛行隊はネウロイの一団と交戦、これを撃破する」

つまりこういうことだ。

兄はこの逃走劇がじれったくなってきたらしい。

あれから、10分は経っている。

ネウロイは牽制するようにビームを放つことはあるが当たる気配がない。

ここは、もう少し援軍のウィッチを待つのが上策のはずだが……。

「敵は大型2、中型5、小型の数は分からないがいると思って間違いないだろう

ユリアは先行し、これを叩け。

俺は中間地点で、輸送機の護衛にあたりながら援護する」

すでに隊長は決断していらしゃる。

私たちの実力なら問題ないということだ。

「了解。カールスラントお得意の電撃戦を見せてあげようね！」

「ああ」

答えるか否か、兄はロングコートを脱ぎ捨てる。
こら、たたみなさい。

口で言っても聞かないので、私がやるしかない。

ロングコートを脱いだ兄の格好はというと、ウィッチの夜戦服に
制服下は黒のハーフパンツ。

私は同じウィッチの夜戦服に制服下は白のパン……ズボンを穿い
ている。

ウィッチの格好はこれが普通なの。

私が兄のロングコートまでたたみ終えたと、そこにはすでに私の
ストライカーが用意されていた。

正式名称、Original Enlwicklug von
Greiner-05 type-Multi

プロトタイプ プレミアムエンジン付き

よく言えた私。

これは兄が使うF型の兄妹種。

私のために作ってくれた、世界でただ一つの機体である。

「早くしろ」

兄が水を差す。

せっかく、私が力説をしていたのに。

心の中で文句を並べながら、ストライカーを履く。

そして、使い魔の耳としっぽを発現させ、MG42を手にした。

発射装置を乗せたリフトが私ごと上昇していく。

外を見渡すと機体後方にネウロイの姿が。

いつの間に。

目測10キロを切る。

これでは兄が焦っていたのも納得がいく。

「ティアム機、行きます！」

私はネウロイに向け大空に飛び上がった。

＊

「やれやれ」

ユリアが飛び立つのを見た途端、ため息が漏れた。

早めに行動を起こして正解だった。

ユリアはいつもと変われず遅いし、敵は思っていたより速い。

降りてきた発射装置に自分のストライカーをセットする。

両肩から背中クロスするように2丁の狙撃銃を背負い込む。

腰の武装たちも確かめ、ストライカーを履いた。

ユリアと同じように使い魔を発現させる。

頭は耳ではなく髪の一部が染まるだけで、腰のあたりには白い尾羽が姿を現す。

リフトが上がり、見えてくる光景。

ユリアもネウロイも臨戦態勢に入っているようだ。

彼女は着実に高度を上げていく。

ネウロイもそれに追従するが性能差は明らかだ。

戦場を分析していると発信準備が整った。

「グライナー機、出るぞ！」

機上に大きな魔法陣が現れ、そこを滑走して離陸する。離陸と同時に、風が吹き付けてきた。意地悪な風だな。

突風でバランスを失いかけた機体をすぐに立て直す。風速は北北東より13メートル。ずいぶんと荒れている。

ネウロイに向かっての追い風。

今日はよく弾が伸びる。

そう思いながら、俺は背中 of K a r 9 8 K に手を伸ばした。

この銃は通称・K a r 9 8 K のグライナーモデルと呼ばれている。特徴は、通常の2倍に至ろうかという長い銃身に弾倉が取り付けられてないことだ。

モットーはより速く、より遠くの敵を確実に貫く。

つまり、一撃必殺の武器である。

もちろん、近接戦闘になればこの銃は使えないわけだが……。

そんな、愛銃を手には俺はネウロイと輸送機の間地点へと向かう。

『聞こえますか、グライナー少佐』

まるで、図ったようなタイミングで無線が入る。

「聞こえてるよ、ミーナ。2か月ぶりだね。

今日も、その美声が聞こえてうれしいよ」

『そうね。でも、いまは戦闘中です。私語は慎みなさい』

さっそく、ミーナがたしなめる。

これだから、生真面目なカールスラント軍人は。

「りょかい」

『なんだ！ 貴様のその気が抜けた返事は！！』

通信に割り込んでくる怒声。

さらに固いカールスラント軍人。

『カールスラント軍人たる者、……』

『すつとくぷ！』

トゥルーデのお説教に割り込んでくる、フラウ。

正直助かった。

戦闘前に煩わしい説教をするのはやめにしてほしい。

「久しぶりだね、トゥルーデもフラウも。元気にしてた？」

『もちろん』

『私はまだ……』

『三人とも無線での私語は慎みなさい！！』

あちゃー。ミーナがお怒りモードだ。

ここはちゃんと真面目にやるか。

「バルクホルン大尉、そちらから機影は見えるか」

『まだだ。心配するな、あと3分、いや2分で着いてやる！』

『トゥルーデ。それはいくらなんでも無茶だよ』

血の上ったトゥルーデが無線の向こうで騒いでいる。

『そちらの状況は？』

『こちらはもうすぐ交戦です』

ミーナの問いに、ユリアが割り込んでくる。

彼女はすでに高度14000メートルまで上昇している。

そして、俺も中間地点で陣取った。

「こちらは目標地点に到着」

『アハト、こちらでもいいけるよ』

「OK。ヴォルケ中佐、これより交戦を開始します」

『了解、御武運を』

手にした銃のボルトを倒し、構える。

俺の発砲とともにユリアが飛び込む手はずだ。

標準に大型ネウロイを捉える。

左目の魔眼を開き、コアの場所を探し出す。

その間にも銃弾に魔力を流し込んでいく。

あった。

コアは機体中央の右奥。

標準を再度コアの少し上に合わせる。

銃身が青く輝き容量の限界を伝える。

『魔弾』

銃身に付加されたルーン魔術を使って銃弾に魔力を注ぎ込む魔法。長所としては銃身にも魔力を注ぎ込むことが可能で、本家に比べて魔法効果が高い。

また、銃弾自体にルーン魔術を組み込むことでさらなる効果を得られる。

反面、注ぎ込んだ魔力の量にも左右されるが、発射後銃身が極度に熱くなり、次弾装填が難しくなる。

発射自体も魔力を注ぐのに時間がかかり、あまり推奨することができないのである。

「【?】 天より注ぎしつぶての如く、我に仇なす者を穿ち蒼を刻め」

放たれた一発に銃弾が、蒼の軌跡を残し大型ネウロイを貫いた。

＊

私は高度14000メートルの上空で大型ネウロイの中から湧き出てきた小型ネウロイ相手に回避行動を続けていた。

距離は高低差も含めて、およそ5キロ。

小型ネウロイも高度10000メートルから散発的に続く、攻撃

を回避するしかない。

無線で連絡して、はや20秒。

戦いになると、慎重さが現れ遅いのだ。

これも電撃作戦じゃない。

援護に向かってくる戦友たちに無線で嘆こうかと考え、無線に耳を傾ける。

『――つぶての如く、我に仇なす者を穿ち蒼を刻め』

聞こえてきたのは、兄の声。

交戦を開始しようとストライカーに魔力を込める。

同時に蒼の光が大型ネウロイを白い破片へと変えた。

待ちに待った、戦いの合図だ。

私は一気に降下を始める。

先の一撃を危険視したネウロイたちは私の降下に気づかない。

まず狙いは追従してきた小型ネウロイたち。

ばれるかばれないか、ぎりぎりまで近づいたところで機関銃が火を噴く。

動かないネウロイなど所詮、的に過ぎない。

また一機、また一機と破片に代わっていくネウロイたち。

どうにか旋回し、弾から逃れたネウロイもいたが、そのくらい予想の範囲内である。

すれ違う頃には、18機いた小型ネウロイが3機まで減っていた。

次の目標は、大型ネウロイの周りを飛ぶ小型ネウロイたち。

先程とは違い、こちらは迎撃体制を整えていた。

ただ、母艦である大型ネウロイが一機落とされ、多数の小型ネウ

ロイが破片となったのは痛いらしく、編隊もつぎはぎに見える。

私はシールドを張り、迷いなくそこに突っ込む。

ロールやヨーなどで細かい軌道修正を繰り返しながらドッグファイトを仕掛ける。

できるだけスピードを落とさないことで、高い機動性を保ったまま降下した。

私はできるだけ落とせるネウロイから落としていった。

その間にも、奴らは包囲網を作っているだろうが心配していない。遠くから聞こえる銃声とともに、次々と撃墜されているだろう。

高度が4000メートルを切った頃、視界に大型ネウロイが映り込む。

むっ。

どこかその存在が気に食わない。

多数のビームを躲しながら、バレルロールで大きく機動をとり、でかぶつの横50センチにつけた。

無線の向こうでは、予想外の行動に兄が驚きの声を上げていた。

当然ここまで近づけば、接触のリスクを伴うが敵の攻撃は当たらない。

斜め後ろに行くビームを見ながら、私はストライカーに力を込める。

OEG-05に搭載されたもう一つのエンジン。

ストライカーの先端部分が開き、噴射口が現れる。

甲高い音を上げながら、火のついた小型のジェットエンジン。

私はさらなる推力を以って加速した。

私はしらみつぶしに攻撃を開始する。

ビームの発射口、小型ネウロイが格納されていた場所、尾翼など。どこも固いし、再生速度が速い。

『ユリア、一度離脱しろ』

大型ネウロイに張り付き、コアを探していると兄が命令を下してきた。

「え〜」

不満の声を漏らしてみる。

『ユリア』

兄は念を押すように言ってきた。

その声は抑えられているものの、焦りの色が見え隠れしている。

「了解」

ここは命令に従うしかない。

目の前の獲物に集中している私には見えないものが彼には見えている。

遠方から、戦場の状態を把握し的確な指示を送ってくる。

おそらく、ネウロイたちの集中砲火が開始されるのだろう。

ただ、私も唯々諾々と従うわけではない。

このでかぶつに傷のひとつやふたつぐらいは付けておきたい。銃を背負い込み、先端部分まで行くと左腰に剣に手をかけた。

「フレーム！」

抜刀と同時に固有魔法を発動させる。

〈フレーム〉はカールスラント語で炎という意味を持つ。

「はああああああ!!」

剣は炎をまとい、私はストライカーに力を入れ、掛け声とともに先端から尾翼までの広範囲を一気に切り裂いた。

切り口からは炎が噴き出し、炎たち再生を阻害し浸食を始める。

大型ネウロイは声にならない悲鳴を上げ、荒れ狂うように反撃を始めた。

しかし、そこに私の姿はない。

すでにプロペラ、ジェットを共に最大出力まで上げ離脱している。包囲網を完成させつつあった、ネウロイたちは私が抜け出したことで編隊を崩し、一丸となり追ってきていた。

ロールしながら背後を見る私は不意に微笑んだ。

まさに飛んで火にいる夏の虫とはこのこと。

ネウロイに一文字を決めた後、離脱のついでにあらかじめ溜めておいた魔力を開放してきたのだ。

いまネウロイたちのいる空間には魔力があふれている。

そして、その魔力は固有魔法の炸薬なのだ。

そうとも知らずに、ネウロイがビームを放ち続ける。

悪い子にはお仕置きをしなくちゃね。

ウインクをするとともに私は固有魔法を唱える。

「フレーム」

夏の虫たちは文字通り、突如起こった爆発に飲み込まれていくのであった。

＊

私たちが戦闘区域に入り、ネウロイたちを視認した時には、もう戦闘が始まろうとしていた。

「すごい」

目の前で繰り広げられる規格外の戦いに私は目を奪われていた。青い一条の光が空に描かれたかと思うと、大型ネウロイが一機墜落していた。

今度は連続発射の銃声音が響く。

そちらに目をやると、高高度から降下してきたと思われるウィッチが通った後には無数のネウロイの破片が舞っていた。

「なんか、すごいよリーネちゃん！」

「う、うん」

私が話しかけるとどこか戸惑ったように答えてくれるリーネ。

「どこがすごいものか」

吐き捨てるように言うバルクホルン。

「あいつらの腕は認めるが、なんだあの編隊は！」

「バ、バルクホルンさん」

バルクホルンは無線が入ったところから、いつものお説教モードのスイッチが入ったような気がする。

「あいつらはロッテの意味が分かってないのか。カールスラント軍人にあるにも関わら……」

「しかたがないじゃないのか？」

「なに！ 何を言っている、リベリアン！！」

言葉を遮ったシャーリーに目くじらを立てている。

「いつもの堅物らしくないぞ。冷静に考えたらどうだ」

「なっ！！」

「そーだよ、トゥルーデ。たった、ふたりだけで輸送機を護衛しながら、戦えるはずないじゃん」

「むう」

『分かってもらえたようだね、バルクホルン大尉』

無線で割り込んでくる、男性の声。

この人がグライナー少佐でよかったんだっけ？

「2週間ぶりよかったよな、エイト」

「おっひさ」

『久しぶり、シャーリーにルッキーニ。』

でも、私語はこれまでにしといてくれよ。

着任早々、ミーナのありがたい話を聞くのはごめんだからな』

「それもそうだ」

グライナーの軽口に同意するシャーリー。

『バルクホルン大尉、そちらの機影は6に見えるが間違えないか』

「ああ」

『なら、三組のロツテを作り一組を護衛に回してくれ。』

残りの二組でシュバルムを組み敵機の迎撃にあたってくれ』

「了解」

的確な指示が送られた後、無線が沈黙する。

聞こえてくるのはプロペラの音と銃声だけ。

私はそこで不意にある疑問を持った。

「シャーリーさん」

「なんだ、宮藤」

「そのですね、グライナー少佐は男の方ですよね」

「ん。そうだよ」

「さっきから無線の先でやたらと、プロペラの音や銃声が聞こえるのはなんででしょう？」

「あそこで戦っているからじゃないか」

シャーリーが指差したのは、ネウロイから離れた場所で、輸送機の護衛をしながら狙撃を行うひとりのウィッチ。

「えええー!!」

予想通りだが想定外の事態に驚きの声を上げる。

「ウィッチは女性しかねないんじゃないんですか？」

「ん、まあ半分正解だな。

男でも魔力を持った、変わり者がいるらしくてさ。

エイトもそのひとりって訳だ」

「そ、そ。

エイトは男性ウィッチ、つまりウィザードなんだよ」

「はあ」

もはや、感嘆の声しか出てこない。

「宮藤!」

「はい!!」

「宮藤はリーネの2番機につき、グライナー少佐と合流しろ。
ルッキーニ少尉はイエーガー大尉の2番機、ハルトマンは私の2
番機につき援護を行え」

戦場が近くなったことでバルクホルンが編成の指示を出す。

『ユ、ユリア』

再び無線からグライナー少佐の声が聞こえてくる。

慌てた様子で女性の名前を呼んでいる。

ユリアとは単独先行している、もうひとりのウィッチだろうか。

その無線が入り、皆が戦場目を向けていた。

戦場では、ユリアと呼ばれたウィッチが大型ネウロイにとりつき
攻撃を行っている。

その周りでは数十機の小型ネウロイと2機の中型ネウロイが包囲
を始めている。

援護をしているグライナーも輸送機に向かってくる小型・中型ネ
ウロイの相手をしながら包囲を遅らせるので手いっぱいだ。

「バルクホルン！」

「ああ」

大尉たちは声を掛け合い、2組のロットテ、シュバルムはネウロイ
に向け飛び出していった。

「まずいな」

手にしたワルサーGew43の弾倉を替えながら呻く。

輸送機に向かってきてきているのが、中型2・小型26。

すでに中型を1・小型は数えていないがかなり撃墜した。

そして、ユリアが大型ネウロイにとりついたことで、ネウロイたちが連携し取り囲みつつある。

背後を横目で見ると、援軍は指示通りに分かれこちらに向かってくる。

護衛に回されたのは名も知らない2人のウィッチ。

さて、彼女たちが使えるか。

あらぬことを疑問視し、再び狙撃銃を構える。

狙うは包囲網を作る小型ネウロイ。

この距離なら、10発で一機でも落せば上出来だろう。

だが、俺は3機は落とすつもりである。

一発、二発、三発。

魔力を帯びた銃弾が放物線を描き放たれる。

発射から5秒。

穿ち、貫き、爆ぜていく。

そして、小型ネウロイは白い破片へと成り果てる。

残りの2機の運命も変わらない。

小型ネウロイを3機撃墜したことで包囲網に穴が開く。

「ユリア、一度離脱しろ」

返ってきたのは不満をはらんだ言葉。

「ユリア」

もう一度諭すように名前を呼ぶと、不承不承の声音で了承が得られた。

だが、ユリアは予想外の行動に出る。
大型ネウロイに剣で切り付けたのだ。
燃え盛る炎を見て頭が痛くなる。
早く離脱してくれ。

心の声が聞こえたのか、ユリアはそのまま離脱を図る。
また、バルクホルンたちが横切るのが目に入る。
待ち望んだ増援が来たのだ。

俺は下がりながら、近づいてくる小型ネウロイを落としていく。

「初めまして、お嬢さんたち。エイト・グライナー少佐だ、よろしく」

合流したところで、軽い自己紹介をする。

「宮藤芳佳です！ よろしくお願いします！」

「リ、リネット・ビショップ曹長です」

元気がありふれているのが宮藤、気恥ずかしそうにしているのがビショップ曹長か。

「宮藤さん、階級呼称を忘れているぞ」

「は、はい!! 階級は軍曹です!」

「よろしい、宮藤軍曹」

さて、ここまでにするか。

戦場は常に動いている。

「さっそくだが、ふたりにはやってもらいたいことがあるのだけど……」

ふたりを覆うよう、上空に向けシールドを展開する。
シールドを張り終えるか否か、ビームが降り注いだ。
予期さぬ事態にふたりは立ち尽くしている。

「ぼやぼやするな! 次が来るぞ!」

「は、はい!」

「りよ、了解!」

新兵のような反応を示している魔女たちを叱咤すると、慌てたような返事をしている。

上空から迫るは3機の小型ネウロイ。

最初にユリアが撃ち漏らした奴らだ。

先ほどまで、高度10000メートルあたりをうろうろしていたので、放置していたのだが、何を思ったか急に降下をはじめ近づいてきた。

奇襲のつもりだったのだろうか。

もっとも、気づかれている時点で意味はないと思うのだが……。

「ふたりとも上方のネウロイは任せたよ」

降下してくるネウロイを宮藤たちに丸投げする。

こっちもやるが多いのだ。

再び弾倉を入れ替えると、正面から近づいてくる敵を撃ち始めた。

＊

私は一度離脱を決めた後、インメルマンターンで向きを変え、取り逃した大型ネウロイのもとへ向かっていた。

『ティアム大尉、先行しすぎだぞ』

インカムからたしなめてくる、バルクホルン。

「トゥルーデ、おそ〜い」

不満を口にする私。

人が戦っている最中に、楽しそうな会話を交わすものだから少し妬けちゃう。

『大尉、真面目に話を……』

「聞かない」

『なっ!~!』

驚きの声を上げる、バルクホルン。

その後ろでは、忍び笑いの声が聞こえる。

『相変わらずだな、ユリアは』

シャーリーの大らかな声。

「シャーリーこそ。ルッキーニちゃんやフラウは元気にしてる」

『元気だよ』

『元気元気』

『貴様は元気すぎる！』

みんな元気ようだ。

「おしゃべりはここまでにしでしょ。ミーナさんのしわが増えても困るし」

『ミーナ中佐がおばばに！！』

楽しそうな声で言うルッキーニ。

ルッキーニちゃんそれは言い過ぎよ。

仮にも無線である。

指令室のミーナがどんな顔をしているか。

「私が大型をやるから、シャーリーにトゥルーデは援護をお願いね」

『了解』

『また貴様は……』

指示を出した後、すぐに意識を無線から遠ざけた。バルクホルンが何か言っているが気にしない。ストライカーの出力を上げ標的に向かっていく。

待ち構えていたのは中型が1に大型が1。

だいぶ数がいなくなっている。

離脱の際、放ったフレームが効いているようだ。

その結果に私はほほを緩める。

だが、次の瞬間驚くものを目にすることになる。

「うそ」

大型ネウロイの中からまた新たに小型ネウロイが湧き出てくる。その数およそ40。

冗談ならやめてほしい。

距離は1キロを切っている。

とても緊急離脱できる距離ではない。

第一、さっき格納庫を攻撃した時にはいなかったはずだ。

だとすれば、このでかぶつが作り出しているしか考えれない。

長期戦になれば不利になることは明白。

私は覚悟を決め、敵の集団に飛び込んだ。

「はああああ!!」

無数のビームを躲しながら、MG42をぶん回す。

私は今一か八かの賭けに出た。

放たれる弾丸には特殊な魔力を込めている。

普通にネウロイを破壊するための魔力ではなく、固有魔法を発動させるための魔力。

これをするとも魔力消費が激しいので、できればやりたくはなかったのだが。

弾丸に着弾と同時に私は固有魔法を発動させる。

「フーーム！」

眩いばかりの閃光がほとぼしり、爆炎が視界を埋め尽くす。

私は急降下し、でかぶつの下方から、いまだ炎の燃え盛る横腹に食いつこうとする。

だが、それを察知した中型ネウロイがコア丸出しの状態で立ちふさがった。

中型といえどコアが見えていれば敵ではない。

M G 4 2を構え直し、引き金に指をかける。

「あれ」

弾はあるのに発射されない。

よく見ると銃身が破損し打てない状況にあった。

「そんな」

ネウロイの発射口が赤く輝く。

この至近距離では回避もままならない。

決死の覚悟でシールドを張るが……。

「？」

赤い魔光は放たれることはなかった。

それどころか、高熱エネルギーの一弾がコアを貫いていた。
白く輝き崩れていくネウロイ。

その銃弾を放ったのは……

「ルッキーニちゃん!!」

『大丈夫か!』

『もう、ユリーは無茶しすぎ!』

二人の少女が敵を牽制しながら、こちらに駆け寄ってくる。

『そくだよ。無茶しちゃだめだよ』

『その通りだ! 大尉の行動には目が余るものがある』

爆炎が消えた空では、カールスラントが誇るWエースが小型ネウロイの掃討をしている。

「みんなあゝ」

思わず、私は涙ぐんでしまう。

いろんな思いが心の中ではじけていた。

小型ネウロイを片づけ、4人の魔女は離脱する私のもとへ集まる。

「あゝ、トゥルーデが泣かしたゝ」

「泣かしたゝ、泣かしたゝ」

「わ、私がか！」

「当然」

おろおろするバルクホルンの様子に、私は無意識のうちに笑っていた。

「泣くか笑うかどちらかにしてくれないか、ユリア」

困り果てたようにいうバルクホルン。

「ありがとう、トゥルーデ」

目尻をぬぐい、顔を上げるとバルクホルンは恥ずかしそうにしていた。

「ありがとう、みんな」

見渡すと、ルツキーニもシャーリーもハルトマンも笑っていた。

「ブレイク！！」

何かに気付いたハルトマンが突然、声を張り上げた。

言われたとおり皆が回避行動をとった瞬間、私たちのいた場所にビームが通り過ぎた。

背後を振り返ると、大型ネウロイが攻撃を仕掛けてきていた。

「ティアム大尉、いけるか」

「大丈夫です！」

破損したMG42を背負い、腰にある剣、フランベルジェを引き抜いた。

「私たちが囧になるから、バルクホルンたちに後は任せるよ」

囧を買って出る、シャーリーたち。

「了解。私とハルトマンが突撃をかけるから、ティーム大尉はその後ろからとどめを」

「了解！」

「行くぞ、ハルトマン！」

バルクホルンはいつものように相棒に声をかけた。
だが、ハルトマンは銃を構えようとしない。

「ハルトマン、早くしろ！！」

怒鳴りつける、バルクホルン。

「えー。だってその必要はないよ」

ハルトマンの思わせぶりのセリフにその場にいた全員が訝しむ。

「ほら」

指差したのは北の空。

ひとときわ、青く、青く輝いていた。

＊

「リーネちゃん、お願い！」

私が追い込んだネウロイをリーネが撃破する。

「芳佳ちゃん！ 後ろ！！」

「ええ！！」

悲鳴のような声を上げるリーネ。

背後を振り返ると、ネウロイがぴったりと位置どっていた。
確実にビームを当てようとするネウロイ。

「このぉー！！」

急にネウロイの視界から消える宮藤。

敵を見失ったネウロイは背後から銃撃を受け、あえなく撃墜される。

「芳佳ちゃん」

安心したリーネが宮藤のもとへ駆け寄ってくる。

「リーネちゃん、ごめんね。心配させちゃって」

「芳佳ちゃん」

『宮藤軍曹、ビショップ曹長。片付いたなら援護を頼む』

「了解です！」

後退をやめた、グライナーが指示を送る。

援護をするため、近づいていく宮藤たち。

不意に私は少佐が何も手にしてないことに気づく。

「ついてこれたらついてきてもいいが、援護を忘れるなよ」

グライナーは意味深な言葉とともに、私たちに向け無邪気な笑顔を見せる。

私が言葉の意味を考えていると、それは形を以って現した。

彼のストライカーの先端部分が開き楕円型をとる。

同時に、耳を覆いたくなるような高音の発し始めた。

『踏ん張れよ』

無線から入ってきた彼の声に従い、ストライカーの出力を上げる。

襲いかかる突風と衝撃波。

崩したバランスをどうにか立て直した。

「だ、大丈夫？ 芳佳ちゃん」

遅れてやってきたリーネは無事のようだ。

私はそれを確認すると、事の元凶を睨み付けた。

それはどんどんネウロイに迫っていく。

むろん、ネウロイもただで近づかせているわけではない。

ビームを立て続けに放ち彼を落とそうとしている。
だが、不思議なことにその攻撃が届くことはなかった。
回避もせず、シールドも張らず、ただまっすぐ飛んでいるだけ。
なのに、攻撃を行っているネウロイたちがダメージを受け、撃墜
されるものまでいる。

何が起きているのか、私にはさっぱり分からなかった。

私にわかる唯一のことは、彼が意地の悪い人だということだ。

「リーネちゃん、行こう！」

「うん！ 芳佳ちゃん！」

私たちは援護をすべく、彼のもとへ駆け出した。

*

時速850キロメートル。

並みの機体では到達することもかなはない、亜音速で俺は目標に
向かっている。

目標はビームを撃ち、こちらを落とそうとするが届くことはない。

固有魔法『空間制御』

これがいまの状況を作り出している原因になる。

字の如く空間を支配下に置き制御する魔法。

そう言えど、この魔法はそれほど便利なものではない。

シールドより脆弱であるし、消費魔力も高い。

また、発動にかかる時間も長いのだ。

一度空間を支配下に置き、それから操作しなければならない。

さらに制御中は常に魔力を消費しないといけないといった、魔の三拍子が揃っている。

しかし、ものは使いようである。

魔法消費量が多いなら効率よく使えばいいこと。

現在、俺が支配しているのは前方たった数センチのわずかな空間。ビームが来るたびに空間を局部的に歪曲させ、それを反射しているのだ。

こうすることで魔法力の消耗を抑えることができる。

また、相手の攻撃を生かし、利用することでこの魔法は真価を得るのだ。

自らの攻撃で自滅していくネウロイたち。

1キロを切ったところで奴らにとどめを差すべく、俺は腰の銃を抜いた。

右手にはモーゼン・シュネルファイヤー、通称M712・グライナーモデル。

左手にはFN ブローニング・ハイパワーが握られている。

弾倉に魔力が行き届くと同時に引き金を引いた。

右手には機関銃のような唸る反動が、左手には着実に弾を吐き出す感触が伝わってくる。

撃ち出された26発もの9ミリルガー弾が魔力を帯びネウロイたちを貫いていく。

一瞬の交戦で生き残ったのは中型ネウロイが一機。

危険を感じたそれはすでに逃走を図っている。
だが、一度捉えた獲物を逃がす鷲はいない。

俺はさらにスピードを上げ、ネウロイに迫る。

逃走に集中するネウロイが反撃してくることはない。

固有魔法の展開をやめ、剣を手にかける。

軽い徒労感とともに、血の気が冷めていく。

一閃。

逃げ切れないと悟ったネウロイは、反撃を試みるも襲いかかるその刃にひれ伏した。

だが、これで終わりではない。

剣を納めるとジェットエンジンを止め、プロペラのみでホバーリングを開始する。

手にするのは蒼き魔弾を放つ長銃。

ボルトを起こし葉莢を排出すると、腰にホルダーから弾を込める。
ボルトを倒し、標準を覗き込み射撃体勢に入った。

魔力を注ぎ込んでいくと、銃身が青く輝き限界を迎える。

「【?】 天より注ぎしつぶての如く、我に仇なす者を穿ち蒼を刻め」

詠唱が終わり、トリガーを引く。

「消え失せろ！ ネウロイ！！」

放たれた蒼き魔弾は容赦なく大型ネウロイのコアに咬みついた。

黒衣の兄妹（中）（後書き）

いかがだったでしょうか。

今回は細かい戦闘描写を描くために、エイト、ユリア、芳佳といった三人の視点で書き上げました。

（もしかしたら、複雑になってしまったかもしれません）

ちなみにプロペラは飛行魔法が大気の影響で可視化する魔導エンジン。
ジン。

ジェットは噴射式魔導エンジンとしておきます。

黒衣の兄妹（下）（前書き）

ウィッチーズとの自己紹介編です。
どうぞ。

黒衣の兄妹（下）

戦闘後、すぐに宮藤たちが駆け寄ってきた。

「は、速すぎです！ グライナー少佐」

「まってゝ。よしかちゃん、しょうさゝ」

情けない声を上げるふたり。

「ふん。お前たちが遅すぎるんだ」

宮藤たちに容赦ない言葉を浴びせる。

しかしながら、彼女たちが遅れるのは当たり前である。

こちらは世界トップレベルの技術を注ぎ込んだ試作機なのだから。

「大体、援護はどうした！」

「あううう」

「す、すみません。すみません」

とどめの一撃に轟沈する宮藤。

ビショップ曹長なんか、ぺこぺこことひたすら平謝りをしている。

「こちら、グライナー。敵は殲滅した。

これより輸送機の護衛にあたり、そのまま基地に向かう」

『こちら、司令部。了解しました。』

あの子たちは頼むわよ』

無線での報告を終え、俺はうなだれているふたりを見て思う。
やりすぎたな。

その自覚はあるが、‘こっち’になっているとこのような言動を
つい口走ってしまう。

反省するならしないといいという輩もいるが、そうできないもの
また事実。

起こってしまった事柄はどうしようもない。
ここからのフォローが大切なのである。

深呼吸をして自分の気持ちを抑えた。
気持ちを整えると、できるだけ優しい声でふたりの名を呼ぶ。

「宮藤さん、ビショップさん」

「「は、はい！」」

どこかおびえたように返事をするふたり。
重症だな。

「さっき言ったことだが、その……ちよつとした冗談だと思ってほ
しい」

「「……………」」

急に、態度を変えた僕についていけないふたり。
とても気まずい空気が流れる。
誰か手を貸してほしい。

祈りが天に届いたか、複数のプロペラ音が響いてきた。
宮藤たちも救われた顔をしている。
あとで誤解が解ければいいが。

「おゝい。えいとゝ、みやふじゝ、リゝネゝ」

手を振り近づいてくるシャーリー。

他にも4つの機影が見える。

みんな無事か。

思わず安堵の息が漏れる。

「えゝいとゝ」

ひとつの機影が速度を上げ突っ込んでくる。

「ちょっと、待って……」

急いで受け止める態勢を作るが……。

「ぐっ」

腹部を突き抜ける鋭い衝撃。

飛びついてきたのはフランチェスカ・ルッキーニ少尉。

生粋のロマーニャっ娘で、子猫のような自由奔放な性格だ。

「こら！ いきなり抱きついてくるにしろ、手加減してくれ」

「えゝ、いいじゃんべつにゝ」

全然よくない。

猛烈なタックルを受ける身にもなってくれ。

「にいーさん」

ふらふらとユリアが飛んでくる。

見るからに危なっかしい。

「おっと」

傍に来るなり、身を預けてくる彼女。

「大丈夫か」

「ちょっと、疲れちゃった」

ユリアは薄笑いを浮かべながら答える。

「すまない無理をさせたようで」

「うん。ぜんぜん、だいじょ……う……ぶ………」

僕は慌てて、ユリアに腕をまわした。

どこが大丈夫だ。

かわいい寝息を立てる彼女を微笑ましく思った。

「すきあーり」

「ふ、フラウ」

「えへへ」

背後から不意に抱き着かれる。

後ろを見てやるとフラウは笑顔でこちらを見上げていた。

愛嬌をふりまくのはエーリカ・ハルトマン中尉。

空ではスーパーエース、陸では自由気ままに生きている。

ともあれ、僕は2人のウィッチに抱き着かれ、片手でひとり抱いている状況だ。

状況だけ見ると、羨ましがられるかもしれないが実際は大変である。

3人ともストライカーを履いているのだけれど、動いている気配がない。

つまりだ、墜落しないためには僕はひとりで4人と各自の装備ぶんの推力を得なければならないのだ。

「ふふん。エイトは人気者だな」

状況が分かった上でからかってくるウィッチ。

彼女の名前はシャーロット・E・イエーガー。

階級は大尉だ。

シャーリーの愛称で親しまれる彼女の興味は速さの探求にそそがれている。

アフリカではこのストライカーも解体されかけた。

「……………」

その隣では不機嫌を顕わにするおさげ髪の少女。

模範的なカールスラント人で知られるゲルトルート・バルクホルン大尉。

規律、規律と堅苦しく沸点の低い彼女。

いまま僕の状態を見て、はらわたが煮えくり返っているはずだ。だが、決して怒鳴ろうとはしない。

僕の右腕で寝息を立てるユリアに気が付いているからだ。

そんな不器用な優しさが彼女の愛嬌である。

それにしてもだ。

いつまでもこの状況は好ましくない。

このままだと、この子たちを連れて基地まで飛行しないといけなくなりそうだ

目の前で噴火しそうな火山にも、鎮まってもらわなければならぬ。

「フラウ、ルッキーニ。そろそろ、離れてくれないか」

「「え」」

不満そうな声を上げたふたり。

きつと話せばわかるはずだ。

「お荷物さんを運ばないといけないからさ」

「むう。しょうがないな」

「アハトはユリアが大事だもんね」

彼女たちはしぶしぶ了承し、解放してくれた。

これで楽に飛べる。

僕は胸をなでおろすと、両手で抱えるためにそっとユリアに左手をまわす。

早く連れて帰ろうと、機首を上げたその時。

「と、でも言うと思った？」

「うじゅ〜。ユリアだけずる〜い〜」

再び、背後からの奇襲。

この度の締め付けはかなり強い。

絶対に離さないと言わんばかりだ。

「ほんと、勘弁してくれよ〜」

僕の虚しい思いは空のかなたに消えていった。

＊

「あらためて、補充員の方々を紹介します。それでは中に入ってください」

僕はいま基地のブリーフィングルームにいる。

頭にたんこぶを作り、グロッキー状態の僕。

結局、3人を連れて飛ぶことになってしまった。

そのうえ、トゥルーデに助けを求めたところこうなったわけだが。

輸送機とともに基地につくと、基地総出で出迎えてくれた。

司令官であるミーナに坂本さん、貴族風のガリアの少女にスオムス、オラーシャの少女。

誘導員の指示の従い、みな無事に基地につくことができた。

ユリアにフラウ、ルッキーニは元氣十分。

その他、戦闘に参加していたものは少なからず疲労の色が見える。ミーナは一番疲労しているだろう僕を氣遣ってくれたが氣丈にふるまった。

彼女たちの名前も聞いておきたいしね。

「こちらはカールスラント帝国から来て下さった、エイト・グライナー少佐です」

「エイト・グライナーです。よろしく」

なんとか笑顔で挨拶をする。
取り繕うのがやっただ。

「同じく、補充員として来て下さった、ユリアヌス・ティアム大尉です」

「ユリアヌス・ティアムです。気軽にユリアと呼んでね」

ウィンクを決めながら挨拶をする彼女。

「もう挨拶を済ましている人もいるようなので、各自で自己紹介をしておいてね」

「「「「「はい!!」」」」」」

元氣よく声を上げる一同。

「それでは解散!」

それだけ言い終えると、ミーナは部屋を出ていこうとする。
おそらく、デスクワークに追われているのだろう。
不意に足を止め振り返った。

「ルッキーニさんとユリアさんは後で私の部屋に来て下さいね」

戦慄するユリアとルッキーニ。

不敵な笑みをこぼしミーナは去って行った。

いったい何をしでかしたのだろうか？

「坂本さんは何か知っているか？」

隣の刀を背負ったウィッチに尋ねた。

サムライと知られている彼女は坂本美緒少佐。

細かいことにこだわらない性格で、大の訓練好きだ。

「さあな。それより、エイト。

久しぶりに表に出て手合せといこうじゃないか」

背中の扶桑刀に手を伸ばす坂本さん。

「なに、なに。面白いことでもするの？」

とフラウ。

「戦闘後すぐに訓練とは見直したぞ！」

坂本さんと同じくトレーニングマニアのトゥルーデ。

「少佐の剣技を見られるとは！」

目を輝かせるガリアの少女。

「面白そうだな」

スオムス訛りの少女が、まだ起き掛けのような顔をする少女を連れてくる。

「グライナー少佐は大丈夫なんですか？」

普通に心配してくれる宮藤さんの言葉が心に沁みる。
僕はその言葉に甘えさせてもらうことにした。

「また明日にでもお願いしますよ」

何度も繰り返すようだが、いまは疲れてへとへとなのだ。

「うむ。まあしかたがない」

坂本さんはあっさりと引いてくれた。
だが、波風は立つわけで……。

「むきー。少佐のお誘いを断るとはどういう見聞ですか!!」

憤慨するガリア人の少女。

僕も一応少佐なのだが。

「おいおい、ペリーヌ。エイトはこう見えても上官なんだ。言動には気をつけろよ」

「少佐がそう仰いますなら」

こちらを睨んだまま、坂本さんの言うことを聞く。
いや、聞いてないかも。

「ペリーヌさんでよかったかな。できれば自己紹介していただきたいのですが」

このままでは埒が明かない。

「わたくしは、自由ガリア空軍602飛行隊のペリーヌ・クロステルマンですわ！

ガリアのブループリエとはわたくしのこと。以後お見知りおきを！」

よくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに胸を張る彼女。

「それではペリーヌ嬢。これから、よろしく頼むよ」

「ふん」

鼻で笑った後、彼女は去って行った。

「やれやれ」

僕たちのやり取りを見ていた坂本さんは大げさに肩をすくめた。

「あつ、ペリーヌさん。行っちゃった」

ミーナのブラックスマイルから立ち直ったユリアが残念そうな声

を上げる。

ユリアは一度3年前に501に立ち寄ったと言っていたな。ペリーヌさんとも交流があったのだろう。

「ミーナに呼び出されてたけど、ユリアは何をしでかしたんだヨ」

「え。えーと、その……」

言いごもるユリア。

「無線で会話中に『これ以上困らせると、ミーナのしわが増えちゃう』ってね」

しばしの沈黙が流れる。

ユリアそれを言っではダメだろう。

ミーナはこの話題には敏感なのだから。

「うむ。確かにミーナには皆が苦勞を掛けさせているからな」

切り出したには坂本さん。

あなたもその一因だとわかっているのだろうか。

「まあ、ユリア。そう思うのなら、ミーナの書類仕事を手伝ってはどうか」

「うん。そうしてみるよ、兄さん」

「うん、うん。それがいい」

だから、坂本さんは分かっているのか。

「ユリア、そろそろそちらの二人を紹介してくれないか」

「え、え〜とこちらがエイラで、こっちの可愛い女の子は……」

「サーニヤダ！」

エイラという名の少女が言い切る。

「サーニヤちゃんっていうの！　可愛い！」

ユリアはいきなりサーニヤさんに向かって飛びつく。

また、悪い癖が始まった。

横目でその场景を見ながらこっそりとため息をつく。

「そんな目でサーニヤを見るナァー！！」

ユリアを阻止すべく動いたエイラさん。

その手は幸か不幸かユリアの胸をわし掴みにする。

「あん」

艶めかしい声を上げるユリア。

その声に一番驚いていたのは胸をわし掴みにしていたエイラさん。
宮藤さんなんかは顔を上気させ、その光景に釘付けである。

「エイラ、やったわねえ〜！！」

目を怪しく光らすユリア。

エイラさんとはとっさに逃げようとするがもう遅い。

決して逃げられない間合いまで詰め寄ると、胸ぐらを掴み、そのまま足払いを仕掛ける。

あれ、柔道なんかいつの間に習った？

投げられたエイラさんは受け身をとろうとするが、ユリアはそれを許さない。

押し倒すと、マウントポジションをとり、胸をもみ始めた。もちろん、エイラさんのをだ。

「お、おまえたち！」

上擦った声を上げる坂本さん。
僕はそれを制止させた。

「何をやっている、エイト」

その行動が理解できないと言わんばかりに坂本さんは睨みを利かせる。

「これは彼女たちなりのスキンシップなのですから止める必要はないでしょう」

本当のところよく分からないが……。

「しかし、風紀上問題が……」

「ここは我々が出る幕ではないですよ。他に適任がいますから。ほら」

目線の先ではひとりの少女が、纏れ合う彼女たちに迫っていた。

「何をしている！ 貴様らは！！」

魔力を発現させて、使い魔の犬耳としっぽを身に着けた彼女。
世界で一番規律にうるさいであろうトゥルーデがこの状況を見逃すはずがない。

ただ、彼女が一步踏みしめるごとに床が割れていく。
ミーナの悩みの種が増えたな。

トゥルーデが近づくと、マウントポジションをとったままのユリアが正面から見上げていた。

「こ、公然の場で、な、なんて破廉恥なことをおこし！ 恥を知れ、
ティアム大尉！！」

怒鳴りあげるトゥルーデに対し、ユリアはニヤリと笑みを浮かべた。

「貴様、へらへらと！」

掴み掛ろうとするトゥルーデ。
だが、ユリアはそれをいとも簡単に躲す。
体勢を崩されたトゥルーデはユリアに投げられた。

「なっ！」

驚きの声を上げるトゥルーデ。
柔よく剛を制すとはこのことである。
倒れた彼女をユリアが襲い始める。

「覚悟してよね、おねえちゃん」

「おおおおお、おねえちゃん！」

いきなり姉呼ばわりされて、動揺するトゥルーデ。
忘れてた。

彼女が姉バカだと知ったユリアは理由をつけては彼女に甘えるようになったのだ。

「だれか見てないで助ける！ 宮藤、ハルトマン、エイトー！！！」

彼女の悲鳴が聞こえる。

いや、聞こえない。

「おいおい、放っておいて大丈夫なのか？」

心配になった坂本さんが聞いてくる。

「大丈夫です。我々は何も見えてないし、何も聞いてませんから」

「大丈夫じゃないだろう！」

やっと気付いた坂本さんは止めるべく、ふたりのもとへ駆け寄っていった。

それと入れ替わるようにふらふらと歩いてくる少女。

「ひ、ひどい目にあったんだナ」

「大丈夫でしたか。エイラさん」

「大丈夫なわけないダロ！」

僕の無粋な質問に怒りをあらわにするエイラさん。

「大体、なんで止めてくれないんだ！」

さらに詰め寄ってくるエイラさん。

「エイラ……」

「な、なんだサーニャ」

消えそうなほどか細い声に狼狽えるエイラさん。

「大丈夫……？」

「わ、わたしはぜんぜん大丈夫ダゾ」

意見を反転させるエイラさん。

「そう……」

静かに答えるサーニャさん。

「お取込み中失礼だが、エイラさん、サーニャさん。自己紹介をしませんか」

気まずい空気になるのを鑑みて、僕は手を差し伸べた。

「先ほど聞いたと思うけど、エイト・グライナー少佐です。」

原隊は最近設立されたばかりのカールスラント軍第200独立戦

闘飛行隊。

それから、ノエル・カールスラント技術省にも籍を置いています。
気軽にエイトと呼んでくれていいよ」

「私はスオムス空軍中尉のエイラ・イルマタル・ユーティライネン
ダ。エイラと呼んでいいゾ」

「私はオラーシャ陸軍中尉のサーニャ・V・リトヴァクです。私の
ことはサーニャと呼んでください」

エイラ、サーニャちゃんとそれぞれ握手を交わす。
待てよ。

リトヴァクかどこかで聞いたような……。
まあいいか。

「ダイヤのエースがエイラで、白百合がサーニャちゃんであった
かな」

「はい……」

「なんかそう呼ばれると齒がゆいゾ」

「ごめんね。でも君たちは有名だから。

絶対に被弾しない未来予知の使い手と夜空を舞う白百合の歌姫は
ね」

「……」

サーニャちゃんは顔を赤く染め恥ずかしそうに俯く。

「こ、こら。サーニヤが恥ずかしがっているじゃないカ」

そう言うエイラの顔も赤い。

「エイトにも通り名のひとつやふたつぐらいあるだろう」

「例えば？」

「そ、それハ……」

「蒼刻の魔術師」

背後から聞こえる無邪気な声。

「フラウ。いつも言っているが、後ろを取るな」

「いただき」

人の言うことなど無視。

眼鏡を奪って逃げて行った。

「ここまでおいで」

すでに追う気力のない僕は放置する。

飽きて戻ってくるだろう。

「追わなくてもいいのですか……？」

まだ、若干赤みを帯びた顔をしているサーニヤちゃんが上目づかいで聞いてくる。

「うーん。問題ないと思うよ」

「そうですか……」

サーニャちゃんは物静かだな。

「あの！」

対極的な元気な声。

「どうした。宮藤さん？」

「私たちもその……グライナー少佐のこと、エイトさん……って呼んでいいですか？」

緊張した面持ちで聞いてくる宮藤さん。

どうやら、戦闘後の一件が尾を引いているようだ。

「構わないよ」

だから、僕は優しく答えた。

宮藤さんは花が咲いたような笑顔を見せた。

すると、宮藤さんは隅で怯えるような目をしてこちらを見ていたリネットさんを連れてきた。

「リーネちゃん、大丈夫だよ。エイトさんは怖くないよ」

「え、でも……」

少し頭が痛くなってきた。

その会話は本人の前でするべきでないだろう。

「兄さんどうかしたの？」

「あゝ、リーネが困ってるなゝ」

「どうせ、いつもの病気のせいだろう」

歩いてくるのは3人のカールスラント人。

どうやら、一段落ついたようだ。

坂本さんはご機嫌そうにブリーフィングルームを出て行った。

それより、何の根拠に病気扱いしているんだ。

失礼だろう。

「どうしたの？ おふたりさん」

お節介症のユリアが駆け寄っていく。

「えゝと、その……」

「ティアム大尉でよかったですね」

「ふたりともちゃんと人の話を聞いてなかったのかな」

ふたりのほほをつねり始めるユリア。

「い、いたいですゝ、ティアナさん」

「大尉、やめてくださーい」

抗議を上げる宮藤さんと今にも泣きそうなりネットさん。
どうでもいいことだが、宮藤さん。
ユリアの性はティアムだぞ。

「うわー、いたそー」

「ダナ」

こちらは完全に蚊帳の外。

「止めなくて……いいの？」

サーニヤちゃんがおずおず尋ねてきた。

「まあね」

僕は言葉を濁しておいた。
いざとなったらトゥルーデがとめるだろうし。
それより気になるのはリトヴァクの性。
何か忘れているような気がしてたまらない。

「あ、あの……」

「ん？ どうした？」

「私の顔に何かついてますか……？」

上の空だったからじっと見つめてしまっていたのだろう。

「いや、何でもないよ。ちょっとボー、としてただけだから」

ここ最近忙しかったのもあるが先の戦闘が響いているな。
今日は早く寝よう。

「はっはん。さーにゃん、私には分かったよ」

「……ハルトマンさん？」

お願いだから、余計なことを言うなよフラウ。

「ズバリ、アハトはさーにゃんに一目惚れしたんだろ！」

「……えっ！」

「ナッ！」

「なに！」

皆が驚きの声を上げる。

僕も開いた口が塞がらない。

そんな様子に僕の眼鏡をかけたフラウはご満悦しているようだ。
謀られた。

追いかけてこをしなかった、意趣返しか。
後悔するがすでにとき遅し。

「貴様という奴は、ばかだ、ばかだとは思っていたがここまでとは！
もはや、カールスラント人の風上にもおけないぞ！！」

「サーニヤをそんな目で見るナー!!」

本日、何度目か分からない怒りを顕わにするトゥルーデ。
サーニヤちゃんを守るように立ちふさがるエイラ。
君たちはからかわれていることに気付けないのか。

背後に視線を感じ振り向くと、少女たちが目を輝かせていた。
いつの間にか意気投合したらしい。
女の子は色恋ものが好きだと聞くからか？

助けを求めようとサーニヤちゃんに目で訴えかけるが逸らされてしまった。

どうしよう。

頭が痛い。

考えるのが憂鬱になってきた。

「宮藤さん、リネットさん。部屋まで案内してくれるか」

「ええええ」

「……エイト少佐大胆です」

「貴様、宮藤やリーネまでに手を！」

「サーニヤは汚れてないんだナ!!」

「兄さん、節操を持って！」

状況が混沌化してきた。
もう誰にも収集不可である。

「誰でもいいから、僕の部屋まで案内してくれ！！ 頭が痛い」

僕は心の叫びを切に訴えるのだった。

黒衣の兄妹（下）（後書き）

どうだったでしょうか？

ウィッチーズの口調はこれで良かったですかね？
気をつけて書いたのですが、自信がありません。

また、紹介できなかったウィッチもいるので次話にまわそうと思います。

お楽しみに。

子犬と子猫と戸惑う驚（前書き）

着任早々、基地を騒がせるふたりの一日はまだ続きます。

子犬と子猫と戸惑う鷺

私たちは兄さんを部屋に放り込んだ後、その足で滑走路に向かうことになった。

私がいまから坂本少佐に稽古をつけてもううのを見るそうだ。

ついてきているのは、宮藤さんに、リーネちゃん、それからトルーデの3人。

フラウとサーニャちゃんはいつの間にかいなくなってしまったし、エイラはそれを探しに行ったのだ。

ちなみに基地の案内は兄さんが起きてから一緒にしてもらっている。

「ユリアさん」

元気にこちらを見上げる女の子。

「なに？ 宮藤さん」

「扶桑の人以外で剣を使って戦う人は珍しいな」と思って」

丸っこい目を輝かせていう宮藤さん。

「確かに珍しいけど、ペリーヌさんも使っているじゃない」

「そう言えばそうですね」

忘れてました、と言わんばかりに照れ笑いを浮かべる彼女。

「でも、ペリーヌさんはネウロイを真っ二つゝなんてしてませんで

したよ」

「そ、それは……いくらなんでも無理だよ」

「なんで？」

「レイピアは切るための武器ではないからな」

「えええ」

この子、喜怒哀楽がしっかりしているわね。

「なんだか優しい剣ですね」

発想がすごい。

「違うぞ、宮藤。古来より剣というものはな————」

トゥルーデの長い解説が始まった。

「リーネちゃん、この基地はいつもこうなの？」

「ええ。まあ」

苦笑いを浮かべるリーネちゃん。

「でも、いい基地よね」

人当たりのいい人は多いし、設備は完備、統合戦闘団だから補給にも困らないだろう。

何より古い遺跡を使って建てられたこの基地は風情がある。

「そうですね」

リーネちゃんも満開の笑みで答えてくれる。

「――にして、いまに至るのだ！ 分かったか、宮藤！」

論点がずれていたであろうトゥルーデの熱弁が終わった。

「頭がぐるぐるします」

かわいそうな宮藤さん。

「つまりはレイピアは突くことに特化した剣ということよ」

「なんだか分かったような気がします」

大きな目が輝き始める。

「でも……」

かと思うと、しゅんっと肩を落とす。

「やっぱり、人を傷つけるのための道具なんですよね」

「宮藤さん」

「私、人が傷つくのは嫌です」

瞳に強い意志を宿らせる彼女。

その意思是微笑ましくて眩しい。

いつの間にか私の手は宮藤さんの頭へと伸びていた。

「ユ、ユリアさん！」

そのまま、くせ毛のある彼女の髪の毛を撫で上げる。

「宮藤さんの言うことも分かるのよ。

けれども、私たちはその道具でネウロイと戦うことができるのよ」

「そうですけど……」

「それにね」

宮藤さんを強く抱き寄せた。

「道具はあくまで道具よ。人を傷つけるのも然り、人々を守るも然り。

何のために使うかは、使う人次第なの。

だからね、そんなに気負うことはないのよ」

そこまで言うとう腕の力を弱めた。

「分かった？ 宮藤さん？」

返事がない。

腕の中を見るとぐったりとした少女がうつろな目でこちらを見上げていた。

「あら」

「み、宮藤いー!!」

「よ、芳佳ちゃん!!」

トゥルーデとリーネちゃんのひとときわ大きな悲鳴が基地に響き渡ったのだった。

＊

一方、ブリーフィングルームからサーニヤを連れだしたハルトマンは中庭へと向かっていた。

「ルッキーニー。おい。ルッキーニ、どこにいるんだ」

基地の中を走り回るシャーリーが前から近づいてくる。

「ハルトマンにサーニヤ。ルッキーニを見なかったか？」

ミーナに呼び出しを告げられた後、知らぬ間に逃げ去っていたのだ。

「私は見てないな。秘密基地にでもいるんじゃないか」

「私もそう思います……」

「そっか……あれ、サーニヤの顔赤いぞ。どうしたんだ」

サーニヤの顔が上気しているのに気が付くシャーリー。

「アハトのいつものあれだよ」

「あれか……」

謎の会話を行うハルトマンたち。

シャーリーはそれだけで納得したようだ。

「それでエイラがないわけか」

「あの……」

「どうした、さくにゃん？」

「エイトさんはいつもそうなんですか？」

「さすがにいつもじゃないな」

「そうだよ。空模様みたいに予測不可だけど」

サーニヤはエイトのことがますます分からなくなる。

「エイトにほどほどにしとけて言ったらどうだ、ハルトマン？」

「覚えてたら言っとくよ」

「覚えてたら、か。まあ、いいや。」

「そうそう、ルッキーニ見つけたら教えてくれよ」

それだけ言い残すとシャーリーは去って行った。

さすがは世界最速を目指すウィッチ。

留まることを知らない。

「ハルトマンさん。話しておきたいことって？」

サーニヤは話を切り出した。

シャーリーの姿を見て不安になってきたのだ。

エイラもいまごろ自分を探し回っているに違いない。

「たいしたことじゃないんだけど、ちょっとね」

窓枠に飛び乗ってそこに座る。

ポンポン、手で隣をたたいた。

横に座れということだろう。

サーニヤも飛び乗りおとなしく横に座った。

「サーニヤはアハトのことどう思った？」

アハトとはエイトのことだろう。

「少し変わった人かと……」

「あはは。確かに変わり者だよな」

声と立てて笑うハルトマン。

あなたがそれを言うのはどうかと……。

「でも、面倒見がよくって根は優しんだよ！」

まるでトゥルーデみたいに、と自慢そうに言うハルトマン。
次々と想い出話を語り続ける。

子供のようにはしゃいで語るそのさまは年上の中尉には思えない
ほどだ。

サーニャは知らず知らずのうちに笑みがこぼれていた。

「くすっ。エイトさんのことよく知っているんですね」

「JG52にいた頃からの付き合いだからね」

JG52と言えば、カールスラントの言わずと知れた先鋭部隊で
ある。

「配属されたときはみんな驚いていたよ。

本土防衛中に優秀な新人が来るって聞いてたけど、まさか男だも
んな」。

一部では有名だったみたいだけどさ。

未知の魔法使いとか、部隊をまともな上げ通常兵器だけでネウロイ
を撃破する男とか、っつと」

ハルトマンが言い終わると、聞き慣れた声が聞こえてきた。

いつもは頼りがいがあるのにとどき情けない声を上げる、あの
人の声。

「エイラがさーにゃんをお探してみたいだね」

すつ、と窓枠から降りるハルトマン。

「あつと、わすれてた！　アハトは女ったらしなところがあるから
気を付けろよ」

さらつと、とんでもないことを言いながら、ハルトマンは手を振
り去っていった。

「さーにゃ、さーにゃ」

ハルトマンと入れ違うようにやってくるエイラ。

「エイラ、ここよ」

サーニャは小さく手を振りながら答えた。

「サーニャー！！」

エイラは探し物を見つけ顔を綻ばす。

「サーニャどこいってたんダ？」

「どこってここだけど……。どうしたの？」

おかしなことを言うエイラ。

「ナ、ナンデモナイヨ。そ、それより、そんなところに上ってたら
危ないゾ。」

ほら、手を貸してやるから降りようナ」

差し出される温かいエイラの手。

「ありがとう、エイラ」

サーニャはそっと、差し出された騎士の手を取るのだった。

＊

「ん」と。いま何時だ？」

目覚めると外からは眩しく夕日が差し込んでいた。部屋に入るとすぐに眠くなって、ベットに倒れこんだんだっけ。ここ最近、徹夜も多かったしな。

服装を見ると、制服のままだった。

ところどころしわになっている。

うわ、ユリアに見つかりと大変だな。

彼女は几帳面な性格で服装についてもうるさいのだ。

それはさておき、不可解なことがひとつ起きている。

僕の体にはブラケットが掛けられているのだ。

たたまれてベットの上に置いたあるのは見た。

だが、起き上がる気力のない僕はそのまま夢の中に。

となると誰かが掛けてくれたと考えるのが妥当だろう。

ユリア・服の状態を見て却下。

トゥルーデ・ご立腹のようで部屋には来ないだろう。

リネットさん・怖がってたので部屋には来ないだろう。

宮藤さん・可能性はあるが、ユリアに捉まっていると考えるのが妥当だろう。

一度部屋にきたメンバーを考えたがありえないな。
だとすると、坂本さんは……なしで、となるとミーナかな。
送っていた書類に間違えでもあったんだろうな。
さて、お礼もかねて書類を直しに行くか。

おもむろに起き上がろうとして、右足の違和感に気づいた。
重いし、何とも言えない感触がする。

まさか！

勢いよくブランケットをめくりあげた。

「フラウウ」

いた。

やっぱりいた。

空戦と寝ることに関しては天才の金髪の少女。

その少女が下着姿で、人のベットに潜り込んで丸くなっていたのだ。
だ。

このような奇行はときどきある。

いや、あったと言った方が正しいだろうか。

なにせ、五年前の話だ。

あの頃は野戦も多く、寒い中外で野宿も珍しくなかったが。
驚きつつも、呆れつつフラウを起こそうとする。

「起きろ！ エーリカ！」

「あと、さんじゅっぷん」

まるで、寝言を当たり前のように呟く。

「わかった。あと三十分後にはきちんと起きるんだよ」

仕方なく了承し、僕はベットから抜け出た。

それから、床に投げ捨てられた制服を見てため息をついた。

トゥルードはいったいこの子に何を教えているんだ？

空を仰ぎたい気分になってくる。

ぼやいても仕方ない。

無造作に置かれた制服に手をかけた。

はらり。

制服の中から一枚の布きれが舞い落ちる。

「!!」

姿を現したのは制服下。

慌ててフラウを確認すると、ブランケットはちゃんと掛かっていました。

ひとまず、安堵の息を漏らす。

制服をたたみ終えた僕は椅子に座りその扱いについて考え始めた。

男である僕が年頃の女の子であるフラウのそれに手を出すのはふさわしくない。

かといって、放っておく気にもならなかった。

ウィッチの制服下とは一応彼女たちの肌着でもある。

床に放っておくのは衛生的にはないだろう。

フラウを起こして、穿いてもらうか。

制服の内ポケットから取り出した銀時計をみる。

まだ、約束の時間まで28分もある。
さすがに起こすのはかわいそうだ。
すると手段は一つしかないわけで。
僕は立ち上がりそれを拾い上げた。

「兄さん、起きてる」

ユリアがノックもなしに入ってきた。

入り口でぴったつと止まる彼女。

その視線は僕が手にしている物に注がれている。

「何をしているのかな？ エイト兄さん」

扉をものすごい勢いで閉めたユリア。

にこにこ笑みを浮かべながら近づいてくる。

目は笑ってないし、使い魔の耳やしっぽまで発現させている。

体全体の発汗から汗が噴き出す。

この光景は一年間、何度か見てきたものに酷似している。

生存本能が逃げろと伝えてくるのだが、足はなかなか動いてくれない。

第一、逃げたところで固有魔法で爆破されれば勝ち目はない。

それはもう経験済みだ。

「何を持っているのかな？」

僕の右手には薄緑のローグが！

とっさに隠そうとするが、もはや意味をなしてない。

むしろ火に油を注いだようなものだ。

「兄さんがこんな変態になっていたなんて、私気づかなかったな」

「ち、違うんだ！　ユリア、とりあえず落ち着こうな、な」

焦るとろくな言い訳も浮かばない。

とりあえず、僕が落ち着け！

「私は落ち着いているよ」

まったく説得力がない。

交渉は失敗に終わったのだ。

じりじりと後ずさりを始める僕。

「！」

足が何かに引っかかり、バランスを崩した。

重力に引かれ尻餅をつく。

見下ろしてくるユリア。

とうとう、逃げることも許されなくなった。

不意に視界の端でもごもとブランケットが動き始めた。

「いたいよ、アハト」

場違いな声が部屋に響いた。

足元を見るとベットから、か細い足が突き出していた。

「え、えええ」

第三の人物に目を白黒させるユリア。

「そこにいるのは、もしかしてフラウなの？」

「そ〜だよ〜」

フラウは呑気に答える。

「そ、そう」

すでに毒気を抜かれているようだ。

ユリアは頭を押さえ暫し考えた後、こちらに向き直した。

「事情は大体、分かったわ」

笑顔で手を差し伸べるユリア。

「まったく、誤解だといっただろ」

ユリアが本当に聡い子でよかった。

安心して手を取ろうとする僕。

だが、そうは問屋がおろさなかった

「へ？」

がっしりと掴まれる僕の手首。

「でも、このままだと腹の虫がおさまらないから」

妙なことを言い始めるユリア。

あれ。

使い魔が出たままだと、いまになって気づいた。

「フラーム」

慈悲の女神は僕に微笑みはしなかったのだった。

＊

「くしゅん」

ユリアにたたき起こされたフラウの第一声。

さすがにねぼすけフラウでも、このときばかりは駄々をこねずに起き上がった。

「すーすーする」

下着……姿のフラウはユリアにブランケットを纏わされている。

「あっ」

僕の手元にある制服下を見つけて、ニヤリと笑みを浮かべる。

「エイトのえっち」

「なっ」

からかわれているのは分かる。

だが、この理不尽さはどうすればいいのか。

「そんなに私のがほしかったんだ」

ブランケットで顔を半分隠し、上目づかいでこちらを覗いてくる。
何を言い出すんだ、この子は！
啞然として言葉も出てこない。

「どうなの？ エイト」

急かさんとはかりに言葉をたたみ掛けてくる。
黒い悪魔の異名は伊達ではない。
だが、このまま言い負かされるわけにもいかない。
何より僕のプライドがそれを許さなかった。

「確かにエーリカは魅力的だよ」

甘い言葉を投げかける。

突然のことに目が泳ぎ始めるフラウ。
反撃開始。

「さらさらと流れ、輝く、ブロンドの髪も。まるで、水面に映る月
ように揺れる、愛らしいそのブルーの瞳も」

彼女の顔に手を添え、一言一言、囁みしめるように口に出していく。
く。

「ほのかに香るミルクのような優しい匂いも……って、何笑っているんだ！」

吹き出すように笑い声をあげるフラウ。
僕は真剣にやっているのに。

「だって、伯爵みたいなことを言い出すんだもん」

目尻を拭うフラウの顔は少し赤みを帯びているようにも見える。
ちなみに伯爵とはJG52時代の同僚のクルピンスキーさんのことである。

クルピンスキーさんにはよくしてもらった。

いまのも彼女直伝の技なのだが……。

「それにそんなもの持って言われてもね」

指摘されて、顔に血がのぼるのを感じた。

恥ずかしい。

こんなものを持って、口説いている僕はさぞ間抜けに見えただろう。

「はあ」

傍観していたユリアがため息をつくとき、こちらに歩み寄ってきた。

「もういいです。兄さんはあっち向いてて」

フラウの制服下をひったくって、窓のほうを差す。

僕はおとなしく指示に従った。

ああ。

差し込む夕日が眩しい。

落ち着こうと深呼吸を繰り返す。

3、1 4 1 5 9 2 6 5 3 5 8 9 7 9 3 2 3 8 4 6 2 6 4 3 3 8 3
2 7 9 ……。

頭の中では円周率を並べ、雑念を追い払う。

「はい、シャツ」

「ユリア着せて」

「自分で着なさい！」

「ちえ」

「あゝ、もゝ。ボタン掛け違えてるじゃない。
ほら、おとなしくする」

「はゝい」

背後では姉妹のような微笑ましい会話が聞こえてくる。
結局、世話好きのユリアが着せてあげるようだ。

「腕あげて」

「こう？」

「そうそう。はい次、左手通して」

「うゝん、ユリア。アハトは何時からあんな変態さんになったのか
な？」

余計なお世話だ！

いけない。

いま、振り向きそうになった。

「昔はこんな風じゃなかったんだけど、フラウは分かる？」

「分かんない。もとから変人だけどさ」

「分かる、分かる。兄さんは逸脱行動が昔から多いからね。あつ、襟が曲がっているでしょ」

「えー。ユリア、それぐらいいいよ」

「だーめ。身だしなみだけはちゃんとしないと」

「むー。なんかトゥルーデみたい」

「はい、ズボン。これぐらい自分で穿きなさいよ」

「ユリア、ありがとう」

「どういたしまして」

着替えが終わったようだ。

盗み聞きしておいてなんだが、僕は意気消沈気味である。

「終わったわよ、兄さん」

「ああ、分かった」

重い気持ちで彼女たちのほうに向く。

「アハト、どうしたのかな？」

「さあ？」

不思議そうな顔をするフラウに、肩をすくめるユリア。
絶対演技だろそれ。

「まあ、とりあえず座って話しましょう」

それには同意だ。

僕は手短にあった木箱を手繰り寄せる。

他の二人は椅子に座りテーブルを囲んだ。

「どうせ、盗み聞きしてたんでしょ。兄さんはどう思うの？」

話題を切り出してきたユリア。

普通、本人に聞くか！

心の中で呆れと憤りが混ざり合う。

「何の話だ？」

だが、ここは平然を装っておいた。

「しらばっくれても無駄だよ」

釘を刺してくるフラウ。

「アハトが嘘つくとき、耳がぴくぴくするんだもん」

耳に手を当て確認する。

「やっぱり盗み聞きしてたのね」

「アハト、わかりやすい」

にこにこと笑う彼女たち。

どうやら鎌をかけられたようだ。

「兄さんはどう思っているのかな？」

「かな？」

目を輝かせるふたり。

「僕は変人でもないし、変態でもない！」

きっぱり宣言させてもらう。

「自覚症状がないようね」

「少なくとも、変人さんだよ」

見事に玉砕。

「例えばどんなところが？」

キングがやられても、まだ兵たちは動ける。

反則だけど。

「言ってほしいの？」

「男なのに魔力があるところとか、性格がころころ変わるところとか、双子の姉妹を連れだして堂々と買い物に行くとところとか、その

歳で女の子と寝ても普通だって思っているところとか、女の子のズボンを堂々と触っているところとか、……………」

「わ、わかった！ 僕が間違えてました」

あえなく、白旗を上げた。

さすがに後半あたりは恥ずかしいぞ。

「あら。自覚症状があったの？」

「だね」

フラウ、そこで同意しないでほしい。

「そこで変態兄さんに質問です」

「変態とは認めてないぞ！」

変人とは認めてしまったわけだが。

「わたしのズボン弄んどいて、まだなにを言うつもりかな？」

「ぐっ……」

反論の余地がない。

「それでどうしてあんなことしたの？」

哀れむような目で見てくるユリア。

「……床に放っておくのはいけないと思って、制服と一緒にたたもうと思っていたんだよ」

僕は悪いことはしてないはずだ！

「どうして、ズボンだけ持っていたの？」

「それは……その……」

察してほしい。

「せくしーぎやるのわたしに惚れたのか」

フラウは立ち上がり、曰くセクシーポーズをとる。

「……」

「……」

しばしの沈黙。

「ユリア、ユリア。アハトがひどいよ」

フラウはユリアに泣き付き始めた。

泣き付かれた本人も珍妙な表情をしている。

「ほ、惚れてはないけど魅力的なのは確かだよ」

見ているこっちがいたたまれない。

「ほんと？」

涙目で見上げてくるフラウ。
なんだか、捨てられた子犬みたいだな。

「ああ。本当だよ」

たちまち破顔していくフラウ。

「ありがとう」

舌足らずな言葉でお礼を言うフラウ。
やっぱりこの子には笑顔が似合うな。

「話は変わるけど、ズボンの件どうするの兄さん？」

咳払いをして話題を変えるユリア。

「どうするって……」

思い悩む僕。

「うやむやにしようとしても無駄だよ」

どこか楽しむように言うフラウ。

「みんなに言いつけちゃうんだからね！」

「っ……！」

絶句でものが言えない僕。
心臓が止まりかけたぞ!!

「フラウ、悪かった！ ホント反省してるから考え直してくれ!!」
両手を合わせて、頼み込んだ。
万が一、噂が広がれば風評被害が半端ない。

「ふん、どうしよっかな」

ニタニタと笑顔を浮かべるフラウ。
完全に弄ばれている。
僕は助けを求めるべくユリアに目を向けた。

ニコツと微笑むユリア。
その表情と裏腹に細められた目の奥で瞳が妖しく輝いていた。
胸騒ぎがしてならない。

「フラウもその辺で許したあげてね」

「え、なんで？」

ユリアは優しく説得を始めた。
僕の考えは杞憂に終わったようだ。

「それはね……」

フラウの耳元で耳打ちを始めるユリア。
訝しそうに耳を寄せるフラウだったが、途端に表情が変わった。

「ユリア、てんさ〜い」

褒め称えるフラウ。

いったい何を吹き込んだのか知りたい。

「アハト、アハト」

腕に絡みついてくるフラウ。

その表情はやけに嬉しそうだ。

「許したあげるから、お菓子作って」

なんだ、そういうことか。

お菓子で釣るとは考えたな。

「わかった。今度、とびっきりのを作るよ」

フラウの細い髪をくしゃくしゃとなでてやる。

えへへ、と満足そうな笑顔を見せてくれた。

「ありがとな、ユリア」

今回の功労者に心から感謝した。

僕ひとりでは悪魔の暴走は止められなかっただろう。

「お安い御用よ、兄さん」

妹君はウィンクを返してくる。

「それじゃあ、私は買い物にでも付き合ってもらおうかな」

「それぐらい、いつでも付き合うけど？」

髪をいじりながら明後日の方向を向くユリア。

言ってくればすぐ付き合うぞ。

日用雑貨や支給品で手に入らないものを買いに行くつもりだったし。

「あゝ、わたしも、わたしも」

フラウは高らかに手を上げた。

「お菓子を作ってもらうんじゃないの？」

「それとこれとは別だよ」

僕もフラウと同意見だ。

「兄さんはどう思うの？」

少し上擦った声でユリアが聞いてきた。

「みんなで言っても構わないよ。あつ、トゥルーデも呼ぼうか」

買い物はみんなで言ったほうが楽しい。

ミーナは忙しそうで無理だけど。

「もう、それでいいわよ」

なぜか、ふてくされるユリア。

「次にみんなで休みが取れたとき行こうね」

「は〜い！」

フラウの元気のいい返事が返ってくる。

思い出したようにユリアがふと、口を開いた。

「言い忘れてたけどね」

「ん？　なんだ？」

すっかりもののユリアが言い忘れとは珍しい。

「現金は全部兄さん持ちよ」

「はぁあ！！」

とんでもない宣告に僕はただただ驚くのだった。

子犬と子猫と戸惑う驚（後書き）

どうでしたか？

この話で隊長の自己紹介をするつもりでしたが叶いませんでした。かわりに意外な人物が話の中だけですが登場しました。

ヴァルトルート・クルピンスキー中尉。

エイトたちの元同僚で大の女好き。

そんな彼女に女性との接し方を学ぼうとした新人のエイト。

JG52時代のエピソードもいくつかあるのでそのうち書きたいと思います。

次の話こそ隊長の自己紹介をします。
よろしく。

安穩なる日常の為に（前書き）

どうか、一週間以内に投稿。
急ぎで書き上げたものですが、
お楽しみください。

安穩なる日常の為に

「いててて」

僕はお尻を抑え立ち上がる。

理不尽な約束を承諾させられた後、僕は部屋から蹴り出された。自分の部屋なのに出る時にも入るときも半場強制的である。

「兄さん、体をきれいにしてくださいね」

口調こそ優しくあるが、部屋の入り口には阿修羅がいた。原因は僕の行動にある。

砂埃の付いた制服のままベットで睡眠をとったことだ。

その結果、制服にしわが付き、シャツが汚れたことを咎められている。

それぐらい誰も気にしないだろうに……。

「カールスラントの佐官がそんな身嗜みでどうするんですか!」

見透かしたように、ユリアが叱りつけてくる。

この一年間、耳にタコができるほど聞いたお馴染みのセリフだ。

「分かった。次からは気を付ける」

「前もそう言ってませんでしたか?」

「うっ」

それを言われると痛い。

「シャワールームいかないのか。早くしないと夕食の時間になるよ」

両手を頭の後ろで組んだフラウが、ユリアの後ろから尋ねてきた。

「それもそうね」

ユリアは微笑み返した。

「私は兄さんの着替えを探して後から行くから」

まだ一度も触れてない荷物を横目にユリアが言う。

「フラウ、兄さんを頼んだわよ」

「はい」

「いったい、何を頼むんだ？
悪い気がしてならない。」

「道案内よ。兄さんも基地のことはまだわからないでしょ」

「そうだね。助かるよ」

僕は苦笑いを浮かべた。

やはり、人の親切に邪推をするものではないな。

「アハトは何を想像していたのかな」

フラウがにこにここと近寄ってくる。

「な、なんでもない。それより、ユリアはどうするつもりだ？ ユリアもわからないだろ？」

僕はすぐに話題を変えた。

何度もかき回されてはたまらない。

「私はさっき使ったからシャワールームまでならわかるよ」

言われるまで気付かなかったが、よく見ると彼女の髪がしっとりとしていた。

夕日に映し出される彼女の姿はなんだか色っぽい。

「兄さん？」

ユリアに呼ばれて、はっと我に返った。

「ユ、ユリア、着替えを頼んだよ。ほら、フラウ行くよ」

笑みを浮かべる少女を促し、僕はその場を逃げるように歩き出した。

どうも今日は調子が悪いらしい。

このままだと、また墓穴を掘ってしまいそうだ。

「あゝ、アハト待ってよ」

部屋が見えなくなってきたところでフラウが追い付いてきた。

「つかまえた」

腕に絡みついてじゃれてくる。

「ユリアの前では魔術師殿も形無しだな」

「あはは」

的を射た物言いに僕の口からはかわいた笑声しか出てこなかった。

＊

僕たちは他愛もない話をしながら、シャワールームへたどり着いた。

後から知ったことだが、僕が進んだ方向が逆で相当遠回りをしてきたそうだ。

フラウもわかっていたなら言ってほしい。

それよりも、僕の目の前には難題が転がっていた。

「フラウ、別のところに連れられてくれないか」

「無理。私ここしか知らないからね」

「そうか」

シャワールームについたはいいが標識には〈女性専用〉の文字。おまけに男性入室禁止との注意書きあるし。

「どうしたんだ、こんなところで？」

ちょうど良く、坂本さんが通りかかった。

「じつはですね——」

僕はいま起きている問題の要点をかいつまんで話した。

「——ということですよ」

「はっはっはっはっはっ」

坂本さんの高笑いが響き渡る。

「簡単なことだ！」

「……」

僕は心して坂本さんの妙案を聞くことにした。

「普通に入ればいい」

「え」

シャワールームの中を指さし、根も葉もないことを言いきる。
ちゃんと、説明したはずなのだが……。

「えーと、それはですね……」

ほほを引きつらせながら、言いよどむ僕。

「さー、さー。善は急げだ」

「そうそう、少佐もそう言ってるし問題ないよ」

腕を引っ張るフラウと背中を押す坂本さん。

抵抗もむなしく、どんどん押し込まれていく。

決して僕が非力なわけではなく、彼女たちの力が異常なのだ。
特にフラウは魔力を開放してまで僕を引っ張っている。

「美緒もフラウもなに騒いで……」

シャワールームから現れた赤目赤髪の女性。

我らの隊長、ミーナ・ディートリンデ・ヴォルケ中佐。

気品にあふれ物腰優雅で柔らかい。

歳若い者が多いウィッチ部隊の母親役といったところだろうか。
自由奔放な彼女たちをまとめるかなりの苦勞人である。

「グライナー少佐、ここは女性専用のシャワールームよ」

「そ、そうですね」

背中に冷や汗が流れてくる。

腕に絡みついていたフラウはいつの間にかいなくなっていた。

「少しお話を伺いましょうか」

ミーナは笑顔でこちらを見てくる。

ただ、目が笑っていない。

「ミーナか。なぜそんな殺気立っている？」

僕の後ろからとぼけるように尋ねる坂本さん。

いま僕がここにいることと坂本さんがやろうとしたことが原因です！

「少佐、またあなたなの」

坂本さんの姿を認めた瞬間、ミーナは頭をおさえる。

「ひとまず落ち着きましょうか」

僕は状況を納めるのに全力を尽くすことにするのだった。

＊

「————というわけです」

先ほど坂本さんにした説明にそのあと起きた事実を漏れなく伝えた。

「……そ、そうだったのね」

一応理解してもらえたようだ。

「まったく扶桑の魔女は」

ミーナがひとり、愚痴を言っているが問題ないだろう。

「それでミーナはどうするつもりだ？」

坂本さんが問いかける。

「そうね………いまから設営班に突貫工事で作ってもらうけど、それまでは整備士さんたちの宿舎にあるシャワールームを使ってもらおうかしら」

整備士の宿舎か。

また、遠いのだろうな。

「さすがに遠いんじゃないの？」

フラウが真面目に聞き返した。

「そうね……でも、こればかりは……」

「別に問題ないだろう」

申し訳なさそうに言うミーナときっぱり言い切る坂本さん。
やっぱり性格が出てるな。

「それじゃあ悪いけど、ミーナ案内してくれる？」

「ええ」

ミーナの先導で僕は遠くにある男性用のシャワールームに向かうとした。

「何してるんだ、エイト？」

坂本さんに呼び止められる。

「ここで浴びていけばいいではないか」

「は？」

間の抜けた声が口から洩れる。

何かの聞き間違えだろうか？

「……ここは女性用ですよ」

「別に問題ないだろうに」

「「……………」」

僕とミーナは哑然としていた。

先ほどまでの会話はなんだったのだろうか？

「美緒、少しいかしら」

「なんだ？」

改まるミーナの態度を訝しむ坂本さん。

「美緒はアハトにここでシャワーを浴びたらどういいと言っていたの？」

「初めからそう言っているだろ」

なんとまあ、清々しいことか。

呆れ半分で感心していると坂本さんは腕を組んだままこちらに向き直した。

「というわけでだ！ エイトさっさと行ってこい！！」

「はい！！」

あまりに突然なことだったので敬礼までしてしまう。
こうなった以上シャワー室に突貫する他なかったのだった。

＊

「あゝあ、アハト行っちゃった。面倒なことにならないけいけど」

ハルトマンは遠巻きに事の行方を眺めることにした。
目の前ではミーナと坂本が今後のことについて話し合っている。

「ハルトマン、それにミーナや少佐までこんなところで集まってどうした？」

会話に加わる新たな人影。

バルクホルンだ。

自主トレーニングでもしていたのだろう、首元を見ると汗をかいているのが一目瞭然だ。

「シャワールームの使い方について考えてたのよ」

ミーナが事の次第を話し始める。

「ということは、この中にアハトが入っているのか？」

バルクホルンはとぼけたような顔でシャワールームに目をやる。

「そうなるわね」

ミーナが苦笑するように答えた。

「しかし、困ったな。私もシャワーを浴びにきたのだが」

首の汗をぬぐうバルクホルン。

「一緒に浴びてくればいいじゃないか」

「しょ、少佐！」

「み、美緒!!」

爆弾発言をする坂本。

話していた残りのふたりが素っ頓狂な声を上げる。

「ハルトマンもそう思うだろ」

話に参加していなかったハルトマンに突如話を振る坂本。

「え、私？ んーと、別にいんじゃないかな」

「何を言っているハルトマン！ 貴様はもう少し、いや十分に恥じ

らいを持って!!」

「あの、アハトに〜？ いまさらって感じもするけど」

ハルトマンの発言に息巻くバルクホルン。

当の本人は空を舞う蝶のようにそれをひらりひらりと躲していく。

「トゥルーデも気にしすぎだよ」

「そうだぞ、大尉。見られても減るものではなからう」

バルクホルンは見る見るうちに、顔を羞恥の色に染め上げていく。彼女も異形の集団と戦うウィッチとはいえ、まだ十代の乙女なのだ。

「もう、美緒は何を考えているの！」

ミーナは坂本を戒める。

その彼女の顔も、やはり赤く染まっていた。

「そのような行いは隊長として黙認しかねます！」

ミーナも隊長としての責務がある。

基地全体に異性交遊を禁止する触れも出しいる。

彼女は誰よりもウィッチのことを考えているのだ。

それはここにいる誰もが分かっている。

故に隊長権限を使われれば、押し黙るほかなかった。

「ん〜、とね……ミーナ、その………やっぱいいや………」

居心地の悪い空気を喚起しようとするハルトマン。
だが、なかなか言葉が見つからない。

不意に騒がしい足音が近づいてくる。

これを好機と見たハルトマンは足音のするほうを向いた。
姿を現したのはユリア。

その腕にはエイトのものであろう、服が抱かれていた。

「ユリア、遅いよ」

「それでも急いできたのよ」

心外だと言わんばかりに口をとがらすユリア。

だが、彼女は気づいていなかった。

虎穴に飛び込んでしまったことに。

「宿舎の廊下で走るとは何事だ、ティアム大尉」

「感心できんな」

「え？ え？」

全く状況が理解できないユリア。

まるで蜂の巣をつついてしまったような状況を呑み込めないでいる。

「そーだよ、こけたら危ないよ」

「私はそんなドジじゃありません！」

「でも、廊下で走るのはダメよ」

「うー、ミーナまで……」

来た途端、全員から注意を受けるといふ仕打ちにうなだれるユリア。

「ユリアさんも反省しているみたいだし、みんなこれまでね」

さすがにかわいそうに思うミーナ。

「どうしてそんな焦っていたのかしら？」

聞かれたユリアは背筋に衝撃が走る。

「ミーナは兄さん見なかった!？」

ユリアが焦ったような表情を見せる。

「グライナー少佐ならあそこよ」

ミーナはシャワールームを指さす。

それを見たユリアの顔が厳しくなる。

「もう、兄さんったら。誰かと鉢合わせたらどうするつもりなのかしら」

ユリアは小言をつきながら、足早に中へと入っていった。

「兄さんここに置いてくよ」

中から大声が響いてくる。

数秒後、ユリアが再び姿を現した。

「こんなところに集まってみんな何しているの？」

よく考えれば、シャワールームの前に士官が集まって話しているというのも奇妙な事だ。

「うーと、いとばた会議？」

疑問を疑問で返すハルトマン。

「そうじゃないだろう！」

透かさずバルクホルンがホローを入れる。

「やっぱりそうになっているよね」

バルクホルンの説明を聞いて、苦虫を噛み潰したようなユリア。

「ミーナ提案があるんだけど……」

「なに？」

「兄さんにもここを使わしてもらえないかなって」

「ユリアさん、貴方までそんなことを言うの？」

ミーナは怒ったような呆れたような顔をする。

「そうじゃなくてね、ちゃんと時間を決めてからならどうかなと思
ったのよ」

ユリアは慌てて補足をする。

「なるほどそれなら合理的ではあるな」

坂本は感心する。

「ひとりの為にそこまで譲渡するのはどうかと思うぞ」

バルクホルンはあくまで冷静である。

「あっ、もしかしてトゥルーデはアハトと一緒にいいのか」

「は、ハルトマン！ 貴様は何を言い出す！！」

おちよくるハルトマンにバルクホルンのすました顔が崩れ去る。

「フラウ、トゥルーデ。真面目な話をしているのだからやめなさい」

「は〜い」

「これはハルトマンがな……」

ミーナの一喝で鎮まるふたり。

「でも、向こうに行ったら行ったで大変だよ」

「どういふことだ、ハルトマン？」

バルクホルンが問う。

「簡単なことだよ。いきなり、上官が現れたら気まずいよ」

「軍人たる者そのぐらいで気後れしてどうする！」

バルクホルンは一刀両断する。

「じゃあ、トゥルーデはケッセルリンクやゲーリングが抜き打ちで501を視察しに来ても平気なのか？ 私は嫌だよ」

「それは……いま関係ないことだ」

「そうよ、フラウ。話がずれてきているわ」

ミーナとバルクホルンは真面目に考えるよう諭す。
だが、ハルトマンはそれを気にするそぶりを見せない。

「一緒だよ。軍曹にも満たない人もいる整備士のもとにアハトを送り込んだら、きつと私たちが思ったことと同じことを感じると思うんだ」

ハルトマンの顔に影が差す。

「アハトはああ見えてもいい人なんだから、そういう誤解を持たれるべきではないよ」

「すまない、ハルトマン。そこまで考えていたとは思わなかった」
いつもの戯言だと踏んでいたバルクホルンは誠意をこめて謝る。

「はっはっはっ。ハルトマンの言う通りだ。ミーナも隊長としてウ
イチ以外の隊員にも気をかけてやらないとな」

「……そうね」

ミーナは自らの言動を省みた。
ハルトマンが言ったことはウイチのことを一番に考えるゆえの
盲点だと言える。

「ふふふ」

一同を見て微笑むユリア。

「どうしたの、ユリアさん？」

「フラウが一生懸命になるのが珍しいと思って」

ミーナの疑問に答えるユリア。

「確かに」

「そう言われれば」

「そうね」

一同はハルトマンに視線を投げかける。

「みんなひどいよ。私をなんだと思っているの！」

疑惑の目で見られたハルトマンがむくれる。

「そんなこと言っても、フラウの考えていることはお見通しよ」

ハルトマンの様子を見て、ユリアはとても微笑ましそうに言葉を続けた。

「整備士さんたちに遊び相手が取られ……………」

「ダー……メええ……」

ユリアの言葉を大声で遮るハルトマン。

「ひどいよ、ユリア」

ハルトマンはジト目でユリアを見上げる。

「事実でしょ」

悪びれたそぶりもないユリア。

「ユリアさん、説明してくれるかしら？」

ミーナはことが分からず、図りかねている。

「分かったわ」

ユリアが簡単に承諾をする。

ハルトマンはユリアが余計なことを言わないか気が気でない。

「最初にフラウが言っていた整備士さんたちとの仲だけど、これは問題ないと思うわ。私が見てきた感じだと、どこの基地の整備士さんとも仲は良かったし」

「そう言えばそうね。私が知る限りでも、仲が悪いとは聞いたことはないわね」

ユリアの意見に同意するミーナ。

「ただ、時間は掛かるわよ。理解されるまでフラウの言う通り誤解を持たれるかな」

「当然だな。そんなすぐに打ち解けれる人間など変態でしかない」

バルクホルンもユリアの考えに同調する。

「フラウが一生懸命頑張っていた理由だけど……」

「ユリア、それ言わないとダメ？」

ハルトマンは涙目でユリアを見つめる。

ユリアはそれに女神のような微笑みを返してきた。

「兄さんが整備士さんと仲良くなりすぎると帰ってこなくなるからなの」

「帰ってこない？」

ユリアの意味深な言葉に首をひねる坂本。

「お互い業務をすっぱらかして、ストライカーのことなどの話ばかりするのよ」

「おいおい。それは立派な職務怠慢じゃないか」

坂本は驚くとも呆れとも取れる声をだす。

「でも、ストライカーの開発はアハトの仕事のはずだよ」

ハルトマンは補足を入れる。

「だからと言って人の仕事の邪魔をしていいわけじゃないでしょ？」

「当たり前だ！ 軍人……いや、人としてそのような行為はあるまじきことだ……！」

熱烈に反応を示すバルクホルン。

「そう思わないか、ハルトマン！？」

「えー、何でそこで私に振るの？」

突然、矛先を向けられたハルトマンは心外だと言わんばかりに言い返す。

「決まっているだろう、お前の職務怠慢にもほどがあるからだ」

「ちゃんと空では仕事しているよ」

「空ではだろうが!!」

「むう、地上に降りたらちゃんとしてないみたいじゃないか」

「その通りだ! ハルトマン!!」

「そんなことないよ! 私はちゃんと、ご飯は食べてるし、睡眠もたっぷりとっているよ」

「貴様の場合、寝すぎだ! それに日々の訓練はどうした!!」

「毎日やっています」

「私が起こしているからだろうが!」

「私は頼んでないよ」

「貴様はまだその口で言うか!!」

バルクホルンの背中から怒りの炎が噴き上がる。

「トゥルーデ落ち着いて」

「ハルトマン中尉もいい加減にきなさい!」

ユリアとミーナがふたり掛かりで事を静めに入る。

「はっはっはっ。ミーナもバルクホルンもそう責めるな。」

いい加減なところもハルトマンの一部なんだから」

坂本も高笑いしながら説得をする。

その言葉にやる気をそがれたのかバルクホルンの怒気が次第におさまっていく。

「まあ、ミーナ話はずれたけどそんなわけだから。シャワールームの扱いをどうするの？」

ユリアは多少強引ながらも話を元に戻した。

「困ったわね……」

ミーナの呻き声に一同は水を打ったかのように静まり返る。

彼女は隊長として基地全体のことを考えなくてはならない。

しかし、取り扱いが難しい人が来た、ゆえにミーナは決断を迫られている。

決断をすれば、誰かにしわ寄せがいくことが明確に分かっているから困り果てているのだ。

「話はまとまりましたか？」

シャワールームから出てくる人影。

そんなところから出てくるのはひとりしかない。

この事態を引き起こしている当事者、エイトだった。

安穩なる日常の為に（後書き）

PVアクセス15,000件ありがとうございます。

この場を以ってお礼申し上げます。

次話はPVアクセス15,000件を祝いたと思います。

さて、本編のほうですがシャワールームの話題は続いています。
なかなかストーリーが進まなく、まどろっこしいですがご容赦を。

PV15, 000アクセス記念雑談（前書き）

今回はタイトルの如く、PV15, 000アクセスを記念して雑談を用意して頂きました。

お気に召さない方もいるでしょうが、どうぞ。

PV15, 000アクセス記念雑談

エイト「PVアクセス15, 000件を祝してかんぱーい」

エーリカ&ユリア「かんぱーい」

エイト「まさか、半月で15, 000アクセスもしてもらえんとは思わなかったよ」

エーリカ「だね」

ユリア「これも読者様々よね」

エイト「その通りだよ。読者の皆様この場でお礼申し上げます」

三人「『魔術師の戦律』を読んでいただきありがとうございます!!」

ユリア「ところで兄さん、何で私の部屋で祝杯を挙げているの?」

エイト「僕の部屋はまだ片づけが終わってないからね。それに、ユリアは二人部屋を一人で使っているから広いから」

エーリカ「そーだよ。ユリアは贅沢だよ! 二人部屋を一人で使うなんて」

ユリア「私に文句言わないでよ!」

エーリカ「じゃあ、アハトということか説明してよ」

エイト「それはちょっと秘密かな」

エーリカ「ぶうゝ、けちゝ」

エイト「むくれないでくれよ、フラウ。ほら、これあげるからさ」

エーリカ「わあゝ、お菓子ゝ」

ユリア「お菓子で買収って……」

エイト「ユリアもだろ。あつ、グラス貸して」

ユリア「はい。ありがとう、兄さん」

エーリカ「もぐもぐ……ほんひふえヴあ、はんでえおはけじよのいほ」

ユリア「物を呑み込んでからしゃべって！」

エーリカ「んゝ……はゝ。お酒はないのか？ 祝いごとの席では普通だろゝ」

エイト「それだとユリアが仲間外れになってしまうからね」

ユリア「お酒ぐらい飲めます！ 子ども扱いしないでくださいー！！」

エイト「でも、ユリアは15歳じゃないか」

ユリア「私はもう16歳です!」

エイト「……あれ(汗)」

エーリカ「アハトはおっちょこちよいだな」

エイト「ごめん、ごめん。ちょっとした思い違いだね」

ユリア「まったく、兄さんは」

エイト「そんな怒るなよ。ユリアも昔はおっちょこちよいだったんだから」

エーリカ「えゝ、ほんと?」

エイト「本当だよ。何もないところで転ぶし、塩と砂糖を間違えてケーキ焼くし、挙句の果てには――」

ユリア「兄さん(怒)!!」

エイト「はい!!」

エーリカ「(ユリアが怒った)」

ユリア「本気で謝る気があるんですか!？」

エイト「……………あるよ、絶対あるよ!」

エーリカ「なんか、ウソっぽい」

ユリア「そうね。お仕置が必要よね」

エーリカ「やっちゃえ、やっちゃえ」

エイト「待ってくれ！ 取りあえず魔力を開放させないでくれ！
エーリカも焚き付けないで！！」

ユリア「問答無用！ フラーム！！」

エイト「ちょっ……………」

エーリカ「ユリア、やりすぎだよ」

ユリア「これぐらいのお灸を添えるのがちょうどいいの」

エーリカ「爆炎は防ぎきっているけど、衝撃で頭を壁に打ってうずくまっているのか」

ユリア「なんならフラウもやられてみる？」

エーリカ「うえゝ、やぶ蛇だ」

ユリア「冗談よ（笑）」

エーリカ「（いまのを見た後に、冗談って言われても……）」

ユリア「失礼なこと考えてなかった？」

エーリカ「んゝ、何のこと？」

ユリア「とぼけても無駄よ。フラウが嘘つくときは鼻が膨らむからね」

エーリカ「うわゝ、ほんとだゝ」

ユリア「そうそう、嘘ついたらすぐばれるんだから……って、そこ耳でしょ！」

エーリカ「ヘルリツヒ！ 良い、のりつつこみだよ」

ユリア「……なんだか褒められた気がしないわよ」

エーリカ「あはは。こんな単純な手に引っかかるのはアハトかトウルーデだけだよ」

ユリア「それもそうね」

エイト「わかりやすく悪かったな」

ユリア「起きても平気なの？」

エイト「誰かさんのせいで、頭がぐらぐらするし、ぶつけたところが痛い」

ユリア「私は悪くないからね！」

エーリカ「アハトたちって、ホント兄弟仲いいよな」

ユリア「……そんなことないわよ」

エイト「大体、こんなもんだよ」

エーリカ「えー、アハトもユリアもべったりって感じだよ」

エイト「べったりって……」

ユリア「そんな訳ないじゃない！ 2年間も音沙汰なしの時期があったんだから」

エイト「正確には1年半」

ユリア「うるさいわね」

エーリカ「やっぱりべったりだ！」

ユリア「違うわよ！！」

エイト「もう、それでいいや。でも、フラウのところもそうだろう？」

エーリカ「わたし？ そうでもないよ」

エイト「僕にはそう見えないけどね」

ユリア「そうよ。ウルスラちゃんも会いたそうにしてたし」

エーリカ「ほんと!？」

エイト「感激するのはいいけど、ひとまず席に戻ろうか」

エーリカ「むう、これは一大事件なんだよ!」

ユリア「一大事件って言うほどでもないわよ」

エーリカ「ユリアも知ってるでしょ、あの子なかなか会ってくれな
いんだよ!」

エイト「それは君が相手の都合を考えずに訪れるからね」

エーリカ「でも、血を分けた兄弟だよ。会ってくれてもいいじゃない
いか。前にユリアと訪れたとき、エイトは簡単に会ってくれたのに」

ユリア「私と兄さんは血を分けてないわよ」

エーリカ「そうだけど……」

エイト「ウーシュは研究者なんだ。機密扱いのものも多く取り扱っ
てるから、一個人として簡単には動けないよ。フラウも分かってく
れるね?」

エーリカ「……はうい……」

ユリア「へ兄さんのせいでフラウがへこんじゃったじゃない」

エイト「へぼ、僕のせいかな?」

ユリア「へほら、何とかして」

エーリカ「……」

エイト「ここだけの秘密なんだけどね……フラウは毎週ウーシュに手紙書いてるよね」

エーリカ「何で知ってるの!!」

エイト「まあ、いろいろあってね。それで、ウーシュがどんな感じで手紙を待っているか知ってる?」

エーリカ「……んー、分かんないや」

エイト「浮足立ってるんだよ(笑)。あのウーシュが」

エーリカ「ええ!!」

エイト「他にも手紙が来る前日なんてそわそわしてたり、来るのが遅れると不機嫌になって僕にあたってきたりしてね。だから……」

ユリア「だからね、ウルスラちゃんもフラウのことを大切に思っているはずだからね」

エーリカ「そうだったんだ……」

エイト「(ユリアに良いところ持っていかれた)」

エーリカ「えへへ。エイトもユリアもありがとね」

ユリア「どういたしまして。今度会いに行くときは、ちゃんと連絡入れてから行こうね」

エーリカ「うん、そうするよ」

エイト「是非ともそうしてあげてね。ウーシュも喜ぶだろうし。……とそれとね……………」

ユリア「兄さん、どうしたの？」

エイト「そのだな……いまの話、秘密にしておいてくれよ」

エーリカ「えゝ、なんで？」

エイト「ウーシュにばれたら、フリーガーハマーの餌食にされかねないからね」

エーリカ「どうしよっかなゝ」

エイト「悩まないでくれるか」

エーリカ「内緒にしといたあげるよ」

エイト「助かる」

ユリア「全く、もう……兄さんは口に気をつけてよ」

エイト「どういうことだ？」

ユリア「口は災いの元っていう扶桑のことわざは知っているでしょ。兄さんはただでさえ、失言が多いんだからね。自覚してる？」

エイト「分かった。次から気を付けるよ」

ユリア「（ホントかしら？）」

エーリカ「アハト、アハト」

エイト「どうした、フラウ？」

エーリカ「大事なことに気付いたんだけどさ、今回って15, 000アクセス記念だよな」

エイト「そうだけど……」

エーリカ「何でこんな微妙な数字なんだ？」

ユリア「私もそれ思ってた」

エイト「言われてみるとそうだな」

エーリカ「アハトは何か聞いてないのか？」

エイト「何も聞いてないよ」

ユリア「こんな祝いの席を設けたんだから把握しときなさいよ」

エイト「そういわれてもな……」

エーリカ「結局誰にもわからないのか？」

ユリア「そうね」

エイト「まさに神のみぞ知るだね」

エーリカ「……」

ユリア「……………」

エイト「何か反応してくれ」

エーリカ「どうしようもないね」

ユリア「放っておきましょう」

エイト「（扱いが酷い）」

ユリア「それにしても気になるわね」

エーリカ「私に良い考えがあるよ」

ユリア「何？」

エーリカ「作者さんをここに呼び出せばいいんだよ」

ユリア「ええ!!」

エイト「……………」

エーリカ「じゃあさっそく。作者さ〜ん、出てこ〜い」

作者「お呼びですか？」

エーリカ「おっ、きたきた」

ユリア「（どこからともなく出てきた！）」

エイト「（出てきちゃダメだろ）」

作者「お初にお目にかかります。『魔術師の戦律』の作者、s c h w a r z s c h i l dです」

エイト「堅苦しいのは、なしにしようか」

エーリカ「敬礼もいらないよ」

ユリア「もっと楽にしてね」

作者「はぁ」

エーリカ「それで作者さん、何で15, 000アクセス記念なんだ？」

作者「……それはですね、真に嬉しいことなんです。が黒衣の兄妹を投稿したあたりから、アクセス数が急増しまして、気づいたら10, 000アクセスを大幅に超えてしまっていたんですよ」

エイト「管理がずさんだな」

作者「すみません」

ユリア「初心者なんだから許してあげれば」

エーリカ「そうだよ」

エイト「確かに言い過ぎた、すまない」

作者「いえいえ、こちらの管理がずさんなのは事実ですから」

エイト「何か悩みはないのか？」

作者「悩みは多いのですが、執筆中の悩みは一週間更新の継続と作中のキャラの呼び方ですかね」

エイト「一週間更新は気合で頑張るしかないね」

ユリア「私たちの呼び方というのは？」

作者「グライナー少佐とユーティライネン中尉の名前ですね」

エイト「僕とエイラの？」

エーリカ「エイトとエイラか……確かに紛らわしいな」

作者「そうですね」

エーリカ「でも、エイトはアハトで問題ないだろ」

エイト「カールスラント出身の者が呼ぶには問題ないと思うが……」

ユリア「なら、『ハチ』で問題ないわね」

エイト「頼むからその呼び方はやめてくれ!!」

エーリカ「ぜいたくだな」

作者「なかなか難しい問題なんですよ」

エイト「しかたない、暫く使ってなかったが『鋭人』でどうだ？」

ユリア「えいと……なんだか呼びに難いね」

エーリカ「アハトでいいよ」

作者「決まりませんね」

???「ユリアさん入るわよ」

エーリカ「あ、ミーナだ」

ミーナ「あらあら、フラウもアハトも……えーと、そこにいるのは誰かしら？」

エーリカ「この『魔導師の戦律』の作者さんだよ」

作者「お初にお目にかかります。作者のschwarzschil
dです」

ミーナ「501隊長のミーナ・ディートリンデ・ヴォルケよ」

作者「……あの、そんなに強く握られると痛いのですが」

ミーナ「あなたは誰の許可でこの基地に入ってきたの？」

作者「え〜と……………」

ミーナ「許可なく入ったのなら不法侵入の容疑で拘束させてもらうわよ」

ユリア「ミーナそんな大げさなことをしなくても」

ミーナ「ティアム大尉、あなたには後で詳しいことを聞かせてもらいます」

ユリア「あう……」

エイト「ミーナ落ち着いたらどうだ？」

ミーナ「私は十分落ち着いていわよ、グライナー少佐。もしや、これはあなたの仕業？」

エイト「（勝手に入ってきたから知らないし）」

エーリカ「私が呼んだんだよ！」

ミーナ「ハルトマン中尉、どういふつもりなの？」

エーリカ「ちょっと聞きたいことがあったからさ。で、呼んだら出てきたわけ」

ミーナ「状況がよく分からないわ。中尉、正確に説明してちょうだい」

作者「お話し中すいませんが、自分はお邪魔なようなので御暇させてもらいますね」

ミーナ「!？」

ユリア「(消えた!?)」

エイト「(逃げた)」

エーリカ「あゝあ、帰っちゃった」

ミーナ「……………そういうことね」

ユリア「人騒がせな人だったわね」

エイト「こっちが呼んだんだから文句は言えないよ」

エーリカ「ミーナはどうしてユリアの部屋に来たんだ？」

ミーナ「ここでPV15, 000アクセスのお祝いをするってアハトから聞いていたからよ」

エイト「仕事があるからと断られたから、てっきり来ないのかと思ってたよ」

ユリア「あれ、カールスラント組を集めるならトゥルーデは呼んで

ないの？」

エイト「部屋の片づけをしてたからね」

ユリア「トウルーデの部屋の片づけがそんなにかかるとは思えないんだけど」

エイト「ジークフリート線の向こうって言ったら分かるかな（笑）」

ユリア「あはは」

エーリカ「笑わないでよ」

ミーナ「散らかしっぱなしはダメよ」

エーリカ「ミーナまで……」

エイト「どうしてあそこまで散らかるんだろうね」

エーリカ「片づけてくれる人がいないから……（ウルウル）」

エイト「トウルーデがいるだろ……分かった、分かったからそんな目で見るのはやめてくれ」

エーリカ「アハトも片づけ手伝ってくれる？」

エイト「週一回までが限度だよ」

エーリカ「やったあああ！！」

ユリア「（あれほど口を酸っぱくして言ったのに……手伝わないからね）」

ミーナ「（不衛生な部屋で居られるより安心かしら）」

エーリカ「それじゃあ、さっそく。レッツゴ～」

エイト「そんなに引っ張らなくてもちゃんと歩くから」

ユリア「行っちゃったね」

ミーナ「そうね」

ユリア「腕に抱えている書類、終わってないなら手伝うわよ」

ミーナ「ご厚意に甘えて手伝ってもらおうかしら」

ユリア「了解」

ミーナ「……」

ユリア「………」

ミーナ「………」

ユリア「………あれ？」

ミーナ「なにか不具合でも見つけた？」

ユリア「この文書なんだけど……」

エーリカ「なにになに」

ユリア「フラウ！ いつの間に戻ってきたの！？」

エーリカ「ユリアたちが無言で書類を片づけてたところ」

ミーナ「アハトは？」

エーリカ「トゥルーデと一緒に部屋の掃除」

ユリア「置いてきたのね」

エーリカ「私が居たって邪魔だからさ」

ユリア「自分のことなんだから、少しはやりなさいよ」

エーリカ「私が片付けできないことぐらいわかっているだろ。それよりユリアが持っている文書だよ」

ミーナ「何が書いたあるのかしら？」

ユリア「読み上げるね。『この度、【魔術師の戦律】の総合評価が100ptを超えました。これを機に諸君らの健闘を一層期待しております』だって」

ミーナ「まあ！ この短期間で多くの人に評価してもらえるなんて」

エーリカ「なんか怪しいな。差出人は？」

ユリア「不明ね。書いてないから」

ミーナ「見たところ、ただの祝辞だから問題ないわよ」

ユリア「ミーナの言う通りね」

エーリカ「でも、これはアハトや作者さんの前で知らしたほうがよかったんじゃないのか」

ユリア&ミーナ「「あっ」」

エイト「ふう、掃除で疲れるとは」

作者「5時間に及ぶ掃除ごくろうさまです」

エイト「なんでお前がここにいる？」

作者「地が出てますよ」

エイト「そんなことよりどうやって俺の部屋に入った？」

作者「作者権限です」

エイト「そうか……」

作者「ナイフを抜かないでください！　ただ、お知らせがあつてきただけです」

エイト「手短に話せ」

作者「（とりあえずナイフはしまってくださいましたか）」

エイト「早くしろ」

作者「はい！　このPV15,000アクセス記念の執筆中に総合評価の方が100ptを超えました！」

エイト「そうか。おめでたいな」

作者「素っ気ないですね」

エイト「お前が作った設定だろ」

作者「そうでしたね。では、ゆっくりと深呼吸をしてください」

エイト「すゝ……はゝ。すゝ……はゝ」

作者「治りましたか」

エイト「人を病人扱いしないでくれるか」

作者「人の目の前で深呼吸している人って変ですね」

エイト「お前がやらしたんだろ」

作者「はは」

エイト「まったく………こんなところで油を売っていて大丈夫なのか？」

作者「と言いますと？」

エイト「目標の一週間更新の期限過ぎてるぞ」

作者「……あれ（汗）」

エイト「まさか、日にちを間違えたとか言わないだろうな」

作者「その通りです……」

エイト「お前という奴は！」

作者「面目ないです」

エイト「俺に言うより他にすることがあるだろう」

作者「読者の皆様、更新が遅れてすいませんでした」

エイト「この失敗を肝に銘じておくんだぞ」

作者「肝に銘じておきますが、何が起こるか分からないので確約はできません」

エイト「正直者なんだか変に律儀なんだか」

作者「ただの捻くれものですよ」

エイト「こんないい加減な作者が書く物語だが」

エイト&作者「『魔術師の戦律』をこれからもごひいきにお願いします」

PV15, 000アクセス記念雑談（後書き）

本文でも述べたとおり、総合評価100ptを超えました。読者の皆様、御評価ありがとうございます。

自分が書いた作品が気に入られて大変嬉しいです。

さて、話は変わりますが小説を書くのは難しいですね。今回はセリフだけで話を作りましたが、口調が気になって気が気でありません。

さらに新しく発見した問題なのですが、『エイト』と『エイラ』、この二人の名前が一字しか違わず、認識の間違いが起こりそうなことに気づいてしまいました。

そこで、読者の皆さんにアドバイスを頂きたいのです。

参考までに自分が考えた解決策を書いておきます。

- 1、現状のまま押し通す。
- 2、エイトを地の文で『鋭人』と表記する。
- 3、地の文でエイトをグライナーと表記する。

自分が思いついたのが以上の3つになります。より良い作品を作っていきたいので皆様のご意見お待ちしております。

第二回グライナー少佐対策会議（前書き）

週一更新、一時間間に合わず。
無念。

第一回グライナー少佐対策会議

「「「「「いただきます！」「」「」「」

目の前には前線基地とは思えないぐらいの豪華な夕食が並ぶ。

僕たちの歓迎会も兼ねているらしい。

基地について初めての食事でもあり、空腹に近い状態の僕にとっては嬉しいはずなのだが……なにぶん、箸が進まない。

いや、フォークだけど。

原因はこの状況にある。

僕を除く、この部屋にいる全員の眼がこちらに向いているのだ。

総勢、二十四もの瞳が。

好意を感じれるものから始まり、単純な興味を持っているもの、疑いの眼差し、挙句の果てには敵意や警戒心をあらわにしたものまで見受けれる。

正直落ち着かない。

この人たちは食事時ぐらい静かにできないのか。

原因を探るべく、僕はこの数分前の出来事を反芻することにした。事の発端はミーナの一言。

「皆さん注目。これより第一回グライナー少佐対策会議を始めます」
つつこみどころ満載の対策会議が始まったのだ。

第一回というからにはその次も、予定しているのだろうか。

先刻の出来事を説明していくミーナ。

それに補足を入れていく坂本さん、トゥルーデ、ユリアの三人。ちなみに宮藤さんとリネットさんは厨房から出てきている。

「なんか、大事になっているな」

フラウは隣に座り、ニコニコしている。

「勘弁してくれ」

僕は頭を抱えなくなる。

シャワールームから出たあと、僕の整備士の宿舎まで行くという意見は、何故か満場一致で棄却されてしまった。

そのまま、折り合いがつかず食事の時間になるので、一同は食堂に向かうことになったのだ。

まさか、打ち切りになった話が全員が集まった食堂で再開されるとは思っていなかった。

「こんな似非紳士と共用するなんて、冗談じゃありませんわ!」

僕を指さし吠えるペリーヌ嬢。

似非紳士って、なんだかな……。

「落ち着けペリーヌ」

すぐに、坂本さんがなだめに入る。

「たとい少佐が仰ることも容認できませんわ!」

猛狂うペリーヌ。

いま何を言っても焼け石に水な気がする。

「ペリーヌが少佐の言うこと聞かないなんて珍しいじゃん」

「そ、それは……」

冷や水を浴びせるルッキーニ。

なんだか強い衝撃を受けたペリーヌがしおれていく。

「ペリーヌは少佐にべた惚れだからナ」

「エイラさん!!」

エイラの妙な発言に机を叩き立ち上がるペリーヌ。

同性に惚れる？

……好きになるということはないだろうから………ここでするのは尊敬ということだろうか？

そうだと思いたいね。

「……エイラ」

エイラの隣に座っているサーニャちゃんが咎める。

「わ、分かったよ、サーニャ」

たじろぐエイラ。

この二人って意外と面白い関係なのかもしれないな。

「それでどうするんだ」

と、シャーリーがミーナたちに問う。

「そうね。……ここは、多数決で決めましょうか」

僕は驚いた。

こういうとき、大抵はミーナが決断するのだ。

みんなの意見を取り入れることもあるが、基本的に規則に沿ったと思われる独断に近い形でだ。

自身が追いつめられれば追いつめられるほどその傾向が強く感じれた。

あの撤退戦の後からは、それが顕著になったとフラウも言っていた。

だが、いまでは精神的余裕を感じることができる。

誰かが……いや、この部隊の存在が彼女を変えたのだろう。

そうであれば、なんて望ましい光景だろうか。

「グライナー少佐、何か意見がありますか？」

「いや、何もありませんよ」

険の入ったミーナの言葉を僕は両手を上げて否定する。

どこか考え事が顔にでも出ていたのだろう。

気を付けなければ。

「それでは、決をとります」

ミーナの案は三つの意見で決をとることになった。

一つ目は共用否定案。

簡単に言々と整備士の宿舎まで行けというやつだ。

僕的にはこれが一番助かる。

二つ目は共用妥協案。

時間を決めてその時間だけ僕専用のシャワールームと化す訳だ。これはかつて悪しいし、何より彼女たちに申し訳ない。

三つ目は共用案。

時間問わずいつでもシャワールームの使用ができるというやつだ。僕の中では一番好ましくない案だ。出会ったらとても気まずいだろ。

「共用否定案に賛成の人は挙手してください」

手を上げたのはトゥルーデ、ペリーヌ、リネットさんの三人。

僕も手を上げようとしたが上げられなかった。

理由は明確。

右腕にはフラウ。

左腕にはユリアが僕の腕を抑え込んでいる。

そして、正面には坂本さんの視線が僕を射抜いている。

どうして彼女たちは僕が整備士の宿舎まで行くことを拒むのだろうか？

「次に共用妥協案に賛成の方は手を上げてね」

この案に賛同したのは提案者のユリア。

それから、宮藤さんにシャーリー、ミーナの四人。つまり残ったのが……。

「共用案に賛成する者は挙手しろ」

坂本さんを筆頭にフラウ、ルツキーニの三人。

さらに以外なことにエイラとサーニャちゃんの姿もある。
つまり、合計五人で共用案が最多数となっている。

……困った。

僕が意思を表明してないとはいえ、否定案が可決されることはま
ずない。

妥協して妥協案に賛同すると、5…5で同数に。

結局決まらず、話し合いが振出しに戻ってしまう。

そもそも、北欧の二人はどうして共用案に賛成してのだろうか。
坂本さんやフラウのような性格でも、ルッキーニのようなアクテ
イブな国民性でもないはずだ。

「エイラもサーニャちゃんも、その……恥ずかしくないの？」

同じ疑問を抱いたと思われるユリアが、二人に尋ねる。

「そこまで気にすることないナ。ユリアもカウババ基地にいるとき
はサウナで一緒だったんだロ？」

「……バーニャはみんなで入るものだったから」

妖しい笑みを浮かべるエイラと顔を赤らめ俯くサーニャ。

「そうだったわね」

苦笑いを浮かべるユリア。

僕もそれにつられてひきつるような笑みを浮かべる。

他のみんなはというと、ほぼ絶句状態だ。

まあ、無理もないだろう。

軽いカルチャーショック受けているのだ。

僕も昔はそうだった。

それは初めてスオムスに訪れた時のこと。
サウナという恐ろしい伝統文化に出会ってしまった。
後にも先にもあれほど多くの失態を繰り返したのは最初で最後だろう。

詳しくは……思い出したくない。

「で、でも、エイラは本当にいいのか？」

「なにがダヨ」

「エイトがサーニヤの白い肌を見るかもしれないんだぞ」

「ナッ」

真剣に語るシャーリー。

エイラのポーカーフェイスが紡がれた一言によって崩れ去った。

「ダダダダダダダ、ダメナランダナ！ ソレハ」

元々、スオムス訛りで特徴のある彼女の言葉がさらに変わったイントネーションを持つ言葉となる。

この状態を見た百人中百人が同じことを思うだろう。

動揺していると。

その動揺丸出しのエイラが僕の視線からサーニヤを隠すように手を広げる。

「サーニヤをそんな目で見んなぁー！！！！！！」

今日の昼にも聞いたお決まりのセリフを叫ぶ。

そして、エイラはまるで仇を見るかのように僕を睨むのだ。

……僕としてはエイラにそんな目で見られたくないんだけどね。

「話し合いの場でそんな高圧的な態度をとるのは止めてね。エイラさん」

「で、でも……」

「分かりましたか？」

「うっ……分かったヨ」

ミーナお得意の笑みでエイラはしぶしぶ矛先を納めた。

この場でもっとも高圧的な態度をとっているのはミーナである。

周知の事実なのであえて述べることはないだろう。

「それとグライナー少佐。もし、そのようなことがあれば許しませんからね」

「肝に銘じておきます」

僕もエイラ同様、おとなしく指示に従う。

いまのミーナはとんでもない暴君となっている。

逆らわないのが身のためだ。

それにしてもみんなの視線が痛い。

あゝ、なんか僕のあるかないか分からない株価が暴落していくのが目に見えて分かる。

それも、たった今日という一日で。

僕のネウロイのコア並みに固いハートも、すでにボロボロだ。

「兄さん余計なことを考えていたでしょう」

ユリアまで睨みを利かせてくる。

それも止めの一言まで織り交ぜて。

……えげつない。

将来、ミーナのようになるな。

これは確信が持てる。

「兄さん？」

ほら、やっぱり。

念を押すかの如く、二の太刀を入れてくるところとかそっくりだ。

「……」

「？」

急に左腕を抑える力が強くなる。

同時にユリアの細い指が僕の手に絡みついてきた。

そして、彼女は呟く。

誰にも聞こえないぐらい小さな声で。

「フラーム」

「っ！」

びくっ、と僕の体に衝撃が奔る。

手のひらから伝わる痛みという鋭い電気信号が体中を駆け巡った

のだ。

「どうかしましたか、グライナー少佐？」

白々しく聞いてくるユリア。

彼女の目を見ると笑ってないことが分かる。

「なんでもないよ……ははは」

僕にできることは肩をすくめ、現実から逃避することぐらいだ。

「コホン……エイラは意見を変えるのだな」

咳払いの後、会議の継続を促すトゥルーデ。

さすが、ミーナの副官。

機転がきく。

どこかの副官とは大違いだ。

「フレーム」

「つつっ!!」

再び訪れる鋭い痛み。

反射的に腕を引くが強い締め付けでまったく動かない。

どうやら、我が副官は少々ご乱心のようなだ。

これは後できっちり話を聞いておかないと。

僕は手のひらの心配をしながら深くため息をついた。

「おかしいわね」

議長のミーナが小首をかしげる。

どうやら、会議は知らぬ間に進んでいたようだ。

「もう一度、決を採ります。分かるようにしっかりと手を上げてください」

ミーナの掛け声で議決を取り始める。

結果は4…4…4。

前回の結果からエイラが否定派に回った形となった。

そして例の如く、僕は手を上げれていない。

「……あれ？」

宮藤さんが何かに気づいたような声を上げる。

「エイトさんは参加してないんですか？」

疑問の声を上げる無垢な少女。

このときばかりは目の大きい小動物みたいな彼女のことを憎々しく思うのだった。

「えーと、これはだね……」

しかし、何とか弁解をしようと思考を巡らせるもすでにとき遅し。僕に向けて集中砲火が開始される。

「真面目にやらないと、ミーナがぶんぶんだぞ」

「そうよ。フラウの言う通り真面目にやって、兄さん！」

「全く、その通りだ」

身体的、精神的に僕の行動を牽制していた、フラウ、ユリア、坂本さんが知らぬ存ぜぬと言わんばかりに攻め立ててくる。

邪魔してたのは貴方たちじゃないですか！

と、つつこみを入れる暇もなく次の砲撃が放たれる。

「恥ずかしくないのか、アハト！！　もう少し、カールスラント軍人として——」

「カールスラントはともかく、少佐の仰る通り真面目に取り組むべきですわ」

「クロステルマン中尉、邪魔しないでもらえるか。私はこいつにカールスラント軍人としての享受をだな——」

「大尉の話は長いから却下ダナ」

「なにっ！！」

「それと、エイトはこっちを見るナ」

「……エイラ」

「さ、サーニャ！」

「そんなことを言うべきではないわ」

「で、でも……」

「私はエイトさんにお話があるの。そこをどいて……」

「さ〜にや〜〜〜」

「エイラにサーニャ、貴様たちまで……」

坂本さんの言葉を美化しようとするペリーヌとサーニャを必死に守ろうとするエイラ。

そして、熱弁を振るおうとするトゥルーデは怒りに体を震わせている。

彼女の言葉はなぜか遮られることが多い。

若干、思考が別の方向に向いている人たちである。

「エイトは自由過ぎ〜」

「大事な話なんだからちゃんと参加するべきだよな」

続いていくるのはロマーニャとリベリオンの自由奔放コンビ。
彼女たちに注意される自分がなんだか情けない。

「「……………」」

サーニャちゃんとリネットさんからくる無言の圧力。
いままででこれが一番堪える。

さらにサーニャちゃんは目をしっかり合わせてきて、なんだか居心地が悪い。

「目をそらさないで……エイトさん」

年下の少女の注意を聞かないわけにもいかない。

僕は意を決して目を合わせた。

「……ちゃんと考えてください……」

「ちゃ、ちゃんと思えないとダメですよ」

正論をぶつけてくる二人の少女。

物静かなサーニャちゃんと気恥ずかしがりやなりネットさんの言葉には重みがあった。

「真面目にしてくださいね」

ミーナの追い打ちとも取れる一撃に僕の心は崩れ去る。

「で、貴様はどうする気だ」

怒りをどうにか抑え込んだトゥルーデが容赦ない言葉を浴びせてきた。

彼女には人を労わる気持ちはないのか。

だが、トゥルーデの言うこともまた事実。

僕は深く息を吸い込み砕けた心を奮い立たせた。

待っていたのは十二人の眼差し。

忘れていたが票が拮抗しているいま、僕の採択でこの議題が決まるのだ。

私的には否定案を選びたいのだが、前門の鬼と後門の悪魔たちがそれを許してくれそうにない。

それは間違ったことわざ？

いまは細かいことを気にしている場合じゃない！

「フレーム」

「つつつつっ！！！！」

再び訪れるユリアの制裁。

僕は左手の痛みを必死に堪えた。

これは火傷確定だな。

この悪魔のせいで医務室行きか。

あゝ、睨まないで、睨まないでユリアさん。

にしても困った。

ここは慎重に選ばないといけない。

後々の禍根を残すことになりそうだ。

考えれば、考えるほど思考がループしていく。

ぐうぐう。

突然鳴り響く謎の音。

それは僕のお腹から発せられた空腹の合図。

「ひとまず、食事にしませんか？」

苦し紛れに僕は顔を赤めながら最善の提案をするのだった。

第一回グライナー少佐対策会議（後書き）

今回から前書きと後書きの雑談にチャレンジしてみようと思います。

エイト「前書きが前回と変わってないと思うが……」

作者「前書きは来週からの試行となります」

ユリア「こんなことをしているから更新が遅れるのよ」

作者「すみません」

ユリア「分かったなら宜しい」

エイト「この試みはまだ続けるのか？」

作者「はい」

エイト「無理をするなよ」

作者「そういえば、金曜日の更新が厳しいことに今更ながら気づかされました」

ユリア「どうするの？」

作者「具体的には日曜か月曜の更新に持っていきたいのですが……」

エイト「頑張れ」

作者「いいのですか？」

エイト「あれだろ。一週だけ二話書いて無理やり更新日に合わせるんだろ」

作者「……え？」

ユリア「私も期待してるから」

作者「え？ え？」

エイト「それじゃあ、次回もよろしく」

ユリア「あつ、兄さんだけずるい」

作者「え~~~~~!!」

というわけで次週か再来週、二話書こうと思います。
応援よろしくお願いします。

501・初めての夕食（前書き）

作者「と、言うわけで更新」

エイト「何が『と、いうわけで更新』なのかは分からないがな」

作者「まあ、そのくだりは置いて更新です」

エイト「確かに期限内更新ではあるな」

ユリア「ちゃんと、期限守っているのね。えらい、えらい」

作者「／／／／」

エイト「だが、お前は前回した公約を忘れているんじゃないか？」

作者「わ、忘れてませんよ（汗、汗）」

エイト「絶対忘れてただろうが（怒）！ このポンコツ作者が！！」

作者「orz」

ユリア「もう！ 兄さんは言い過ぎよ！」

エイト「すまない。こいつを見てたらつい」

ユリア「もういいわよ。作者さんもほら」

作者「ありがとうございます」

ユリア「来週まであるんだから、気を取り直して頑張ろうね」

作者「は、はい！ 頑張ります！！」

エイト「（なに、張り切ってんだか）」

ユリア「でも、できなかったらどうなるか分かるでしょう？」

作者「り、了解です（ガクガク）」

ユリア「宜しい。それじゃあ、私からひとつお願い」

作者「な、なんでしょうか」

ユリア「もっと、出番増やして！」

エイト&作者「……………え？」

ユリア「なによ！ 二人してその反応はひどい！！」

作者「ひどいと言われましても……」

エイト「ユリアの出番は充実してるじゃないか！」

ユリア「そうじゃなくて……私だけの話を作ってほしいの！」

エイト&作者「……………」

ユリア「むう、二人してまた……いい加減にしないと私、怒るよ

「！」

エイト「いや、怒らないで。あまりにも無茶なことを言うから絶句してただけだ」

作者「右に同じです。……あまりにも前途多難です」

ユリア「うう……二人とも苛めるんだ。もう知らない……ふんっ」

エイト「へおい、なんとかしろ。ユリアがはぶてただろ」

作者「へえ、私ですか？」

エイト「へお前なら何とかできるはずだ」

作者「へやってみます」

エイト「へよし、行って来い」

ユリア「……ぐすん」

作者「ユリアさん聞いてください」

ユリア「……（ぷいっ）」

作者「ユリアさんが主役の活躍ができるようこの『s c h i l d』が全力を尽くします!!」

エイト「（おい、主役は俺だろ!）」

ユリア「ほんと？」

作者「本当です。試に今回はエイトさんの出番を大きく削って、ユリアさんのみの視点でやってみました」

ユリア「やった〜!!」

エイト「ちょっと待て」

作者「はい？」

エイト「何で俺の出番を削るんだ！」

ユリア「兄さんは黙ってて!!」

エイト「いや……」

ユリア「黙ってて!!!!!!」

エイト「はい……………」

作者「それでは、意見がまとまったようなので（打ち合わせ通りお願いしますよ）」

ユリア「『魔術師の戦律』」

エイト「……………第7話」

ユリア「501・初めての夕食」

ユリア「始まります」

作者「始まります」

エイト「(まったく、一回目からこれでは先が思いやられる)」

501・初めての夕食

「んゝ、おいし」

私は配膳された料理を口にして、感嘆の声を上げる。

目の前に並ぶのは扶桑とブリタニアの料理。

いま口になっているのはカラアゲとか言う名前の料理だったかな。

粉をまぶし揚げた鶏肉から溢れ出す肉汁、衣のサクサク感、絶妙なハーモニーを奏で出す味付けがたまらない。

さらに、鶏肉独特のにおいも感じられないのだ。

「リーネちゃん、お塩をとって」

「はい！」

片や世界でも不味いと有名なブリタニア料理。

兄曰く、ブリタニアの料理は手抜きが多いんだ！、と熱烈に語っていた。

原因は文化の違いにあるらしい。

その為、他国の人が食するとまずいと感じてしまうことが多いそうだ。

対策としてはブリタニア人がしてことを見習い、後から自分好みに味付けをすればいいそうだ。

実際、私も兄もそうしている。

この食べ方は兄の流儀に反するそうだが……。

その兄を見ると、かなり食べづらそうに料理を口にしていた。理由は二つ。

一つ目は周りの目だ。

ほとんどが兄に注がれている。

例外としては料理にかぶりついているルッキーニとフラウ。ちらちらと時々見ている、トウルデと私だ。

兄が答えを先延ばしにしたのが悪いんだけどね。

二つ目は私が焼いた左手の所為だ。

みんなに悟られないように頑張っているようで、左手に持つフォークを危なっかしい動きで動かしている。

やり過ぎたかな……でも、悪いのは兄さんだし……。反省しようか悩む私。

自業自得と言えどそれで終わりなのだが、気づいている私からすればその強がるさまが見ていられなくなる。

「兄さん」

「どうした？」

両手に持っていたナイフとフォークをゆっくりと置く兄。左手が痛むようで、フォークを置いた際小さな音が鳴る。睨まないで上げてね、ペリーヌさん。

「こっちを向いて……はい、あゝん」

一口大に切り分けたカラアゲを兄の口元に持っていく。

「え？ は？ やっ、ユリア、そのだな……」

奇妙な声を上げる兄。

耳まで赤くして、なんだか可愛い。

「食べないの……？」

そんな兄に追い打ちをかけるべく、私は上目づかいで見上げる。

「うっ………分かったよ」

観念したようで兄はおとなしくカラアゲを口にした。

「どう？　おいしい？」

「……ユリアが作ったわけじゃないだろう」

感想を聞く私に兄は身もふたもないことを言う。

ほんと、この人は感性が鈍いわね。

ほほを膨らまして怒りたくなる。

「ユリアさん」

名前を呼ばれて私は我に返った。

私を呼んだのはミーナ。

こちらを見つめてくるその目は底冷えしてしまうほど冷たかった。

「み、ミーナどうしたの？」

爆弾を解体するかのように恐る恐る聞いてみる。

「相変わらずユリアは大胆だな」

「え？　なにが？」

ミーナの代わりにフラウがニヤニヤしながら答える。
状況が分からない私。

「まさか、ユリアとエイトがそんな仲だったとはナ」

「見せつけてくれるねえ」

「……………」

エイラとシャーリーが謎の言葉を投げつけてくる。

……私と兄さんはただの兄妹よ。

周りを見ると、兄に向いていたみんなの視線が、私のほうに移っているのに気が付いた。

サーニヤちゃんとリーネちゃんは顔を赤く染め俯いている。

「お前まであいつの毒に犯されてしまうとは」

「淑女としての嗜みはどこにいったのですか！」

哀れむトゥルーデにご立腹のペリーヌさん。

それにしてもあいつって誰？

兄さん？

それとも変態伯爵？

みんながよく分からないことばかり言うので、頭が混乱してきた。

「ユリーとエイトは恋人同士？」

「ち、違うわよ！」

私は間違った認識を慌てて正した。
ルッキーニちゃんの一言でようやく事態の把握ができるようになったのだ。

私が兄に気を使う。

↓口の前にカラアゲを持っていく。

↓兄が仕方なくそれを食べる。

↓他人から見たら、いちゃついてるようにしか見えない。

え、えーと、それって……／＼。

「に、兄さんとはそんな関係じゃありません!!」

恥ずかしさのあまり私は大声を出してしまう。

私の態度を見て、ニヤニヤするエイラ、フラウ、シャーリーにルッキーニの四人。

な、なによ……。

私は思わずたじろぐ。

彼女たちからなんだか嫌な雰囲気伝わってくるのだ。

このまま放置したら、火を見るより明らかな事態に陥る。

どうしよう。

焦ったところで答えが出るはずもなく、裁きるときは残酷にも訪れようとする。

「そんなこと言っ—————」

「よかった。ユリアさんは普通の人で」

エイラの言葉を遮り、宮藤さんが安堵の息をつく。

何気ない少女の一言が場の空気をきれいに洗い流した。

出ばなをくじかれた彼女たちは不完全燃焼に終わってしまったかのようにくすぶっている。

ありがとうございます、宮藤さん。

私を救ってくれた少女に心の中でお礼を言う。

ただね……宮藤さん？

私は無言のまま微笑む。

相手はまるで天子のような所業を行った少女なのだが……。聞き捨てならないことを言っていたのだ。

普通の人で良かったって、どういう意味よ。
何を考えていたか聞きたいわね。

「あう……ユリアさん怖いです」

縮こまる宮藤さん。

そんな怖い目で見てたつもりはないんだけど……。とりあえずごめんね。

でも、あとできっちり聞かせてもらおうわよ。

「こらこら、宮藤が怖がっているだろう」

私に注意をする坂本少佐。

むう、宮藤さんが変なことを言うから悪いんですからね。

「ふふふ」

そんな様子を見ていたミーナが不意に笑い声を漏らす。
私が見るといつもの優しい顔に戻っていた。

「みんなが誤解するようなことをしてはダメよ」

一応、隊長としてのケジメなのだろう。

真面目な顔に戻り、注意を促すミーナ。

先ほどと打って変わって、その声音は幾分も優しく思えた。

「慎みを持ってくださいね、ユリアさん」

「……はい」

カラアゲを食べさせたぐらいでそう目くじらを立てないでいいだろうに……。

だが、私も蒸し返すようなことはせず、そのまま返事をするのだった。

「貴方もですよ、グライ………」

ミーナの言葉が途切れる。

理由は簡単だった。

私とフラウとの間にできた空席。

隣にいるはずの人間がいなくなっているのだ。

「エイトなら、こそこそと出て行ったぞ」

「そうそう。抜き足、差し足、忍び足って感じでさ」

何気もなく言う坂本少佐とフラウ。

どうやら、兄が抜けだしたという事態に気付いていたのは、私が起こした騒動に動ずることなく食事が続いていた坂本少佐とニコニ

コと笑顔を浮かべ続けるフラウだけだった。

501・初めての夕食（後書き）

作者「どうですか、見事にユリアさんが中心だったでしょう」

ユリア「た、確かに中心だったけど……」

作者「どうしましたか？」

ユリア「危うく変な勘違いされるところだったじゃない!!」

作者「え……勘違いだったんですか？」

ユリア「／／／／／／／／／／」

作者「（この反応はもしかして……）」

ユリア「さ、作者さん!!」

作者「はい!」

ユリア「作者さんまで変なことを考えてるの?」

作者「い、いえ!」

ユリア「まあ、いいわ。今回のことは“これ”で不問にしてあげる」

作者「……はい!?（獣耳まで出して何する気ですかこの人!）」

ユリア「全てを灰に還して、なかったことにすると言っているのよ」

作者「ちょっと!! (笑顔でそんな恐ろしいこと言わないでください!)」

ユリア「忌まわしき記憶とともに燃え尽きなさい! フラーム!!」

作者「ぎやややあああああ!!」

この騒ぎで、ユリアが主人公という草案は燃え尽きたのだった。
(がくっ)

女医 アレッシア・コルチ（前書き）

エイト「どうにか食堂を抜け出したのはいいが医務室はどっちだ？」

??? 「あっちですよ」

エイト「この声はさくし……って、お前その恰好はどうした!？」

作者「前回、ユリアさんにこっぴどくやられまして」

エイト「はぁ……（俺も同じようなものだからあまり言えない）」

作者「エイトさんはなんでここに？」

エイト「野暮用だ!」

作者「そうですか（医務室に用がある時点で想像はつきますが）」

エイト「で、医務室はどっちだったか？」

作者「こっちです」

エイト「ありがとう。俺はこれで失礼するよ」

作者「あつ、ちょっと待ってください」

エイト「なんだ？」

作者「せっかくなので一声お願いします」

エイト「分かった」

作者「それではどうぞ」

エイト「『魔術師の戦律』 第8話 『女医 アレッシア・コルチ』
始まります（アレッシアって誰だ？）」

女医 アレッシア・コルチ

「ユリアも派手にやってくれたな」

左手の惨状を見て、僕の口から自然と愚痴がこぼれ落ちる。
痛いし、違和感あるし、手のひらを見ると赤くはれ上がっていた。
下手したら水膨れができるぞ。

そんな訳で僕は、食堂を抜け出し医務室を目指しているのだ。

「失礼します」

軽いノックの後に、ドアを開ける。

ドアを開けるのはもちろん怪我をしてない右手で。

広がるのは白で統一された、清楚な風景。

中に入ると白衣を着た女性が椅子に座っていた。

「あら？ 見慣れない顔ね」

手元を持っていたカルテを置くと、こちらを向く彼女。

およそ、二十代前半から後半の年頃だろうか。

ずいぶん若い医者だというのが僕の第一印象だった。

「今日付けでこちらに転属となりましたエイト・グライナーです。
階級は少佐。君のような美しい女性と共に働けることを光栄に思いますよ」

「少佐はお世辞が上手なことで」

僕の言葉を聞いた、女医さんは微笑みをたたえる。

別にお世辞のつもりはないんですが……。

「私はアレツシア・コルチといいます。見た目で分かるように、ここで女医をやらせていただいています。少佐も何かあれば、すぐはこちらに来ていただいても結構ですよ」

右手を差し出してくる彼女。

女性からアプローチを受けるとは……。

これでは、紳士失格だな。

「この基地には少佐が二人もいますので、僕のことはエイトで結構ですよ」

とはいえ、差し出された手を握り返さないわけにもいかない。

これは人間として最低のマナーだ。

僕は彼女の手を優しく握る。

「分かったわ、エイトさん。私のことはアレツシアと呼んでくださいね」

彼女は再び屈託のない笑みを浮かべる。

「それで、今日は何の用かしら？」

笑みを浮かべたまま、当然のことを聞いてくるアレツシアさん。

それにしても、何の用ですか……。

ここに人が来れば大体何の用か分かるだろうに。

「少し火傷をしてしまいました」

僕は隠していた左手を見せる。

「あらあら……」

アレツシアさんは僕の火傷の具合を見て、顔をしかめる。

「どうやったら、こんな火傷ができるんですか？」

「それはですね……まあ、色々です……あはは」

彼女の疑問に明確に答えられない。

しかしながら、火傷の痕が不自然なのは隠しようがない。

僕の手はユリアの手より大きく、手のひらにはユリアの手形（？）
みたいなのがついている。

どうしたものか……。

「理由はどうあれ、すぐに冷やさないといけません」

彼女は水道まで僕を引っ張っていく。

そして蛇口を捻り、僕に流水で手を冷やすように言うと次々と治療の準備を進めていく。

実に手際が良い。

それにしても水が気持ちいいな。

手から伝わってきた違和感もいまは和らいでいる。

「次はこれで冷やしてくださいね」

渡されたのは氷嚢。

僕はそれを手のひらに乗せる。

やることもないのでそのままぼーっとする。

どれぐらい時間がたっただろう。

アレツシアさんが優しい口調で話しかけてきてくれた。

「エイトさんはどこからいらっしゃったのですか？」

「カールスラントからですね」

「では、隊長たちともお知り合いで？」

「まあ、そうですね」

何気ない会話。

その会話が次第に弾んでいく。

「ふふふ」

「ははは」

お互い自然と笑い声が漏れてくる。

それにしても、アレツシアさんはお話が上手ですね。

医者という職業は会話術も得意でないといけないのだろうか。
フラウに会ったら教えとかないとね。

「そろそろ、消毒をしましょうか」

アレツシアさんは治療を開始する。

その手つきは見事なもので、見る間に処置を終えていく。

「終わりましたよ」

包帯を巻き終えた彼女はにっこりと微笑みかけてきた。
思わず、ホッとしてしまう僕。

先ほどまで陰の入った笑みを見過ぎたのだろうか、純粋な笑顔を見ると安心するのだ。

「ありがとうございます」

お返しに僕も微笑む。

「どういたしまして」

すると彼女も再び微笑み返してきた。
やはり素敵な笑顔だ。
いつまでも見たくなる。

「————イトさん、エイトさん」

目の前には困った顔をしたアレツシアさんがいる。
察するに僕の様子が変だと思った彼女は幾度か名前を呼んだのだろう。

「アレツシアさんの笑顔が素敵だったので、つい見入ってしまいました。どうかお許しを」

「本当に困った人ですね。おだてても何も出てきませんよ」

丁寧 to 謝る僕。

だが、彼女は冗談を聞き流すかのように微笑むのだった。

＊

「それでは、お大事に」

「失礼しました」

その後も少し雑談をして僕は医務室を出た。

治療中とその後のわずかな時間の雑談。

しかし、基地に着いて以来まともな会話ができたのは彼女が初めてかもしれないと、僕はしみじみ思った。

僕は治療の施された左手を見て、思いを巡らした。

きれいに巻かれた包帯。

医務室に訪れた理由がこの下に隠れている。

ここに来る理由を作ったのは間違えなくユリアだ。

何が気に食わないのか、幾度も固有魔法を発動させた妹君。

僕が火傷をしたのはこれが理由だ。

最近のユリアは暴力的になってきている。

兄として自分の妹分がこんなことになって悲しいよ……。

しかし、そのおかげでアレツシアさんとも知り合えたから、今回のことは不問にしてもいいだろう。

次にまた同じようなことがあれば、ちゃんと話し合えばいい。

ともあれ、アレツシアさんの丁寧な治療もあって火傷はすぐに治りそうだ。

「？」

医務室を出て少し歩いたところで、僕は背後に違和感を感じた。まるで誰かに見られているような感覚。

——誰だ？

僕は静かに足を止めた。

体から余計な力を抜き、何があっても対応できるように身構える。さらに背後に感じる違和感の原因を探べく、気を集中させた。

………見つけた。

息を潜め、存在を隠そうとする気配。

その気配を見つけたことで僕は眉をひそめる。

基地に来て間もないこともあり内部事情には詳しくない。

つまり、この基地にいる隊員たちのことをよく知らない。

ウィッチたちも然りだ。

ただ、一部例外はいるが……。

いま、背後にいるものが世界でも数少ない魔術師として活動する僕に好奇心を抱いたのか、はたまた自負しているつもりはないが周りから稀代の天才と言われている研究者としての僕を見張っているのか……。

前者ならいつものことなので問題ない。

だが、後者なら相手を確認しておく必要がある。

こそこそと動き回る輩の中には悪質なものも多いからだ。

杞憂に終われば、それに越したことはない。

自分の勘を信じて、ゆっくり振りむこうとすると———。

「あゝはと、気づくのがおそいよ」

聞き慣れた声が耳に届くか否や、またしても金髪の少女に抱き着

かれた。

「脅かさないでくれよ、フラウ」

相手を確認して、僕の体から自然と力が抜ける。
同時にフラウに対して警戒していた自分が情けなくなる。

「えへへ」

無邪気に笑うフラウ。

———どうしてこの娘はこんなところにいるんだろうか？
少女の行動を不審に思う僕。
だが、その疑問もフラウの言葉にかき消される。

「そうそう、アハト」

「ん？」

僕は新たな疑問符を浮かべた。
フラウが話の前置きをするとは珍しいからだ。

「そんな隙だらけだと、そのうち後ろからサクッとされるぞ」

「な、なに物騒なこと言ってるんだよ！」

思いがけないフラウの言葉に動揺してしまう僕。

「やっぱり、心当たりがあるか」。後ろの立ったときに、普通じゃないぐらいの警戒心が感じ取れたからさ」

そんなにピリピリしてたのか。
自分のとった行動を反省する。
こちらの感情がただ漏れなのはいろんな意味で良くないからだ。

「何があつたか知らないけど、基地の中にいる間は安心して大丈夫だよ」

まるで天使のような笑顔を浮かべる少女。
その笑顔には一点の曇りも見えない。
フラウは本気で僕を心配してくれているようだ。

そういえば、アフリカを出る時もティナに心配をかけてしまったな。

とても彼女らしい鼓舞ではあつたが……。
どっちみち心配をかけてしまったことには変わらない。

———ダメだな、ほんと。

僕の心の中に自嘲の笑いが響き渡る。
年下の少女たちに気を遣わせてしまっているのだ。
こんな自分が情けない。

同時に僕の心は感謝の気持ちでいっぱいにもなる。
目の前の少女に心から感謝の気持ちを伝えたい。
だけど、いつも手を焼かされるこの娘にそれを言ってしまうのはどこか癪なのだ。

と、素直になれない自分もいるわけで……。

「子供が余計な心配をするな」

結局、僕はフラウの髪を撫でまわすことにした。

優しく丁寧に、感謝の気持ちを込めて。

頭を撫でられたフラウは、なぜだかほほを膨らませ、上目遣いで僕を見上げていた。

「むう、アハトだって子供じゃないか」

実際、僕とフラウの歳は一年も離れていない。

「そうだったね」

今日二度目となる、的を射たフラウの言葉に僕は苦笑するのだった。

女医 アレッシア・コルチ（後書き）

作者「今回はエーリカ・ハルトマン中尉に来ていただきました」

エーリカ「イエーイ！ みんなのアイドル、エーリカ・ハルトマンが後書き初登場！！」

エイト「作者も騒がしいやつを呼んだな」

エーリカ「むう、騒がしいやつって失礼だよ」

エイト「事実だ」

エーリカ「作者さん！ このアハト変だよ」

作者「え？ どこがですか？」

エイト「俺はいたって普通だ」

エーリカ「んゝ……………分かった」

エイト「何がだ？」

作者「どうされましたか？」

エーリカ「天才美少女エーリカちゃんにはこのなぞ、解けたよ！！」

作者「（天才美少女って……）」

エイト「(つつこみどころが満載だな)」

エーリカ「ズバリ!!」

作者&エイト「ズバリ?」

エーリカ「アハトが裏モードになっている!!」

エイト「裏モードって……」

作者「確かに」

エーリカ「でしょ、でしょ」

エイト「……………」

作者「口が悪いですね」

エーリカ「目つきも悪いよ」

エイト「……………(言わせておけば、こいつら!)」

エーリカ「なんか本文にも影響してるよ」

作者「最初に比べて言葉が若干荒くなったような気がします」

エイト「俺は気にならないが……」

エーリカ「そこで、アハト! 雑談でも言葉遣いに注意するんだぞ」

エイト「ズボラフラウに言われたくないな」

エーリカ「ううう………アハトが、アハトがひどいよ。わたしだって、わたしだって、ちゃんとするときにはちゃんとするようにしているのに」

作者「エイトさん、泣かせましたね」

エイト「………ああ、もう………分かった！」

エーリカ「……どうせ、どうせ……わたしはズボラですよ………」

エイト「ズボラなんて言ってごめんよ。つい、口から出たでまかせなんだ」

エーリカ「ほんと？」

エイト「ああ、本当だよ。だらしないところもあるけど、そこもフラウの魅力なんだ」

エーリカ「えへへ」

エイト「(ほっ)」

エーリカ「じゃあ、魅力的なエーリカさんからひとつお願い」

エイト「何？」

エーリカ「アハトは裏モードにならないように気を付けてね」

エイト「分かったよ」

作者「（どうにか收拾がつきましたか）」

エーリカ「ということで、次回の雑談に期待だよ」

作者「（あれ、本編は……）」

にゃまいきです……（前書き）

エーリカ「イエーイ！　せくしーぎやるのエーリカちゃんが前書きに登場！！」

エイト「前回も見たな、この場面」

作者「同感です」

エーリカ「全くノリが悪いな。拍手、拍手」

作者「……ぱちぱちぱち」

エーリカ「ダメダメ。言われてからでは遅いんだよ」

作者「（どうしろというんですか！）」

エイト「フラウに付き合ったら負けだ」

エーリカ「むう、アハトひどいこと言うな」

エイト「当然」

エーリカ「もしかして約束忘れてる？」

エイト「……約束？」

作者「前回のですよ」

エイト「……え」と

作者「裏モードにならないというやつです」

エイト「あっ」

エーリカ「わたしとの約束を忘れるとは、アハトもいい度胸してるよな」

エイト「どこに行った！ フラウ！！」

作者「（エイトさんの後ろで手をわきわきさせてます）」

エーリカ「エーリカさんのおしおきタ〜イム」

エイト「ちよっ……フラウ……やめ………」

エーリカ「こちよこちよこちよ」

エイト「くっ……くっあははははははは」

エーリカ「こちよこちよこちよ」

作者「（楽しそうですね）」

エイト「わ、わかった！ 分かったから、やめてくれ！！」

エーリカ「違うだろ。いつものアハトなら、もっとよそよそしいよ」

エイト「分かりましたから、やめてください！」

エーリカ「そこまでよそよそしくないけど……まあ、いつか」

エイト「(やっと、解放された)」

エーリカ「私とした約束を忘れないこと！ いいね!!」

エイト「了解です。ハルトマン中尉」

エーリカ「(お仕置きが足りてないのかな)」

作者「そろそろ時間なのでタイトルコールお願いします」

エーリカ「さゝ、はやく、はやく」

エイト「ぼ、僕がやるのか？」

エーリカ「これも立派な罰ゲームです」

エイト「くっ……(さっき散々くすくすぐったじゃないか!)」

作者「それではどうぞ」

エイト「(なっ、なんだこのタイトルは!!)」

エーリカ「さゝ、はやく(ニヤニヤ)」

エイト「『魔術師の戦律』 第9話 にゃんにゃまいきです……」

作者「(噛んだセリフをさらに噛みましたね)」

エーリカ「はじまります（可哀想だからサポートしたあげるよ）」

エイト「くっ！」

にゃまいきです……

「あはとく、おかしどころ？」

目の前に広がるのは解体された木箱。

ぐちゃぐちゃに積み上げられた荷物たち。

そして、荒らされ続ける僕の部屋。

僕はいままさにこの天真爛漫な少女に振り回されつつあった。

「僕が見つかるから、とりあえず手を止めてくれないか？」

「アハトはけが人でしょ。じっとしておいて！」

このままでは収拾のつかない事態（片づけるのが大変なこと）になりそうなので、僕はやんわりとフラウを制止する。

だが、それもまったく意味をなさなかった。

フラウに正論を言われ、ぐうもでない。

この左手の火傷が忌々しい。

まったく、どうしたものか……。

「……そうだ！ ユリアを呼んできてくれないか？」

「ええく？　なんで？」

我ながらなかなかの名案を思いついた。

しかし、フラウは僕の名案に疑問の声を上げる。

「荷造りを手伝ってもらったからね、ユリアなら早く見つけれられると思うんだ」

「んゝゝ」

僕の言葉を聞いたフラウが考え始めた。
あと、一押しだ！

「ユリアが来たら、すぐお菓子見つかるよ」

「ほんとっ!!」

態度を一変して、食いついてくるフラウ。
目の輝きが尋常じゃない。

「じゃあ、よんでくるね!!」

手にしていたものは投げ出し、部屋を飛び出るフラウ。
身のこなしは、空を流れる風のように軽やかだ。

「はあゝ……」

自分の部屋の状態を見てため息をつく。
フラウが出て行った扉は開けっ放し。
床には大量の荷物がまるでゴミのように散らかっている。
その中から一冊の本を手取る僕。

「はあゝ」

再びため息がこぼれ落ちる。
おまけに頭まで痛くなってきた。
手元にある物はゲルマン祖語で書かれた貴重な古本。

いまでも続く第二次ネウロイ大戦初頭の頃に、ミュンヘンのバイエルン州立図書館に立ち寄り発掘した一冊。
興味があったから勝手に持ち出したのだ。

この本を持ち出したのがばれたときには部隊長に怒られたっけ。
皇帝陛下が事後承諾で許可をくださり、ことなきを得たのだが。
祖国にいたころの苦い思い出。
若気の至りというやつだ。

それと、ここだけの秘密だが持ち出した本は他にもたくさんある。
ゴミの山と化した荷物の中から何冊か本を取り出す。
古代ノルド語で書かれた魔導書やヘブライ語で書かれた魔導書など。
など。

数多くの古本が僕のもとにある。

それらが床に投げられているのだから何とも嘆かわしい。
一冊、一冊取り出して、丁寧に埃を落とす。

そして、この部屋に置くように指示していた特殊な本棚の中へと
収めていく。

この本棚の特殊なところは耐火耐衝撃に優れたところだ。
正常に機能している本棚の中なら例えばユリアの固有魔法でも、ネウロイのビームでもこの貴重な本たちを守ってくれるのだ。

仕組みは簡単。

本棚に施された儀式魔法陣。

底部に備え付けられた魔導コンデンサー。

非常時にはこれらが連動し、強固なシールドを張るのだ。

常時、微弱なシールドを張り続けて、定期的に魔力の補充をしなければならぬのが玉に傷だけど……………。

「どうだ！　すごいだろう！！」

僕は大きい胸を張る。

「……………」

だが、返ってきたのは静寂。
誰も反応してくれない。

「……………orz」

……そうだった。

僕は大切なことに気付く。

一人でこの部屋の片づけをしているのだった。
いままで力説してたのが悲しくなってきた。
本当、馬鹿みたいだ……。

部屋の隅で丸くなる僕。

心の傷が癒えるまでこうしていよう。

……うん、それがいい。

僕は部屋の隅で落ち込むのだった。

＊

「あら？」

ミーナは自分に部屋に戻る途中、扉が開け放たれた部屋を見つけ

る。

「(不用心ね。ここは……アハトの部屋だったわね)」

ミーナはエイトの部屋に近づいていく。

「グライナー少佐、入りますよ」

律儀に開け放たれた扉をノックする彼女。

カールスラント軍人の肩書は伊達ではない。

「……………」

返事がないことを確認してエイトの部屋に踏み入るミーナ。

だが次の瞬間、目の前に広がった光景に言葉を失う。

解体された木箱。

エイトの部屋と思えないぐらい散らかった荷物。

部屋の隅で打ちひしがれるこの部屋の主。

全てが混ざり合い混沌化していたのだ。

「……………つつっ」

ミーナは口元を引きつらせながら、なんとか頭を動かし現状の打開に着手する。

だが、一目見たものにこの原因が分かるはずもない。

原因が分からなければ解決への糸口はつかめない。

「アハト、アハト———」

ミーナはこの事態の原因を知っているであろうエイトを揺り起こす。

「……ん、なんだ。ミーナか」

揺り起こされたエイトはミーナの姿を認める。

「ミーナか、ではないでしょ。どうしたの？　こんなことになって？」

「……いや、何でもないんだ」

ミーナがこの部屋の惨状をエイトに問う
それに肩をすくめ、力なく笑うエイト。

この状況を見て誰がその言葉を信じるだろうか？
とてもじゃないが、エイトの言葉は現実味を帯びていなかった。

「（この子は昔からこうなのよね）」

センチメンタリズムに陥るエイトを見て、ため息をつくミーナ。
その姿は子を見守る母の様だった。

「さあ、立ちましようアハト」

「……………どうしてだ？」

「あれを片付けるのよ。私も手伝うわ」

「……ああ、そうだったね」

ミーナは優しく言葉をかけると共に手を差し出す。
部屋を一瞥し、ミーナの言葉を理解するエイト。
エイトはミーナの手を取り、立ち上がる。

「それじゃあ、片づけますか」

塞ぎ込んでいた彼はどこへやら、エイトは威勢よく片づけ始めるのだった。

＊

「その手はどうしたの？」

片づけという名の荷物の整理作業を始めて、少し経った頃。
ミーナが僕の手の包帯に気付いてしまった。
視界に入らないように隠していたのに……………。
相変わらず目聡い。

「えーと……………これは……………」

言いよどんでしまう僕。

これでは何か隠そうとしているのが、もろ分かりである。

「その…………怒らないで聞いてくれるか？」

どうにか、取り繕うことに成功する。

だが、僕の言葉を聞いたミーナの目が細められていく。
彼女の追及の目が一段と厳しくなったのは気のせいか…………？

「場合によります」

僕のためらいがちの物言いをきっぱりと切り捨てるミーナ。

どうやら、気のせいではなかったようだ。

おまけに歳不相応な威光も感じてしまう。

本当のことをポロッと言ってしまうそうだ。

さすがはミーナ。

この年でここまでの貫録が備わっているのもなどそう居ないだろう。

上の連中がめぎつ……………いや、何でもありません……………本当に。

「荷物の中に誤って入っていた爆薬が爆発して、ちよつとね……………」

ばらばらになった木箱と床に散らばった荷物を指しながら、説明をする。

苦し紛れの嘘。

しかし、フラウが残して行った爪痕が爆発の痕跡を見事に醸し出している。

「……………はあ」

説明を聞いたミーナの口から出た溜息。

騙し通せたか？

緊張のあまり、僕は自然と息を飲んだ。

「分かりました。ユリアさんにやられたんでしょ」

「うん、そうそう……………って、へ？」

間拔けな声が口から漏れる。

どこで本当のことを言ってしまったか？

自分の言動を振り返るがそこに答えはない。

「だから、爆薬が——」

「ばれる嘘をつくのは感心しないわね」

「うっ……」

僕は真面目な顔で嘯こうとする。

しかし、ミーナの前ではこの行為も徒労に終わった。

完全に見抜かれているのだ。

これ以上の抵抗は無意味だった。

「原因はいつもの兄妹喧嘩ではないかしら」

「……そんな感じだよ」

ミーナの推測を認める。

実際はかなり違うのだが、彼女たちの中ではあれが兄妹喧嘩と認識されているので仕方ない。

僕が一方的にやられるだけなのに……。

「喧嘩もほどほどにね」

「はい」

僕を注意するミーナ。

こういうことはユリアに言ってほしい。

だが、そんなことを言えば、兄だからしっかりしなさいと言われるんだろうな、たぶん。

僕が取り留めのないことを考えていると、部屋の入口のほうから元気な声が響いてきた。

「たっだいま」

「入るね、兄さん」

入ってきたのは金髪と銀髪の少女たち。

部屋を荒らしたフラウとそれを片づけに来たユリアだ。

話が終わった途端入ってくるとは、タイミングが良すぎる。

おそらく、外で盗み聞きでもしてたんだろう。

「あっ、ミーナだ」

入ってきて早々、ミーナの姿を見つけるフラウ。

さっそくミーナを見つけた以外は、何の不自然も見受けられない。もし、僕の予想通り覗いていたのなら彼女はかなりの演技派だ。

「じゃあ、みなでおかし探しをガンバろ」

「「片づけが先です（だよ）！！」」」

「ええええ」

元気よく掛け声をあげるフラウ。

それを聞いたみんなの心が一つにまとまる。

これ以上散らかすなと。

一同から駄目出しを受けたフラウは悲鳴に近い声を上げた。

「お菓子探しは片づけが終わってからね」

「アハトの嘘つき!!」

「……………（頼む）」

「はぁ」

自分の手に負えないと判断した僕は、ミーナにアイコンタクトを送る。

彼女は仕方がないわねと言わんばかりにため息をつく、フラウの説得を始めるのだった。

「へごめんなさい」

唐突に小声でユリアが申し訳なさそうに謝ってきた。
ユリアは謝ったきり、左手の包帯を見て俯いている。
さて、どうしたものか……。

元々、怒る気もなかったし、僕の中では割り切っていたからね。
それにユリアがふざけて固有魔法を使うことなんかないから、僕にもないかしの落ち度があるんだろうね。
まあ、ここは適当に……。

「気にするな。俺も気にしてないからさ」

「ふえ……／＼／＼／」

「……………ごめん、ごめん」

やっとのことで詫びの言葉を口にする。
切実に謝ろうと死力を尽くしているのだが、気を抜くとまた笑いが漏れてきそうだ。

「……謝るぐらいなら笑わないでください」

口をとがらせるユリア。

ほとんど涙目になって僕を見上げている。

「ほんと、悪かったって」

お詫びのしるしに頭を撫でる。
すると、上目遣いで見てくるその顔はわずかながら晴れたものになっている気がした。

「よしよし」

僕はこの可愛い妹をいつまでも愛で続けるのだった。

にゃまいきです……（後書き）

エイト「そこへ直れ、作者!！」

ユリア「そうよ、この本文ということ!」

作者「ひえええ〜（逃）」

エイト「逃がさん!」

作者「じゅ、銃はなしですよ!」

ユリア「捕まえた!」

エイト「よくやった、ユリア」

ユリア「えへへ／＼」

エイト「今回の話はということだ!」

作者「ちよつとした出来心でした。すいません」

ユリア「出来心って……私、結構恥ずかしかったのよ／＼」

作者「でも、意外な一面が見れて可愛かったですよね、エイトさん?」

エイト「確かに」

ユリア「い、いくら可愛くたって恥ずかしいことはダメです!」

作者「ユリアさんはユリアさんで、エイトさんに頭を撫でられてご満悦出したが?」

ユリア「あう／＼／」

エイト「ユリアのは分かったが、僕のはどういふことか説明を求めようじゃないか!」

作者「それはハルトマンさんの仕業ですね」

エイト「フラウが?」

作者「はい。当初はハルトマンさんにタイトルコールをやっていた
だく予定でしたが、少し手違いがおきまして……」

エイト「ああ、そういうことだったのか」

作者「それはそうと、エイトさん口調を直さなくていいんですか?」

エイト「そ、そうだったね。ありがとう」

作者「ハルトマンさんに聞かれたら一大事でしたね」

エイト「全くだよ」

????「そうは問屋が卸さないんだな」

エイト「誰だ!」

エーリカ「地獄の閻魔大王こと、エーリカさんの登場だよ」

作者「(まったく、そう見えませんが……)」

エーリカ「アハトはあれだけ言ったのに、又わたしとの約束を破るんだ」

エイト「これにはわけが——」

エーリカ「問答無用だよ。こちよこちよこちよ」

エイト「ふ、ふら、う、ぼ、ぼくの、はなしを……」

エーリカ「こちよこちよこちよこちよこちよこちよ」

エイト「わ、わかったから。やめて」

エーリカ「約束を破るから悪いんだよ」

エイト「や、やめ……」

作者「(エイトさんが力尽きましたね。ハルトマンさんは恐ろしい人です)」

エーリカ「次は作者さんの番だよ」

作者「え？」

エーリカ「作者さんもネタバレはよくないよ」

作者「い、一体フリーガーハマーを持って何してらっしゃるのでしょうか？」

エーリカ「ふぁいやー」

作者「ぎやややあああああああああ」

エーリカ「これでお仕置きおくしまいと」

一方、その頃……

ユリア「あうゝ（久しぶりに頭なでなでもらったゝ／＼）」

いまだ、悶えていた―――。

『追加報告』

先日、ユニークアクセス5,000件突破しました。
読者の皆様ありがとうございます。

これを機にまた新たな挑戦をしていくつもりです。

（『魔術師の戦律』は続きますよ）

挑戦することの内容は次回発表します。

こう、御期待を。

本編は次回からは真面目な話に戻っていくつもりです。

これからも、どうぞよろしく願います。

疑惑の眼差し、荒ぶる義妹（前書き）

作者「更新です」

エイト「……遅い」

ユリア「そうね」

エイト「一日遅刻していると言っているのだ！」

作者「ふふふ、無計画さが祟りましたよ」

ユリア「な、なんだか作者さんの様子が変わだよ」

作者「ははは。所詮、一万五千字の大作を一週間で書き上げるのは無理でしたか」

エイト「しっかりしろ！ 君はそんなキャラではなかっただろう！
！」

作者「記念すべき十話目だからと言って無茶をするべきではなかったのですね」

ユリア「しっかり意識を持って！！」

エイト「さくしゃあ〜！！」

エーリカ「何してるんだか」

エーリカ「馬鹿をやっているみんなをほっといてっ」と

エーリカ「タイトルコール言ってみよう!!」

エーリカ「『魔術師の戦律』 第十話 「疑惑の眼差し、荒ぶる義妹」に」

エーリカ「シュトルム・アングリフ!!」

疑惑の眼差し、荒ぶる義妹

ミーナがフラウを説得したのち、片づけが再開されたのだが……

「もう少し、優しく扱ってくれよ」

「……………（ぷいっ）」

片づけが再開してから、物の扱いが荒くなったユリア。

こんな子ではなかったはずなんだけど……。

彼女の粗暴に僕は頭を悩ます。

「なんだかユリア怒ってるね」

まるで他人事のように話し出すフラウ。

ユリアが怒っている原因はこの娘にあると思うのだが……。

原因が何であろうと、僕に火の粉が降りかかってくるのだから始末が悪い。

「せっかく、仲直りのチャンスあげたのにアハトはダメダメだね」

「うっ……」

さらに自分は気を遣っているのだからどうかしろと、駄目出しまで行ってくる始末。

フラウがすねたのはふたりで話し合いをさせる為の布石だったのだ。

まったく、この娘はいらない気を遣ってくれるよ。

その甲斐あって一度は、ユリアと仲直りできたのだが……。
僕の心はやるせなさでいっぱいになる。

「サボらずにちゃんと手を動かしてくださいね、グライナー少佐」

妙にとげとげしい言葉を浴びせてくるユリア。

こちらから話しかけても無視するのに、向こうからはたびたび容赦がない言葉が飛んでくる。

会話の一方通行もいいところだ。

本当、女の子は難しい。

「……（ミーナどうにかしてもらえないか）」

「ふふふ」

再び、ミーナに助けを求める。

情けないことこの上ないが、自分では手に余るのだからどうしようもないのだ。

僕の株が急暴落している気がするが気にしない。

ミーナと目が合うと微笑み返してきた。

おそらく、僕の要求に対する答えはNo。

直感が告げてきている。

この気難しい魔女たちを僕ひとりで相手にしろというのか。

ミーナも鬼だな。

「いま失礼なことを考えてなかったかしら？」

「また、変なこと考えていたんだろ？」

「兄さんは変態で変人」

「と、特には何も考えてないよ」

透かさず、僕の思考を読み取るミーナ。

最近のウィッチたちは読心術でも身に着けているのだろうか……
侮れない。

さらにフラウとユリアが、ミーナの言葉に乗じて言いたい放題である。

まさに四面楚歌。

南のミーナに東のフラウ、西のユリアに北の壁。

おい、せめて君だけでも味方してくれよ、壁！

「……………」

当然のことだが、無機物に話しかけても返事など返ってくるはずもない。

「何つまらないことしてるんですか？」

ユリアの容赦ない一言。

まともにこれを貰った僕は撃沈する他ないのだった。

*

「やっと、終わったわね」

心の底から出てきたようなミーナの一言。

その一言には、この一時間にも及ぶ苦労が凝縮されていた。ハルトマンが散らかした荷物たちはエイトの指示のもと、あるべき場所に収まっている。

その細やかな指示には苦言を呈されたほどだ。

ともあれ、片づけが終わりミーナ、ユリア、エイトの三人は一息つこうとしていたのだが……

「じゃあ、おかしさがし再開だね」

意気揚々と彼らの出鼻をくじくハルトマン。

それもそのはず、彼女が解体した木箱からは目的のお菓子が出てこず、悶々として片づけの手伝いをしていたのだ。

あのハルトマンがおとなしくやっていたのだから無理もない。もっとも、散らかしたのは彼女ではあるが。

「そうね、みんなはお菓子探しをしてもらえるかしら」

「ミーナはどこか行くのか？」

「見つけたら、どうせ食べるんでしょ。なら、飲み物も必要じゃないかしら」

ミーナはお茶会の準備を進めていこうとする。

夕食を食べた後というのに、甘いものは別腹のようだ。

「じゃあ、ユリアとフラウはお菓子探しをしようか」

「おかし、おかし」

「ミーナ、私もついていくわよ」

「ユリアがいないと、どれに入っているか分からないだろ」

「……（ぷいっ）」

再三、ユリアに無視され続けるエイト。

ユリアの怒りはまだ収まっていないようだ。

「ユリアがいないと、アハト寂しいってさ」

「ふ、フラウはいきなり何を言い出すんだよ！」

思いもよらぬハルトマンの発言に動揺丸出しのエイト。

どうやら、エイトはシスコンのようだ。

自ら独立部隊を立ち上げ、副官に義妹を添えていることからそのことは窺える。

「違うぞ、断じて違うぞ！ ユリアが必要なのは……そのだな……副官として、とても優秀だからだかな！ あゝいや、それだけじゃないぞ！ その……大切な家族として、孤児院で育った兄妹としてもだな————」

バルクホルンばりの熱弁を始めるエイト。

聞かれてないことまで次々と口にしていく。

何に対して違うのか、誰に対して違うのか……その答えは錯乱気味のエイト本人しか知らない。

仮に本人が否定したところで、周りが判断するのだから意味がない。

そのことにまったく気づいてないようだ。

「……（じいゝゝ）」

「な、なんだユリア」

「兄さんの変態！」

「ぐっ……」

エイトは先ほどから続く、エイトⅡ変態という、ユリアの主張に言葉を詰まらせる。

シスコンⅡ変態という式が成り立つのなら、その主張もあながち間違えではない。

「でも、ありがとう」

「ん、ああ」

ユリアは態度を一変させて、エイトにはにかみかける。

その変化についていけない彼は、戸惑いながら照れたような表情を見せるのだった。

「へねえ、ミーナ」

「〈邪魔しちゃだめよ〉」

完全に二人の世界に入ってしまったエイトたちを尻目に、ハルトマンとミーナは密談を始める。

ちなみにこの構図は小一時間前にも形成されていた。

「へ分かってるよ。ミーナは二人の仲が良くても大丈夫なの?」

「へ兄妹仲が良好なのは問題ないわよ」

「へいつもはあんなにカリカリしているのに?」

ハルトマンが気にするのは、異性との交遊である。

つい8か月前に宮藤が扶桑の少年兵から手紙を受け取った時に事だ。

あの時のミーナはどこか刺々しく、宮藤宛の手紙を少年につき返してしまったのだ。

一見すると大人げない行為だが、裏返せばそれはミーナの決意の現れである。

そんなミーナが兄妹とはいえ、異性同士の親しい会話を傍観しているのだ。

疑問に思っても仕方がないだろう。

「へ隊の風紀を乱したり、一線を越えなければ、つべこべ言うつもりわないわよ」

「へまあ、そくだよね」

頭の後ろで腕を組むハルトマン。

いまのやり取りの答えも、ミーナがなぜそんなことをするかも彼女には分かりきったこと。

ミーナとエイト、ハルトマンの付き合いはもう五年にもなる。ユリアとの付き合いは三年。

すでにお互いの性格も分かりきっている。

だから、彼女たちの会話は目の前で繰り広げられる、茶番劇が終わるまでの暇つぶしに過ぎないのだ。

「やっぱね、兄さん」

「なんだい？」

「そういうね……恥ずかしいことは人前で言わないでね」

茶番劇も終盤に差し掛かる。

ついにユリアが周りの視線に気づいたのだ。

ここからがこの茶番劇の唯一の見せ場である。

小一時間前にも似たような会話が繰り広げられたばかり。

その時はエイトが対応に失敗。

結果、ユリアの機嫌が悪かったのだ。

もっとも彼自身はハルトマンが機嫌を悪くしたのだと思い込んでいるのだが……。

「ん〜」

「……………」

思い悩むエイト。

答えをじっと待つユリア。

ふたりの視線が交錯する。

「分かったよ。善処する」

彼の口から出たのは何とも曖昧な言葉。
しかし、一度失敗したエイトにとって、無難な言葉を選んだのは
僥倖とも言える。

「はあ」

当然、ユリアから出たのはため息。

「？　ため息なんてついたら、幸せが逃げるよ」

「もういいです」

そのまま呆れたような声音で言葉を紡ぐ。

エイトが理解していないのは承知している。

彼は鈍いことにはとことん鈍い人間なのだ。

「相変わらず仲がいいよな」

会話に入り込むハルトマン。

自分たちを除けものにして話していたユリアたちに、皮肉を込めて
からかい始める。

「ちゃらかさないで、フラウ」

いつもなら過剰反応を見せるユリア。

だが、今回はいたって冷静。

どうやら、ダメな兄を持ったせいで、少しご機嫌斜め。

「ありゃ、やぶへびだ」

「少し落ち着きましょう」

「私は落ち着いてるわよ……」

ミーナが割って入ることで、険悪な空気が入れ替わる。

「お茶のほうはどうするんだ？」

エイトが一言。

「淹れてくるわよ」

「わたしも行く」

元氣よく声を上げるハルトマン。

「フラウも一緒に行くのか？」

てっきり、お菓子探しをするのかと思っていたエイトは驚きの声を上げる。

「うん。ミーナとコーヒー入れてくるから期待しててね」

少女の何気ない一言。

そこには爆弾が潜んでいた。

「も、もしかして、フラウがコーヒー淹れる、とかないよな？」

エイトは恐る恐る尋ねる。

知っている人は知っているとかが彼女の料理の腕は壊滅的。

例え、コーヒーを一杯淹れるだけでも油断ならない。

「そだよ」

ハルトマンは当然とばかりに胸を張る。

「「それはダメです（だよ）！！」」

ハルトマンの無謀な考えに、再びみな的心が一つになるのだった。

＊

みんなの説得でフラウはどうか考えを改めてくれた。
途中、涙目になって可哀想だったが、命の危険もあるのでこればかりは仕方がない。

コーヒーを入れるため厨房に向かった、フラウとミーナ。
残った僕たちはお菓子探しを開始するのだったが……。

「怒っているのか？」

「怒ってません！」

本人が否定するが、どう見てもご立腹の様子。

頬までぷくーっと膨らましてアピールしてくる。

その姿は可愛いのだが……………。

正直言って僕はいまのような陰悪な空気が好きではない。
こんな空気、仕事の中だけで十分だ。

上層部に行けばいくらでも味わえる。
軍ないし政治家の連中も然りだ。

権力が増すほど人の欲は大きくなるようで、どこへいってもそれは変わらない。

また、上に這い上がろうとして野心を抱く連中も多々いる。
本国にいるときなんかは、それらが接触してきて腹の探り合いをしなければならぬ。

カールスラントを出てもそれは変わらない。
今度は独自開発をした技術を盗もうとする連中に絡まれるからだ。
まったく、嫌気がさしてくる。

フラウはこの基地にいる間は心配ないって話していたが、ミーナが対応しているからだろう。

僕が来たことで、前にも増して忙しくなることは目に見えている。
なんだか彼女に悪いことをした気分になる。

どこかで恩返しをしないとイケないな。
考えておかないと。

「……………」

視線を感じて、下を向くと――――。

「わぁっ!!」

僕は驚きのあまり飛び退く。

すぐ、真下にユリアの顔があったのだ。

誰だって驚くだろう、普通。

「人の耳元で騒がないでください」

おまけに怒られる始末。

一体、僕が何をした？

あんな間近で覗き込んでいた君が悪いんじゃないか！

「兄さんは変態です」

今日という一日で手に入れた切り札を持てあますことなく使用するユリア。

有無を言わずに使用してくるため下手な反撃に出られない。

それにしても変態と言われるのに慣れてきたな……。

はっ、いかん、いかん！

ここで認めてしまつては変態確定ではないか！

このままではユリアのペースに乗せられかねない。

僕は静かに深呼吸を行う。

よし、気持ちの切り替えができた。

「ミーナたちが返ってくるまでにお菓子を発掘しようか」

「……………」

こちらを向いたまま、反応してくれないユリア。

「ユリア」

「……………」

名前を呼ぶが反応してくれない。

いや、反応はあった。

若干目が細まり、眼差しがきつくなった気がする。

「ずっと怒ってるけど、なんか悪いことしたか？」

「……自分で考えてください（ぷいっ）」

遂にそっぽを向き、ほほを膨らまし始めた。

自分で考えろって……。

分からないから聞いているだが。

あまりに理不尽さにイライラしてきた。

落ち着け僕、落ち着け俺。

自己暗示をかけて、逆立つ精神を静めていく。

ここで怒っても事態が解決することはない。

むしろ、悪化の一步をたどるのだ。

「悪かった、反省してるから」

「……………」

全く耳を貸してくれないユリア。

どうすればいいのか？

答えは自ずに有らず。

ユリアは時よりちらちらとこちらを見るだけで、なんのアクションも起こしてこない。

彼女を見ていると膨らんだ頬に目がいつてしまう。

まるでリスのような可愛いしぐさ。

突きたい衝動に駆られる。

ぷにぷに。

「「!？」」

無意識のうちに手が伸び、ユリアの頬に触れていた。

これには突いた本人である僕も、突かれたユリアも体をぴくっと反応させてびっくりしている。

「あ、あああ、ご、ごめん」

言葉にならない声とともに僕は手を引き戻そうとする。
しかし、それは叶うはずもなくユリアによって阻止された。

「……………」

ここにきても無言。

ただ、火山が噴火する前のような禍々しい雰囲気は肌で感じ取れる。

あと締め上げられた右手首の痛みで。

「に・い・さ・ん!!!!!!」

遂に噴火が始まった。

もうこの勢いは誰にも留めれそうにない。
万事休す。

「いつもそうです! いつも! いつも! そうやっておちやらかして!! 今日という今日は私も堪忍袋の緒が切れました!!!!!!」

使い魔を顕在化させ、逆巻く魔力。

ユリアの口から地獄へのコールサインが放たれる。

事あるごとに怒っている気もするが、この際気のせいだろう。

「何か遺言はありますか？」

物騒なセリフを述べるユリア。

ヤル気満々である。

「できれば穏便に、目立たないところをやってもらいたい」

左手の包帯を見せてアピールする。

ここまで悠然と構えてられるのは頭がクリアーになっているからだ。

人間、死期が近づくとき冷静になれるというのは本当らしい。

「分かったわよ。目立たないところにするから」

左手の包帯を見て、ユリアの怒気が少しながら弱まった気がする。

夕食の時の負い目もあるんだろうか。

同情を誘うつもりはなく、単に面倒なことになりたくなかったからなのだが……。

「手を背後で組んで、目を閉じ、口を開けてください」

処刑が開始される。

手を後ろで組んで、目を閉じろというところまでは理解できるが

……口を開けて何をするつもりだ。

歯科検診をするんじゃないし。

底知れぬ恐怖がわいてくるが、命令に唯々諾々と従った。

「少し痛いけど我慢してね」

「はえ!？」

酷く優しい声音になったユリアの言葉。

安心する暇もなく予想外なことが行われた。

彼女の手が口の中に侵入してきたのだ。

まさか!!

「フラーム」

気づいた時にはすでにとき遅し。

鋭い痛みが僕を支配した。

疑惑の眼差し、荒ぶる義妹（後書き）

作者「あれ？ エイトさんは一緒じゃないんですか？」

ユリア「兄さんは欠病。放置で」

作者「りよ、了解しました」

ユリア「それで新作はどれかな？」

作者「こういうときはあれで」

ユリア「あれね♪」

作者「それでは」

ユリア「じゃんっじゃかじゃかじゃかじゃかじゃかじゃかじゃかじゃか
やか」

作者「今回、『s c h w a r z s c h i l d』が手掛けることにした作品は」

ユリア「じゃかじゃかじゃかじゃかじゃかじゃかじゃかじゃかじゃか
か」

作者「……」

ユリア「じゃかじゃかじゃかじゃかじゃかじゃかじゃかじゃかじゃか
か」

作者「（引っ張りますね）」

ユリア「じゃかじゃん!!」

作者「こ、こちらです（何か合図くださいよ!）」

時は新暦75年

平和なミッドチルダは災いに襲われる。

動き出す傭兵団。

底の見えぬ管理局の闇。

狂科学者が起こす大祭。

世界を終焉に導く箱舟。

そして、青年が選んだ未来とは……。

魔法少女リリカルなのはStrikerS（灰より生まれし王）

毎週日曜更新予定。

作者「どうでしょうか？」

ユリア「うゝん、いまいち分からないよ」

作者「大丈夫です。活動報告できちんとした予告をやるつもりですから」

ユリア「えっ!? 私、見に行けないの!？」

作者「心配無用です。ちゃんと呼びますから」

ユリア「やったゝ!」

作者「というわけで、興味のある方は活動報告のほうでまたお会いしましょう」

ユリア「またねゝ」

忘れ去られた報告書（前書き）

更新します。

今回は『灰より生まれし王（仮）』の準備が忙しいので雑談は省かせていただきます。

この話は元々、前回の「疑いの眼差し、荒ぶる義妹」の後半部分にあてる予定だった話です。

執筆状況の具合で半分に分けてしまったわけですが……。

前回のと合わせて1万5千字越えの長作「忘れ去られた報告書」をお送りする予定だったんです。

しかし、物事はそう簡単にはいかないもの。

つまり失敗してしまいました。

さて、ここいらで作者の独白は終わらせていただきます。

それでは！

『魔術師の戦律』 第11話 「忘れ去られた報告書」 始まります

忘れ去られた報告書

「これだったかな？」

木箱の中身を確認していくユリア。

ちなみに自前の二枚舌に制裁を加えられたエイトは床をのたうちまわっている。

熱いものを飲んで舌を火傷する人間はいるが、他人に舌を焼かれるという珍事に陥ったのは、世界広しと言えど彼ぐらいなのではないか。

「これもはずれか」

悔しがるユリア。

まるで彼女はゲーム感覚で探し物を見つけようとしている。

現在、ハルトマンが解体した三つの木箱とユリアが確認した二つの木箱を除き、残り七つの木箱が陳列されている。
いまさらだが、某少佐の荷物は多い。

「これか！」

はずれ。

「今度こそ」

残念。

「むむむ」

また、はずれ。

「あつ、これは！」

驚きの声を上げるユリア。

おもむろに彼女は箱の中に手を伸ばす。

「うん、これこれ♪」

ユリアは箱の中から取り出した物を抱きしめ、あからさまに上機嫌になる。

大事に抱いているのはワインボトル。

中の透明な液体が揺らいでいる。

「貰っていくね♪」

エイトに一言詫びを入れると、手持ちのワインを別なところに移していく。

どうやら、戦利品を手に入れたようだ。

「じゃあ、つぎつぎ！」

作業を再開する彼女。

残りは三つ。

「ええー、またはずれー！」

ユリアは嘆きの声を上げる。

彼女はことごとく運が無いようだ。

残ったのは右か左かのどちらか。

右の木箱は真新しく、左の木箱は年紀が入っている

「どっちだと思う？」

ユリアは問いかけた。

「ねえ、聞いてるの？ 兄さん！」

床をのたうちまわっていたエイトに。

その声には微弱ながら怒気が混じっている。

完全に八つ当たりだ。

「そっひい」

リスポーンの中中であるエイトは上半身だけを起こし、右側の木箱を指す。

まだ、痛みが抜けきらないようでしゃべりに影響が出てきている。

「こっち？」

「ふん」

ユリアの確認にエイトが答える。

その木箱を調べてみると……………。

「うそっ！！」

ユリアの口から驚きの言葉が漏れる。

その箱の中身は……………お菓子の箱らしきものが。

木箱いっぱいに敷き詰められている。

多いにも限度がある量だった。

「むう」

菓子箱を見つけたユリアは不満げな声を出す。

自信は何度もはずれを引いたのに、エイトが一発で当ててしまったからだ。

二分の一だったという正論はこの人には関係ない。

「やえ、やえ」

その様子を見たエイトは仕方なく立ち上がる。

ユリアは鋭くにらんでいたが当の本人は気にしていない。

「はい」

エイトは箱の中からおもむろに一つの菓子箱を取り出し、それをユリアに差し出した。

「？」

「どうぞ」

クエスチョンマークを浮かべるユリア。
そんな彼女にエイトはもう一声かけた。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

恥ずかしそうにお礼を言うユリアと柔和な笑顔で返すエイト。

「でも、ありがとうはこっちだよ」

「えっ？」

エイトの二の句に問い返す彼女。

「手伝ってくれて、助かった」

「うん……」

エイトの次から次へと出るお礼の言葉。

それらを聞いたユリアはしおらしくなる。

「これも開けてみるようか」

「はい！」

最後に残った、古びた木箱を指差すエイト。

余談だが、エイトのしゃべり方だ元に戻っている。

火傷を克服するコツを掴んだようだ。

「よいっしょっと」

齡十七年でおやじくさい声を上げるエイト。

口から出てしまうのだから仕方がない。

「あれっ、これは？」

古びた木箱から出てきたのは……………。

「わぁ、なつかしいー!!」

感嘆の声とともにエイトが手にしたものをひったくる少女。

「うんゝ、ちょっと小っちゃくなったかな」

エイトの手からひったくったのは厚手のロングコート。
ユリアはそれを身丈に合わせる。

このコートを着用していた頃より大きくなったようだ。
特に胸が……。

「ねえ、兄さん覚えてる？」

「ああ」

ユリアの問いに首肯するエイト。
それぞれが過去の思い出に浸る。
されど、思い出しているのはどちらも一年半前。
ユリアが手にするロングコートが見せるのは部隊発足当時のことだ。

「なんだか、しみりしちゃったね」

「そうだね」

「他にも何かないか探そう!」

元氣を見せるユリア。

「泣くなよ」

優しく声をかけるエイト。

ユリアの挙動を彼は見抜いていたのだ。

それが空元気であると。

「泣か、ない……よ……」

かすれていくユリアの声。

エイトの一言で涙腺の決壊が始まる。

「おっと」

エイトは胸に飛び込んできたユリアを受け止める。

「……ごめんなさい。ちょっとだけ………ちょっと………だけで、いいから……」

彼女の涙がエイトの胸を濡らしていく。

「好きにしていよ」

エイトはできるだけ優しく、少女の震える肩を抱くのだった。

＊

「みんな、元気になっているかな？」

泣き止んだユリアがぼつりぼつりと漏らしていく。

「会いに行ってみるか？」

静かに僕は問いかけた。

ユリアの口から漏れてきた言葉。

彼女が古巣のJG26やノエルカールスラントに移住した孤児院のみんなを気にかけているのは明確である。

お世話になった先輩、ともに空を駆けた戦友たち。会いたい人は他にもたくさんいるだろう。

そもそも、彼女を連れまわしているのは僕の勝手なのだ。

ユリアにはとても不自由をさせている。

だから、僕はできるだけユリアの気持ちを尊重するつもりだ。

「そのうちね」

「そのうちって……」

彼女の答えに面食らう。

ガリアが解放されている現在、西部戦線で戦っているJG26を訪れるぐらいなら造作もない。

第一、僕の知っているユリアは自分の気持ちに素直な子だ。

それなのに断るとは……。

彼女の成長に兄として、微笑ましいような、齒がゆいような、もどかしい気持ちになる。

「……ローマを開放してから」

「そうかい」

彼女の確固たる目標。

僕はそれをきっちり聞きとめる。

「ネウロイを追い払ってから、みんなに会いに行くんだ。そして、みんなを驚かすのよ」

「頑張らないといけないね」

「……うん」

気丈にふるまうユリア。

僕はその頭を優しく撫でていく。

一度しか前例のないネウロイの巣を破壊するという偉業。

ネウロイの脅威を取り除き、安心して暮らせる世界を作ること。それが、彼女の願いのようだ。

ウィッチなら軍人なら誰しもが一度は抱く理想。

人々は平和を手に入れるために躍起になっている。

だが、現実はそんなに甘くない。

この戦争で多くの者が失われていった。

異形に立ち向かった者は、空に散り、海に沈み、地に還っていった。

その根源に挑んだ者はほとんどの者が帰らぬ人となったのだ。

僕の臉の裏にはいまだその光景が焼き付いている。

「無茶をしないでくれよ」

「にい、さん……？」

無意識のうちにユリアの頭を抱きしめていた。

なんだかんだ言っても言われたとしても、大切な人なのだ。上官として、戦友として、なにより家族として―――。

この温もりは失いたくない。

しばらくして、手を緩める僕。

すると、ゆっくりユリアは抜け出していった。

僕の腕の中でおとなしくしていたのが不思議なぐらいだ。

「それはこちらのセリフですよ」

手を後ろで組み、妖艶な微笑みを浮かべるユリア。

それから少し憂いだ顔になって……。

「いつも無理をするのは兄さんなんですから」

ユリアの言葉を否定しようとして、寸前で思いとどまった。

心当たりが多すぎる。

ここ二年で撃墜されたのが三回、墜落が四回である。

もっとも、二回の撃墜は地上でのことであるから割愛とする。

空での撃墜では重傷を負い、墜落した時には極寒の地で一週間、迷子になったこともあった。

我ながらよく生きてたものだ。

「心に留めておくよ」

自分のためにも、ユリアのためにも。

そして、僕の身を案じてくれる者のためにも。
無理は控えよう。

そう、思いを抱くのだった。

「あっ！」

ユリアが何かに気付いたような声を上げる。

「ごめんなさい、兄さん」

僕の胸元を見て俯くユリア。

いったい、どうしたのだろうか？

「その……服を汚してしまって」

ユリアは気恥ずかしそうに語る。

胸元を見ると制服が皺くちやになっていた。

「気にしないでいいよ」

「ダメです」

僕は苦笑しながら応える。

だが、ユリアはそれを許さない。

「黒だから気にならないから」

「それでもです」

ユリアの態度に肩をすくめて見せる。
彼女はなおも許そうとはしないのだ。

「僕は気にならないよ」

「ダメだと言っているんです！」

ユリアはさらに言葉を重ねる。
一步を身を引かない彼女。

目には僕の態度をただそうという意思が見受けられる。

彼女にはいつも取り越し苦労をかけている。

なのに嫌な顔一つせずに僕の汚点を注意してくれる。

若干、厳しくはあるが……。

その健気な姿に助けられているのだ。

だから——。

僕は彼女に近づいて髪を掻き上げた。
そして————。

「だって可愛いユリアのだからね」

僕は髪を掻き上げたユリアの額に唇をそっと落とした。
優しく。

愛しみの思いを込めて。
感謝の気持ちを込めて。

「きゃうっ!？」

僕の行為に驚きの声を上げ、勢いよく離れるユリア。
何を驚いているのか。
昔は何度もせがんでいたじゃないか。

「に、兄さんは卑怯です。そうやって、はぐらかそうとして……」

顔を真っ赤に染め、こちらを上目遣いで見てくる。

涙を目に溜める様子は小動物を思い起こす。

うゝ、うゝ、と唸っているのは御愛嬌か。

「分かったよ、変えるよ」

遂に僕の方が折れた。

どうしてもユリアに従わないといけない。

本能的にそれを感じ取ったのだ。

「あれっ？」

洋服ダンスを開け、探していたものがないことに気付く。

「ユリア上着は？」

「ないです」

「はいっ!？」

僕は思わずすっとんきょんな声を上げる。

ないですって……。

それこそないだろう。

アフリカを出るときには予備の制服はまだあったはずだ。

もしかして、フラウがどこかにやってしまったんだろうか？

「洗濯に出しました」

答えは言ったって簡潔。

ユリアの仕業であつた。

でも、それなら―――。

「もう一着あるはずだよね？」

「それも洗濯に出しました」

三着中二着も洗濯に出したのか。

そりゃあ、砂漠にいたから砂埃が気になるのは分かるけど……。

いま着ている上着を含め、全ての上着が洗われる運命にある。

つまり、一着も手元に残らないのだ。

「……………よし、乾くまで上着なしだ！」

僕は高らかに宣言する。

季節は春。

少々肌寒くあるが我慢しよう。

「認めません！ 第一、カールスラントの佐官たる者がそんな身嗜みでどうするんですか！！」

「トゥルーデみたいなのを言うなよ……」

僕は思わずばやいてしまう。

だって、ここは自室だぞ。

服装ぐらい自由でもいいじゃないか。

「いくらお節介でも、これだけは言わせてもらいます!」

「他には言わないんだな」

息巻くユリアの揚げ足を取ろうとする僕。

これはいつもの不毛な会話。

だから、一応の確認ともいえる。

次にくる言葉はおそらく――。

「兄さんの態度次第です」

きっぱりと、前言を覆す彼女。

予想通りだ。

自然とため息が出てくる。

「はあ、夏用なので我慢するかな」

「許可できません。風邪をひいたらどうするつもりですか？」

僕の意見は即座に拒否される。

あれはダメ、これはダメ。

そろそろイライラしてきたぞ。

「あ、もう! 上着がないのにどうやって着るんだよ!!」

「とってきます」

ユリアは踵を返す。

「どこから？」

「私の部屋にあります」

僕の問いに奇天烈な答えを返すユリア。

「僕のはないだろう？」

オーダーメイドで作られているため、この三着以上はないはずだ。もったも、この三着もユリアの指示なのだが……。

「私があります」

「わあ、ちょっと待って！ 待って、ユリア！！」

予想の斜め上をいく、ユリアの言葉。
慌てて彼女を制止する。

「なによ、急に慌てて……」

むすっとした顔をして振り向くユリア。

僕が慌てるのは当然だろう。

ユリアが考えていることが全く分からない。

義妹とはいえ、仮にもユリアは一人の女性なのだ。

年頃の僕にとっては服とは言え気になることもある訳で……。

匂いとか、肌触りとか。

と、とにかく精神衛生的に悪い。

それなのに自分の上着を着ると、平然に言うユリアの気がしれない。

まったく異性として意識されてないのかもしれないが……………。

「その……大きさも違うし、ユリアと僕の制服では徽章が違うだろう」

「確かにそうだけど……………」

思いつくだけの正論をぶつけていく。

自分の発想できる語源の少なさに肩を落としたことは余談だ。

「それに僕には夜間戦闘服もあるから」

「デザインが違います!」

基本的に200の制服は夜戦服を元に作ったので見た目に大差はない。

なのに、その僅かな差異さえユリアは許そうとしない。
何を拘っているのか。

ここは何か手を考えないと……………。

「制服には変わりないし、いまから夜間哨戒出かけるから問題ないよ」

「えっ!? そうなの!!」

口から出たでまかせ。

されど、ユリアの反応からしてこれはいけそうだ。

「そのつもりだよ」

堂々と嘘を吐き続ける。

胸がちくりと痛むが仕方がない。

これは必要悪である。

自分に言い聞かせた。

「むう、それなら……」

不承不承ながらも納得してくれたようだ。

もしこの嘘がばれたなら後で大目玉だ。

夜間哨戒という仕事が増えたが仕方ない。

後でミーナに許可を貰っておこう。

「心配してくれるのはありがたいんだが、もう少し大目に見て貰えないのか？」

僕は一つの提案をする。

昔から身嗜みに厳しかったが、最近になってまた一層拍車がかかったような気がする。

ここら辺で話し合っとかないと。

「ちゃんぽらんな、兄さんが悪いんですよ！」

「うっ……！」

身も蓋もないことを言われて、言葉を詰まらせる。

彼女が僕の身を案じて、言っていることなので反論ができない。

「と、ともかく、夜間哨戒に出るなら上着だけでは寒いかな」

このままでは掘った墓穴をさらに掘り下げていきかねない。
そう判断した僕は話題を変えるのだった。

「そうね。コートがあったほうがいいかも……」

顎に手を当て、可愛らしく小首を傾げるユリア。

「なら、善は急げよね。早く探しましょう」

考えていたのも数刻。

すぐに答えを出すと、僕に目もくれずに踵を返していった。

「そうしようか」

僕は苦笑すると、ユリアの後に続くのだった。

＊

「あったよ兄さん！」

僕たちがコートを探し始めて、ものの十数秒。

目的のものは見つかった。

ただ、先ほどまで見ていた木箱に入っていたのだから。

ユリアは木箱から取り出した、厚手のショートコートを僕の身丈に合わせていく。

言わずともわかるだろうが、色は黒だ。

「大丈夫そうね」

それもそのはずだ。

僕の成長はもはや止まっている。

止まったのは十六歳の時か。

ちようど、これを仕立てた頃だな。

「じゃあ、羽織ってみようか」

「それぐらい自分でできるよ」

「だゝめ」

ユリアは僕の言葉を猫なで声で押しとどめる。

こ、困った。

いまのユリアは世話焼き状態からお節介モードに変わりつつある。
どこで火がついたのか、ノリノリで。

「しょうがないな、着るだけだよ」

この娘の機嫌を損ねるべきではない。

それは周知の事実だ。

だから、僕はおとなしくユリアの厚意に従うことにした。

「りょかい」

すると、ユリアは手慣れた手つきで僕にコートを羽織らしていく。

僕も僕で言われるまでもなく、コートに袖を通していく。

このときまでは見慣れた光景であった。

そう、このときまでは。

「んっ？」

コートの中から一枚の紙が舞い落ちていった。
なんだこれ。

僕はしゃがんでその紙に手を伸ばした。

「なによ、これ」

僅かあと数センチのところその紙は消え失せた。
帯を留めようと前に来たユリアに再びひったくられたのだ。
そして、彼女はその紙に書かれた文面に目を通してている。

「……………」

ユリアは無言でその紙を見据えている。
若干表情が険しいような……。

「どれどれ」

僕の荷物から出てきたものだ。

僕の物には間違えはない。

文面を確認しようと、顔をのぞかしたその時――。

「な、何をするんだ、ユリア」

僕の首はユリアのアイアンクローに捕縛された。

痛い、痛いよ、ユリア。

彼女はなぜか、魔力を開放して僕の首を掴んでいるのだ。

「に・い・さ・ん!!」

「へえっ！」

あれ、怒ってる？

何で？

次々と浮かび上がる疑問にユリアが答える。

「どうしてあの時の報告書がここにあるんですか！！」

あの時？

報告書？

疑問が更なる疑問を呼び起こす。

発足当時から報告書等々の文書はユリアに管理を任せている。
理由はいろいろだ。

「待った！ 待った！ その紙見せて！！」

現物を見ないとわからないことが山積みである。

「……」

突きつけられた報告書。

僕はその文面に目を通していく。

文面にはそれらしいことがぎっしり書かれていて……。

「あゝ、これは……」

微かに覚えている。

これはオラーシャでの作戦報告書。

僕が提出せずに、ユリアに迷惑をかけたやつだ。

「『あゝ、これは……』 じゃないです！ ちゃんと説明してください！！！」

ユリアは僕の釈明を求める。

オラーシャにいた時も同じこと聞いたぞ。

あの時は『兄さんのせいでお昼ごはんが食べれなかったんですよ』とか『どれだけ私に迷惑をかけたか』と思っているんですか！ お詫びにお菓子を用意してください！！』とか、恨みつらみを永遠と聞かされた。

それにしても、食べ物関係が多かった気がする。

どれだけ、食い意地が張っているのか……。

「あの時、きっちり説明したよね」

それでもきちんと説明をしたら、ユリアも納得してくれた。
振り上げた拳を下してくれたのだ。

「あの時とは、状況が違います！」

問題は出てきた報告書だ。

といっても、いまになって蒸し返すようなことはしなくてもいい
と思うんだが。

「おっ！」

思い出した！

確かこれは。

僕は確信できる答えに辿り着く。

「言い訳でも思いつきましたか？」

ユリアは冷ややかな視線を送ってくる。
そんな邪険しなくてもいいじゃないか。

「言い訳でもないけど……。ユリアが持っているそれ、極秘文書だよ」

「えっ!？」

目の前にあるのは僕の記憶では極秘文書に間違いない。
報告書に似せただ。

これには訳がある。

「オラーシャの検閲が厳しかったから、そういう形で持ち出したんだ」

ただでさえ厳しいオラーシャの税関検査と検閲。

それに加え入国の仕方に問題があったようで、さらにそれが厳しいものとなったのだ。

ネウロイが徘徊しているのだから大目に見てくれても問題ないはずなのだが……。

そんな訳で文書や荷物の一部を極秘扱いにして、さらには偽造までして持ち出したのだ。

「兄さん……」

呆れたような声を出すユリア。

君だって、あれを持っていきたい、これを持っていききたいと騒いでたじゃないか。

「外交手段では手間がかかるからね」

「はあ」

それでも外交官の方々の頑張りで数か月後、無事に荷物は僕たちも元へ届けられただったが。

「まあ、そういうわけだ」

「分かりました」

なんとか納得してくれたようだ。

よかったあ。

これで怪我をしなくて済む。

ひりひりと痛む舌と包帯が巻かれた左手を見てしみじみ思った。

「机の引き出しにでも納めておいてよ」

ついでにユリアが持っている報告書もどきを引き出しに収めるようを指示を出す。

「人使いが荒いですよ」

笑顔できっぱり断ってくるユリア。

「今更じゃないか」

僕は肩を竦めおどけて見せる。

いつも言わなくてもやってくれるのにどうしたのだろうか。

「自分でやって下さい」

再びきっぱりとした拒絶。

まだ、オラーシャでのことは根に持っているようだ。

「了解」

ユリアから報告書もどきを受け取ると、机に足を向けた。

ふと、窓の外を見上げれば、闇夜に煌めく星々。

「星がきれいだ」

果ての見えない夜空を見上げ、僕は遠きオラーシャの地に思いをはせるのだった。

忘れ去られた報告書（後書き）

いかかでしたでしょうか？

前回に続き、ユリア無双でした。

今更ですが、二種類の同時連載は厳しく感じます。

ですが、できるだけ頑張るので『魔術師の戦律』・『灰より生まれし王（略）』ともども、どうぞよろしく願います。

『灰より生まれし王（略）』は今日中に初掲載したいと思います。

星夜のお茶会（前書き）

ユリア「お帰り」

ミーナ「ただいま」

エーリカ「アハトおかしは！？」

エイト「そんな急がなくてもお菓子は逃げないから」

ミーナ「カップを置きましょうフラウ」

エーリカ「おかし♪ おかし♪」

ユリア「落ち着いてフラウ」

エーリカ「落ち着いてるよ」

ユリア「落ち着いてないでしょ！」

エイト「ミーナもしかして……」

ミーナ「どうしたの？ アハト？」

エイト「このコーヒー、ホット……だったりするのか？」

ミーナ「そうだけどなにか？」

ユリア「あたしのもだったりする？」

ミーナ「ええ」

エイト&ユリア「……………」

ミーナ「二人ともどうしたの？ 黙りこくっちゃって」

エーリカ「ミーナは忘れてるかもしれないけど、二人とも猫舌だよ」

ミーナ「そ、そうだったかしら」

エーリカ「そうだよ。てっきり、ミーナの意地悪かと思って見てたんだよ」

ユリア「フラウ……ミーナがそんなことするわけじゃないじゃない」

ミーナ「そうですよハルトマン中尉。報告はきちんと行ってくさい」

エーリカ「うゝ、ミーナがおぼえてないのが悪いんだろ」

エイト「まあまあ、飲めないわけじゃないし問題ないよ」

エーリカ「わたしの味方はアハトだけだよ」

エイト「悪気があってやったわけじゃないからミーナたちも怒らなくてもいいだろ（よしよし）」

ユリア「フラウを甘やかしちゃだめよ」

エイト「別に甘やかしてるつもりはないんだけどね」

ユリア「もう、兄さんたら……」

ミーナ「ほんと、カールスラントの魔術師ったら……」

エイト「二人してなんだよ」

ユリア「別に」

ミーナ「あら、そろそろ時間ね」

エイト「それじゃあ、フラウ頼むよ」

エーリカ「りょかい！」

エーリカ「『魔術師の戦律』 第12話 「星夜のお茶会」に」

「シュトルム・アングリフ！」

星夜のお茶会

「「「ごちそうさまでした!!」」」

エイトの部屋に響く合唱。

ミーナたちがコーヒーを持って帰ってきた後に開始かれたお茶会。
それが、たったいま幕を閉じた。

「あ、フラウ。口元が汚れてるわよ、ほら」

「ありがとう」

ハンカチを取り出してハルトマンの口周りを拭いていくユリア。
それにハルトマンは気持ちよさそうに目を細める。

「こうして見ると二人とも姉妹みたいだね」

「そうね」

コーヒークップを置き、エイトの意見に同意するミーナ。
その姿は何とも様になっている。

「じゃあ、わたしがお姉さんだね」

「それはないと思うわ」

「ぶうゝ、なんで?」

ハルトマンの言葉をきっぱりと否定するユリア。

否定されたハルトマンはぶうたれている。

「なんでってそれはね……」

「傍から見たらそう見えるのよ」

「ミーナ、ひどい！ わたしのほうが年上だよ」

ハルトマンは上目遣いでミーナに迫る。

一般的に上の子どもはしっかり者だと思われているので仕方がないことなのだが。

「フラウがお姉さんでもいいんじゃないか？」

「アハト!!」

皆とは違うエイトの意見に目を輝かすハルトマン。

「ずばらなエーリカお姉ちゃんに、しっかり者の妹ユリア。いい構図だと思うんだが」

「ず、ズボラって言ったね！」

姉妹の構図を説明するエイト。

その中であつた僅かな失言。

ハルトマンが見逃すはずもない。

「悪かったよフラウ。フラウは無垢なエーリカお姉ちゃんだったね」

ハルトマンの反応に苦笑して返すエイト。

まるでその様子は――――。

「兄さんって、お兄ちゃんって感じよね」

「ん？ そうなのか？」

微笑ましく語るユリア。

だが、それを聞いたエイト本人には全く自覚がないようだった。

「そうね、面倒見のいい兄と言ったところかしら」

「それは、それは」

ミーナが下した自分の評価におどけるエイト。

実はなかなかの曲者だったりするのだ。

「妹が二人に増えたのよ」

「何か思うことはないのか？」

ユリアとハルトマン。

ふたりして、エイトをからかおうと彼を問い詰める。

「そうだね」

余裕を崩さないエイト。

彼は目を細め、優雅に一拍おいて――――。

「花も恥じらうような美人の妹二人に囲まれているんだ。僕はかなりの幸せ者だよ」

当然の如く、爆弾発言を落とした。
それを聞いた彼女たちはと言うと。

「に、兄さん！？ 恥ずかしいことはみんなの前で言わないで！！」

「そ、そうだよ！？ こういうことは許可を取ってから言うべきだよ！」

予想だりせぬ反撃に顔を真っ赤にして狼狽える。

「本当、二人とも可愛いな」

エイトは優しく微笑み、平然と告げる。

「あう／＼／／／／」

「うう／＼／／／／」

ユリアとハルトマンは悶え苦しむ。

別にエイトに他意があるわけではない。

感じたことを感じたとおり、思っことを思っ通リ言っているのだから。

それ故に始末が悪い。

「アハトもその辺にできなさい」

居た堪れなくなったミーナが二人に助け舟を出す。

「なにをかな？」

無自覚とは非常に恐ろしい。

ミーナが出した助け舟もエイトによって沈みかける。

「なんでもないです」

「そうなのか？」

「ええ」

ミーナはエイトの説得をあきらめた。

「フラウがお姉さんでアハトがお兄さんならトゥルーデはどうなのかしら？」

だが、彼女たちの救出をあきらめたわけではなかった。

話を変えることで行動を起こさせないようにする。

さすがは長年戦い続けてきた指揮官。

カールスラントの中佐は伊達ではない。

「トゥルーデは、そうだな……世話焼きのお姉ちゃんと言ったところかな」

「お姉ちゃんねえ……確かにその通りかもしれないわね」

ミーナはエイトの素直な評価に微笑みを讃える。

これで、バルクホルン、エイト、ハルトマン、ユリアのカールスラント4姉妹が並んだことになる

残るは……。

「そ、それならミーナはどうなのよ」

どうにか立ち直ったユリアが二人に問いかける。

「そうね……わたしは」

「ミーナはおかあ——」

「ハルトマン中尉」

「そうかわかしいですよ」

「……………」

「ユリアく、たすけて」

「えっ、わたしっ！」

地雷を踏むハルトマン。

ミーナの鬼の形相で詰め寄られ、透かさずユリアに助けを求める。
助けを求められたユリアもたまったものではない。

「ユリアさんはどう思っているのかしら」

「わ、わたしは……………」

扶桑のことわざでは、触れぬ神にたたりなしというものがある。
これは、面倒事に手を出さぬほうがよいということわざだ。
だが、面倒事から近づかれたらどうだろうか。

途端に逃げ場がないなくなるわけだ。

「わたしは？」

「ミ、ミーナことは……優しい……」

「優しい？」

「おかつ、兄さん頼みます!!」

ミーナに詰問され、兄であるエイトにキラースパスを送るユリア。
キラースパスを送られたエイトはというと……。

「つつっ!!」

ちびちびと冷め切らぬコーヒーを飲んでいた。
そこにユリアの大声。

エイトは刺激物を思いつき口に含んでしまった。

「つつつつつつ!!」

「に、兄さん大丈夫!？」

苦悶を上げるエイト。

心配してユリアが声をかける。

「だいじょうぶだ」

エイトがちびちびとコーヒーを飲んでいた理由。
それは妹君に焼かれた舌先がまだ痛むからだ。

いまのエイトの反応は刺激物を口に汲む、つまり傷に塩を塗った結果であつた。

舌が痛むのなら飲まないという選択肢はこの人にはない。
出されたものは最後まで食べる、というのがこの人の心情なのだ。
意外に律儀である。

「み、ミヒイナか？　しょうだな……」

しゃべり方がおかしくなるエイト。

決して、ふざけているわけではない。

ただ、舌が痛むだけなのだ。

「ミヒイナはね、みんなにやをみみやもる、母性あひゆれるおにええ
さんかな」

折角いいことを言ったエイト。

なのに舌が痛むせいで全てが台無しである。

「そうそう、ミーナはみんなのお姉さんなんだよ」

すぐさま、エイトのフォローに入るハルトマン。

その手腕はさすがハルトマンと言ったところか。

「おねえさんねえ。みんなそう思っているのかしら？」

「「思う、思う」」

二人の言葉に疑問を持つミーナ。

問われたユリアとハルトマンは全肯定する。

「そういうことにしましょうか」

微笑を讀えるミーナ。

その笑顔は心なしに嬉しそうである。

「しょうしょう、ミーナはびひんなんだからわりやっているほうが
ひいよ」

いまのエイト。

何を言っても効力がない。

「悪いことは言わないから黙っててちょうだい」

褒めたはずのミーナには忠告される始末。
まさに立つ瀬なし。

「りょうかい」

エイトはおとなしくすることにした。
賢明な判断である。

「ミーナ、ミーナ」

「何、フラウ？」

「実はユリアは……」

「な、何よ」

ハルトマンの思わせ振りの態度に身構えるユリア。

「ユリアはカエルが苦手らしいよ」

「あら、そうなの？」

「ちよっ、フラウ！　どこでその話を聞いたの！！」

「ウーシュから手紙で」

「ウルスラちゃん……覚えときなさい！」

エイトを置いてはじまる世間話。

女性が三人そろって姦しいとはこのことである。

だが、エイトは部屋の主である以上、客人を置いてどこかへ行くこともできない。

「……………っ！　いたい」

エイトにできることは、カップに残るコーヒーをすすり続けることだけだった。

＊

「それじゃあね、お休みなさい兄さん、ミーナ」

「また明日ね」

「待ちなさい、二人とも!!」

制止をするミーナ。

だが、フラウとユリアは一目散に駆け出して行った。
僕の私物であるワインをかつさらって。

あのワイン高かったんだぞ。

「なんで、あの子たちは片づけをしないのかしら」

残されたのは四つのコーヒーカップと八枚の小皿。

ちなみに逃げたのはミーナのせいだと思うぞ。

墓穴を掘りそうなので蒸し返しはしないが。

「ぼやいても仕方ないよ。さあ、片づけ、片づけ」

手早く小皿を重ねていく。

ちなみにやつとしゃべれるようになってきたのだ。

舌を火傷した時には熱いものを飲まないようにしよう。

「そうね」

ミーナも納得したようである。

さすがはミーナ。

無いものねだりをして、意味がないことをよく分かっていらっ
しゃる。

「何か言いたそうね」

勘ぐりを入れてくるミーナ。

最近のウィッチは読心術でも身に着けているのか？

「ミーナがいてくれて助かるなって」

「本当かしら？」

「何で疑うんだよ？」

「何ででしょうね？」

質問を質問で返すのはご法度だが、勘ぐりを入れてくるミーナも悪いと思う。

もう少し人を信用したらどうだ？
僕が言えることじゃないけど。

「まあ、ミーナの言いたいことも分からないでもないよ」

「あやしいわね？」

「だから、何で疑う？」

「日頃の貴方の行いが悪いからじゃないかしら」

「ぼ、僕は何も悪いことはしてない！」

そのはずだ。

過去においても問題行動は……………。

心当たりがちらほら。

ふっ、若気の至りというやつかな。

「心当たりがあるようね」

「うっ！」

僕は言葉に詰まる。

立派な心当たりを発見しているからだ。

「で、わたしがいてくれて助かるというのは本当なの？」

「嘘じゃないよ。部隊設営から物資の補給に戦闘指揮、それにウイ^{かの}ツチたちの面倒まで。とてもじゃないが真似できそうにないよ」

挙げだせば切がないだろう。

それを彼女一人でやっていそうだ。

なにせ、事務嫌いの坂本さんと不器用なトゥルーデが副官だもんな。

尊敬してしまう。

「あら、あなたが言っても説得力がないわよ。200の隊長さん」

「やってることの規模が違うだろう」

僕が率いるのは少数先鋭の部隊。

部下と言っても数十人しかない。

元々作られた目的が違うからね。

501は最前線で人々をネウロイから守る一種の壁として基地を任されている。

対して、200は前線の戦力を一時的に底上げし、一つの作戦行動を成功を導くことを主な任務としている。

副次的な任務として戦闘教導や試作ストライカーの運用も行って

いる。

僕の隊がこんな目的を持つことになったのは、その成り立ちが大きく関係しているのだ。

設立は連合軍から僕個人に対して出向要請があったことから始まる。

これには各国の思惑が絡んでいたのだろうけど。
主に魔法技術とか、ストライカーの技術とか。

カールスラントのみが発展していくのが気に食わない等々。

連合軍からの出向要請により、僕は双方の上層部と協議することとなる。

カールスラント側は僕を外に出したくなく、連合軍側は何とか技術を手に入れたい。

僕はそろそろ戦線に戻りたいし、研究も継続していききたいと思っていた。

三者三様の思惑を交えた協議は僕の思惑通りことを進めることに成功する。

かなり昔から進めていた根回しと僕が切り札を切ったことで協議は無事閉幕することとなった。

そして協議も終わり、皇帝陛下のお言葉も頂いたことで、カールスラント内に新たな独立部隊を設立することとなる。

これがカールスラント空軍第200独立戦闘飛行隊の設立の概要である。

連合軍とはギブ&テイクの関係となり、作戦行動の参入と技術提供をする代わりに、各国での補給を受けることはでき、戦闘許可や飛行許可などが下りることとなった。

故に部隊の土台と補給に関しては問題ない。

といっても、最初の頃は立ち寄った基地での戦闘行動に協力し、補給を受けているだけなので、ジリ貧状態に陥ることがあった。

あの時のユリアは怖かったのをいまでも記憶している。

『この馬鹿アハト!!　な・ん・で!!　補給の申請しとかなかったのよ!!!!!!』

などと、会うたびに固有魔法をぶっ放してきたのだ。

空腹は人を変える。

これは間違えない。

『お兄ちゃんはユリアがこんな子に育って悲しいよ』

さらに、冗談を言った暁には。

『消えて』

感情の籠っていない目で突き放されてしまった。

そして、特大の火球を落とされたうえに一週間、口をきいてもらえなかったのだ。

いま、考えれば当然の仕打ちだったのかもしれない。

いい訳をするようだが、あの時の僕は基地に行けば補給を受けれると考えていたのだ。

それが一応、連合軍に所属する国同士と交わした協定の内容だったから。

北の地の補給が冬季に滞るとも知らずに。

なんと無知だったことか。

後悔先に立たずである。

その一軒以来、200でも独自の補給ルートを確認するようになったのだ。

ミーナならこんな失態をしないだろう。
改めて、ミーナのことを尊敬してしまう。

「どうしたの？ そんな目をして」

僕は至って普通。

ミーナのことを傾倒の眼差しで見ただけだけど。

「ちょっと失礼するわね」

顔を近づけてくるミーナ。

君はいったい何を考えて――――。
ぴたっ。

「熱はないようね」

「……………」

額をくっつけてきました。

熱を測りたいのは分かりますが……。

その方が効率がいいのも分かりますが……。

ミーナさん。

君がやっていることは今夜の夕食の席でユリアがやったことなんだ変わないんだよ。

どうか理解してほしい。

「黙っているのは分からないわよ」

お互いの名誉のために黙秘権を行使します。

「具合が悪いみたいね。医務室に連れて行きましょうか？」

「いや、止めとく」

僕はミーナの申し出に断りを入れる。

さすがに、この短時間で二回の医務室送りはないだろう。
アレツシアさんに奇異の目で見られるのは明白だ。

「そう……体調が悪いようならちゃんというのよ」

ミーナは腑に落ちなさそうな顔をする。

やっぱり、この人の気質はあれだ。

お姉さんって柄ではない。

お母さんだ。

間違えない。

「ア・ハ・ト？」

「なんでもない、なんでもないよ……アハハハハ」

僕は笑ってごまかそうと試みる。

迂闊だった。

ミーナには読心術が備わっていたことを忘れていた。

「少し、お話を伺いましょうか」

南無三っ！

その笑みでネウロイを屠れると噂のあるブラックスマイルを浮かべたミーナ。

チェックメイト。

完全に詰みである。

「ジュネーブ条約に基づく捕虜の扱いを求めます」

僕は覚悟を決めるしかなかったのだった。

星夜のお茶会（後書き）

エイト「なあ、作者」

作者「いきなりなんでしょう」

エイト「前書きで初めて君が出てなかったよね」

作者「こういうのもありかと」

エイト「そうか」

作者「では報告に……」

エイト「その前にもう一つ」

作者「なんででしょう」

エイト「最近、物語がねんまり化してないか？」

作者「それは感じていました」

エイト「そろそろ進展させようという気は？」

作者「ありますね」

エイト「それならよかった。もし、無いとか言うところ場で切り捨てようかと」

作者「どこの暴君ですか!!」

エイト「まあ、何もなかったんだ。良しでしょうか」

作者「それ、あなたが言うセリフですか!？」

エイト「そうだが」

作者「もういいです。報告に移らせてもらいます」

エイト「……」

作者「『魔術師の戦律』のPVアクセスが遂に50,000を超え
そうです!」

エイト「超えてから言ったらどうだ？」

作者「前は超え過ぎてしまったので……」

エイト「そうだったな」

作者「つきましては次回50,000アクセス記念雑d……」

エイト「チエストオオオオ!!!!」

作者「あべしっ」

エイト「物語を進めるといったのは嘘か？」

作者「いいえっ!! (刃物を突きつけないでください!!)」

エイト「では、次回は物語を進めるのだな」

作者「記念雑談を書きたいかと……」

エイト「どの口でしゃべるか」

作者「読者の皆様にお礼の意味も込めて書きたいのですけれど」

エイト「むゝ、そうか」

作者「では次回は――――」

エイト「両方だ」

作者「はい？」

エイト「両方書け」

作者「無理です!!」

エイト「書け!」

作者「S i r, y e s s i r」

エイト「では、次週は二話投稿ということで期待してもらいたい」

作者（とんだ無茶振りです……トホホ）

エイト「S e a y o u t o m m o r o w」

作者「無理です!!」

PV50, 000アクセス記念雑談（前書き）

『人には成せることと成せぬことがある』

エイト 「更新が一日遅れてるぞ」

作者 「だから無理ですってば!!」

PV50, 000アクセス記念雑談

〃〃エイト少佐に質問コーナー〃〃

エイト「なになな？　これは」

作者「『魔術師の戦律』PV50, 000アクセスを記念して作った新コーナーです!!」

エーリカ「司会者のエーリカ・ハルトマンと」

ユリア「ユリア・ティアムです」

ミーナ「後でお話を伺いますよ、作者さん」

作者「どうか堪忍を」

エイト「ご愁傷様」

作者「人で無し」

ユリア「この人たちはほっというて」

エーリカ「第一回・エイト少佐に質問コーナーのスタートだよ」

＊

ミーナ「では、私から質問ね」

ユリア「どうぞ、ミーナ」

ミーナ「司会者のあなたたちに質問よ」

ユリア「何？ ミーナ？」

ミーナ「突然、こんなコーナーを設けて質問があるのかしら？」

エーリカ「ないよ」

ユリア「だから私たちが質問していくのよ」

エーリカ「ビシビシ行くから覚悟してね、アハト！」

エイト「答えられる範囲で頼むよ」

＊

ユリア「兄さんはこのコーナーをどこでやるつもりなの？」

エイト「それを僕に聞くのか？」

エーリカ「だって、アハトに質問コーナーだよ」

エイト「分からないよ。作者、頼む」

作者「質問が来た次第、後書きでやっていくつもりです」

ミーナ「じゃあ、質問待ちというところね」

エイト「そうなるね」

ユリア「随時、質問募集してます」

エーリカ「よろしくね」

＊

作者「マルセイユ大尉との模擬戦の結果について質問です」

エイト「君まで質問をするのか！」

エーリカ「アハトも物好きだな。あのハンナと模擬戦をするなんてさ」

エイト「ティナに挑まれるんだからしょうがない」

ユリア「そうよ。仕事があれば魔力が途切るまでやるのよ、この人！」

エイト「あれは徹夜明けだったから仕方がない」

ミーナ「あらあら。それは感心しないわね」

エイト「ミーナ、僕が悪いわけじゃ……」

ユリア「ネウロイの襲撃があった時に出撃ができなかったのは誰ですかね？」

エイト「それは……」

エーリカ「アハトもまだまだ子どもだな」

ミーナ「子どもって問題じゃないわよ」

作者「まあまあ、過ぎたことじゃないですか」

エイト「作者……!」

作者「それで模擬戦の結果はどういうことですか」

ユリア「それ、私も思っていたのよ」

エーリカ「あの負けず嫌いのハンナに勝ち越しているよな」

エイト「勝ち星だけ見ればね」

ユリア「それでも勝ちだよね」

エイト「一応ね」

作者「どうやって戦っていたんですか？」

エイト「昔はティナの癖を使ってからかな」

ユリア「癖？」

エイト「ああ、固有魔法と勘を頼りに戦うところがあったあらね」

ミーナ「空戦において勘は必要なはずよ」

エイト「勘だけではどうにもならないことがあるということだよ」

ユリア「どういうこと？」

エイト「戦いの組み立て方。相手の機体の性能、武器、戦闘スタイルを把握したうえで、自分がいかに一撃を決める状況を作るか、考え、経験をもとに実行していくことかな」

ミーナ「それは誰でもやっていることじゃないかしら？」

エイト「これだけじゃないよ。対人戦闘においては相手の感情や思考を生かした戦いも必要となる」

作者「何かすごいことを言い出しましてね」

エイト「被弾を恐れれば必ず回避行動をとってしまう、急な回避行動をとれば自信の持つ総エネルギーを失うことになりかねない、総エネルギーを失えば機動も制限されてくる、そうなれば高度を落として下手に出ざる負えない等々利用できるものはいくらでもある」

エーリカ「それは航空学校でも習うことだよ」

エイト「そうなのか……！？」

ユリア「兄さん！ そんなことも知らなかったの！？」

ミーナ「アハトは陸の出だったわね」

エイト「僕は実戦から学んだのに……」

作者「エイトさん、元気出してください!!」

エーリカ「結局、アハトは基本に忠実に戦っていたということではないのか？」

ユリア「定石を知らずして、定石を破ることはできないって言うし、いいと思うわよ」

ミーナ「そうね。でも、アハトの目を見張るところはちゃんとあるわよ」

エイト「例えばでいいので挙げてくれないか」

ミーナ「銃撃の精度ね」

ユリア「兄さんは元から射撃がうまかったですよね」

エイト「周りからはそういわれていたね。まあ、他人より上手かったのは大王にみっちり教えてもらったからなんだけどね」

ミーナ「だ、大王？」

ユリア「兄さん! そんな言い方したら分かんないでしょう!!」

エーリカ「大王さんって、アハトたちのお義父さんだよね」

エイト「そうだよ、よく覚えてたね。アレクサンダー・ハウゼンさん、僕たちが養ってもらっていた孤児院の経営者さんだよ」

ユリア「フラウの言う通り、私たちのお義父さんよ」

作者「アレクサンダー……つまり、アレクサンダー大王に由来して大王ですか」

ユリア「本人の前で言ったらお尻百叩きの刑に処せられるけどね」

エーリカ「うわゝ、痛そう」

エイト「痛いってもんじゃないぞ。本気で叩いてくるからね」

ユリア「兄さんは何やらかしたんですか!？」

エイト「それは国家機密だね」

ユリア「……（じいゝ）」

ミーナ「ともあれ、アハトはハウゼンさんに銃の使い方を教えてもらったのよね」

エーリカ「あれ？ ユリアは教えてもらわなかったのか？」

ユリア「私はお義父さんに反対されてね」

エイト「ユリアがウィッチになるのも大変だったよね」

ユリア「そうですよ。兄さんの時はあんなにあっさり承諾していたのに」

エイト「ちょうど、僕が撃墜されて入院していたからね」

ミーナ&エーリカ「……………（あの時の…………）」

作者「（二人ともすごいばつの悪そうな顔をしています）」

ユリア「みんな心配したんですからね！」

エイト「墜ちるものは墜ちるんだから、しょうがないと思うんだが……………」

ユリア「反省の色な———」

エーリカ「アハトをあまり怒らないであげて」

ミーナ「私からもお願いするわ」

ユリア「ミーナもフラウもどうしたの？」

エーリカ「あの時、アハトが怪我をしたのは私の———」

エイト「フラウ。あれは僕の独断専行だよ。君たちが気にすることじゃないよ」

エーリカ「で、でも…………」

エイト「どうしたんだい？　いつものフラウらしくないじゃないか」

エーリカ「アハトは卑怯だよ。いっつも、笑って済まそうとして……………」

エイト「（よしよし）」

エーリカ「そうやって子ども扱いする！」

エイト「ははは」

エーリカ「ぶう」

作者「そろそろ話を戻しましょうよ」

ユリア「兄さんがどうやってティナに勝っているかだったよね」

エイト「最近じゃ、勝利もおぼつかないけどね」

作者「アフリカを発つときに対戦成績が14勝13敗23分けと自慢していたじゃないですか？」

ミーナ「あら、それは本当なの？」

エイト「まあ、一応ね」

エーリカ「うげ」。あのハンナに本当に勝ち越してるよ」

エイト「勝ちも勝ちだが後味の悪い勝負だったけどね」

ユリア「私が見てる分だとそんなことなかったけど？」

エイト「機体性能はこちらが格段に上だったんだ」

ユリア「兄さんが使っていたのは試作機だったわね」

エイト「それに、ティナは余裕があって、対する僕には余裕がなく
て……勝ったのも偶然といった感じだったからね」

ミーナ「偶然も重なれば怖いものね」

作者「そうですね………」

＊

ミーナ「次は私から質問よ」

エイト「また、ミーナか……」

ミーナ「そう言わないの」

エイト「それで質問は何かな」

ミーナ「アハトの作っているストライカーのことよ」

エイト「配備を検討しているのか？」

ミーナ「その前に……安全性は大丈夫なの？」

エイト「03と05はひとまず完成を見ているから問題ないね」

ユリア「私も使っているからね」

エーリカ「もう一機あったよな」

ユリア「OEG-06のことね」

ミーナ「06の安全はどうなの？」

エイト「残念ながら……」

エーリカ「そんな危険なものを使っちゃダメだよ」

ミーナ「隊長としても黙認しかねるわね」

エイト「試作機に危険はつきものなんだけど」

ユリア「トゥルーデもよく試作機のテストをしてるけど？」

ミーナ「私達としてはできればやってほしくないんだけど……」

エーリカ「本人が聞かないからな」

エイト「じゃあ僕も」

エーリカ「アハトは聞いてくれるよね（ニコニコ）」

エイト「えーと……」

ユリア「フラウ、心配なのはわかるけど、ストライカーの研究開発が兄さんの仕事よ」

エーリカ「そうだけどな」

ミーナ「私たちは怪我をしない程度にやって貰いたのよ」

エイト「大丈夫だよ。そこについては問題ないよ」

ユリア「兄さんは体の丈夫さが取り柄だもんね」

エイト「ここは技術が優れてるとか言うところじゃないのか？」

エーリカ「体が丈夫って言われるほうがアハトラしいな」

ミーナ「そうね」

エイト「はあ」

＊

作者「このような形で質問コーナーを設けようと思います」

エイト「このコーナーで僕の秘密が暴露されるのか？」

ユリア「そうなるかもね」

エイト「そうか……」

作者「エイトさん目が怖いです!!」

エイト「そうなる前に……」

エーリカ「あゝ、やばいかも」

エイト「元凶を始末する」

作者「お、落ち着いてください!!（ナイフを取り出さないでください!!）」

ユリア「そうよ、落ち着いて兄さん!!」

エイト「離せユリア! 俺はこいつを———」

ミーナ「騒がないでほしいわ……」

エイト「ミーナ!? しかし!!」

エーリカ「えいっ!（こちよこちよこちよ）」

エイト「フラウ、ちょっと待って———」

エーリカ「こちよこちよこちよこちよこちよこちよ」

ユリア「フラウその調子よ!」

エイト「わ、分かった。おちつくから……」

エーリカ「本当か?」

エイト「ほんと、ほんと」

エーリカ「ナイフ没収ね」

エイト「ああ（何で、俺がこんな目に）」

作者「助かりました」

ミーナ「よかったわ。作者さんには怪我をされては困るもの」

作者「心配ありがとうございます」

ミーナ「後からお話を伺わないといけませんからね」

作者「へ!？」

＊

ユリア「多少ごたごたがありました」

エーリカ「無事にPV50,000アクセス突破!!」

エイト「『魔術師の戦律』を読んでもらって」

一同「」「」「ありがとうございます」「」「」

作者「駄文しか書けないような作者で申し訳ありませんが」

ミーナ「これからもよろしくお願いしますね」

PV50, 000アクセス記念雑談（後書き）

魔術師の戦律をごひいきにして頂いてありがとうございます。

さて、作者の独白の始まりです。

前回の後書きで記した通り、物語のねんまり化が否めません。

何故でしょうか？

話の密度が高いこれが原因でしょうか？

実は本編では、まだ一日目なんですよね（汗）

エイト少佐の着任初日が過ぎれば少しは改善？　と思ったのですが、いままでの感じで書いていくと変わらないように感じます。

そこで皆さんに相談です。

いままでのままでいいか？　変えたほうがいいのか？

エイト少佐への質問と一緒にこの課題への意見も募集します。

コメント待ってます！！

整備士長 アルトリート・エックハルト（前書き）

作者「何とか日曜日に更新！」

エイト「一応だね」

作者「今回は新たなオリジナルキャラが登場します」

エイト「アルトリート・エックハルトさんだね」

作者「その名をどこで！？」

エイト「タイトルからね」

作者「確かに丸分かりですね」

ユリア「早くしないと日にち跨いじゃうよ」

エーリカ「早く、早く」

エイト「フラウにユリア！ 何でここに！！」

ユリア「細かいことは気にしないの！！」

作者「いつものをお願いしますね、ハルトマン中尉」

エーリカ「了解だよ」

「『魔術師の戦律』 第13話 「整備士長 アルトリート・エッ

クハルト」に」

「シュトルム・アングリフ!!」

整備士長 アルトリート・エックハルト

「全く、ミーナもあそこまで怒る必要ないよな」

僕はぼやきをこぼしながら歩く。

きっかり一時間後、ミーナのお話（お説教）から解放された。
我々の隊長殿は思考の自由すら奪うのだ。
理不尽である。

「さてと……」

気持ちを切り替え、前を向く。

僕がいま向かっているのは、武器や弾薬の置かれているハンガー。

「あの子たちは元気かな？」

そこに目的のものが置いたある。

「どこにあるのかな？」

消灯された薄暗いハンガーに辿り着く。

目的のものを探すべく僕は視線を巡らす。

視線を巡らしているとライトの明かりがちらほら見えてきた。

いくら経費削減のためとはいえ、この環境で作業させるなよミーナ。

「少しお時間宜しいでしょうか？」

ライトが照らしている場所。

ストライカーの整備をしている男性に話しかけた。

「誰だ？　こんな時間に」

顔を覗かせるのは強面の男性。

金髪碧眼の容姿が欧米人であることを知らせる。

「なんだ、新入りか？　まだ時間には早いぞ」

手持ちのライトで僕の姿を照らす男性。

そのうえで新入り扱いしてくる。

今日着任したばかりだから新入りで間違えはないけど。

取り敢えず、眩しいから止めてくれないか。

僕は目を軽く手で覆って、ライトを下げるようにアピールする。

「まあ、いい。折角来たんだ、手伝っていけ」

男性は足元に置いたある道具箱を指し示す。

その態度に僕は苦笑を隠せない。

「俺が何かおかしいことを言ったか？」

訝しむ男性。

それもそうだろう。

僕の着ている服は作業服である。

加えて、向こうはただの新入りだと思っているので正体に気付くはずもない。

「いえ。整備の方を手伝わせて頂きますよ」

面白そうだからこのまま突き通そう。

僕は手持ちの荷物を近くの手すりに掛けた。

「ん？ お前さんはあの部隊の人間か？」

僕が掛けた荷物。

200の上着とコートを見て、彼は僕に問いかける。

「ええ。200のしがない整備士ですよ」

間違ったことは言っていない。

多少、説明不足な点はあるが。

ユリアとか、トゥルーデが聞いたら詭弁だ、と怒られそうないい訳だな。

「そう謙遜するな。200はかなりのエリート部隊で有名だぞ」

「魔術師と魔女の隊長たちが有名ですから」

正体を隠すためとはいえ、自画自賛しているのでなんとも面映い気持ちになっていく。

「そうか。だが、謙遜はほどにだぞ」

彼の言いたいことは分かる。

「良きウィッチあるところに良き兵あり、でしたか？」

「その通りだ。お前さんもちゃんと分かっているじゃないか」

ばしばしと強く肩を叩いてくる男性。
気さくな性格はいいが肩が痛い。
止めてくれ。

「そうすると、お前さんに手伝ってもらうわけにはいかないな」

一転、200の制服を見て難しい顔をする男性。

こちらの仕事話増やすわけにはいかない、とでも思ったのだろうか？

501に居座る以上、気にしなくてもいいのに。

「折角なので、手伝いますよ」

「なら、ご厚意に甘えるとして……」

僕の言葉を聞いてはにかむ男性。

意図的に言わせたのであれば彼はなかなかの策士である。

「お前さんはあっちのストライカーの最終点検を手伝ってもらって
いいか？」

整備を任されたのはBf109。

型式はおそらくKかG。

統合戦闘航空団ということで最新鋭の機体であることも捨てがたい。
い。

「構いませんよ」

承諾の言葉を口にする僕。

個人的にはそのM i Gが気になっている。
あれはオラーシャの新型かな？

「そんじゃ頼むわ」

B f 1 0 9を僕に任せて、M i Gの点検に戻る男性。
妙な風の吹き回しで僕はストライカーの整備を手伝うことになったのだった。

＊

「いつもより早く終わってしまったな」

十分後。

スムーズに点検を終えた僕に男性が語りかけてくる。
その声は心なしに嬉しそうだ。

「お役にたてて何よりです」

僕の態度に男性はあきらめたような顔をする。

「そういや、自己紹介がまだだったな」

強面の顔を破顔させる男性。

「アルトリート・エックハルト。カールスラントの少尉で、ここの整備士長を任されている」

彼の……エックハルトさんの自己紹介を聞いて僕は大切なことに気付く。

「どうしたそんな驚いた顔をして？」

「ミ……ヴォルケ中佐が整備士長に男性の方を据えているのが不思議で」

あの異性交遊がどうかこうとか、厳しいミーナが彼に整備を一任しているのだ。

驚いても仕方ない。

逆に女性の整備士も珍しくはあるけれど……。

「ヴォルケ隊長は若干肩がこり過ぎているところがあるよな」

若干ではなく、かなりだと思っただが……。

僕の持論はこの際、良い訳で。

「ヴォルケ中佐とはお知り合いで？」

彼とミーナの関係。

一応、聞いておくべきだろう。
気になるからね。

「ブリタニアでな」

ブリタニアというと――――。

「前の501ですか？」

「その少し前からな」

うん、もう少し前になると僕がノエルに渡航していた頃か。
ダイナモ作戦の後、向こうに行ったから彼のことは知らなくても
無理はない。

「少し前というと、ヴォルケ中佐が新部隊設立の為に奔走していた
頃ですか？」

「ああ。ちょうど、お眼鏡にかかったらしくてな。行くところもな
かったから501に身を寄せたわけだ」

それは聞いた僕は苦々しい思いでいっぱいになる。

ブリタニアにはカールスラント及びガリアやオストマルクの兵が
溢れんばかりにいた。

彼もその一人だったのだろう。

「それにしても、詳しいなお前さん」

「え、あの……副隊長に聞きましたから」

見事に墓穴を掘ってしまった。

咄嗟に僕は副隊長の名前を出す。

ごめん、ユリア。

「副隊長って言うとかの別嬪さんか？」

「美人ですよ、うちの副隊長は」

ユリアは何かと言って人気がある方だ。

肩口まで伸びた艶やかな銀髪。

女性として申し分のない容姿をしている彼女。
街を歩けば、すれ違った男が一度は振り向くことだろう。

それに加え、気さくで男女問わずに話しかけ、周りに気配りもできると性格もいい方だ。

考えてみればユリアに人気が出ない要素がないな。

しかしながら、兄としてはもう少しお淑やかであればと思っている。

あまり高望みするのは贅沢かな。

「でも、気を付けろよ。ここの決まりは知っているだろう?」

「ウィッチとの異性交遊禁止令でしたか」

ミーナも徹底しているよね。

その信念の根源にある事柄を知っている僕としては、かなり言いづらいことなだけど……。

「それは自分たちにも適応されるのですかね?」

素朴な疑問。

200は一つの独立した部隊である。

故に他の部隊規則の拘束を受けることはない。

「さて、どうだか? 隊長さんにでも聞いてみるといいんじゃないか?」

エックハルトさんは肩を竦めた。

この隊長とはどちらだろうか?

僕か、はたまたミーナか。
聞くだけ無駄なような気もするが。

「そうしますね」

無難な返事を返しておく。
さて、どうしたものか？

基本的には立ち寄った基地の規則には従っている。
まさに郷に入らずんば、郷に従え、という扶桑のことわざの如く。

とはいえ、ミーナの作った規則はやり過ぎ感も否めない。
先程挙げた、良いウィッチあるところに良い兵あり、という言葉の意味。

なにもウィッチが一人でネウロイと戦えているわけではないという
ことだ。

ウィッチが不自由なく行動できるのは、様々な人達の尽力があつ
てこそだ。

これは紛れもない事実である。
ウィッチの華やかに埋もれてしまうことが多いが。

そんな彼らと必要以上の会話を禁止するのは、どうかと僕個人で
は思っている。

名も知らない、顔を見たこともない人に感謝の気持ちを抱くのは
容易なことではない。

故に交流を深め、仲間意識を持つことでお互いの励みになるので
はないかと考えているのだ。

だからと言って、ミーナの考えも否定することはできない。
彼女達を大切に想っていることは痛いぐらいに理解できる。

僕もユリアが悪い男に捕まることを考えれば、むしろ賛成したいぐらいだ。

ここ、かの有名なロマーニャだし。

そうかと言って、ミーナの作った規則を肯定するわけにはいいかな。

だからと言って……………。

僕の思考は出口ない海を漂っていく。

「ん」

「どうした、そんな難しい顔をして？」

心配をしてくれるエックハルトさん。

なかなかストイックな問題を考えていたのでこの人の存在を忘れていた。

「なんでもないですよ」

身分を隠している以上、いま考えていたことを口にする訳にはいかない。

「何か悩み事があったら相談してくれよ。お前さん……そういや、名前を聞いてなかったな」

これは失礼。

まだ、名乗ってませんでしたね。

「申し遅れました。200で整備士をやらして頂いているエイト・グライナーと言います」

僕はエックハルトさんに握手を求めるのだった。

＊

「エイト・グライナー、だあ？」

僕の自己紹介を聞いたエックハルトさんは眉にしわを寄せる。

やばい、正体がばれたか！？

だが、ウィッチたちは僕のことあんまり知ってなさそうだったし、それはないか。

「眼鏡を外してくれないか？」

言われた通り眼鏡を外す僕。

「お前さん、人が悪いな」

睨み付けてくるエックハルトさん。

もしかして、正体がばれたのか？

なぜ眼鏡で？

「どうして気づいたんですか？」

思い浮かんだ疑問を込めて、僕は問いかける。

「お前さんは色々有名だからな」

「具体的に教えてもらいたいですね」

僕が一芝居打っていたのには三つ理由がある。

一つは僕や200の評価について。

誰でも自分の持っている部隊のことは気になるものだ。

その為にただの整備士を装うつもりだったのだが……。

来て早々、200の隊員とばれ、さらには隊長ということがばれた。

故にいま真正面から聞いている。

「まあ、色々だ」

思った通りはぐらかされた。

その本人に直接、噂話を確かめるような人はなかなかいないだろう。

ましては上官となれば話づらいのは明白だ。

「グライナーさんは少佐でしたか。敬語を使った方が宜しいでしょうか？」

僕の思考を読んだかのような質問を投げかけてくるエックハルトさん。

口調とは裏腹に態度は変わらず。

僕として口調も変える必要はないのだけど。

「いえ、構いませんよ。僕の階位なんて飾りのようなものですから」

「了解だ」

元の口調に戻るエックハルトさん。
こちらの方が彼らしく思える。

「それともう一度言うが、謙遜もほどほどにしろよ」

少佐である僕の階位が飾りであるのならば、下の者は立つ瀬がないということか。

難しいな。

それでも僕は――。

「謙遜している気はありませんけどね」

本当のことを口にする。

「嫌味にしか聞こえねえな」

「うっ！」

痛いところをついてくる。

確かに嫌味にしか聞こえないかもしれない。

「まあ、変な奴だとは分かった」

「はっきりと言ってくれますね」

ここにきても変人扱いか。

僕は思わず肩を落とす。

「これでおあいこだ」

芝居を打っていた僕への意趣返しか。
やってくれる。

「これからよろしくな、グライナー少佐」

「僕のことはエイトでいいですよ、エックハルトさん」

僕たちは固い握手を交わす。

「なら、俺のこともアルトと呼んでくれ」

「分かりました。こちらこそよろしくお願いしますよ、アルトさん」

「ああ」

長い付き合いになりそうだという予感を胸に。

整備士長 アルトリート・エックハルト（後書き）

作者「あっ!!」

エイト「どうした作者？」

作者「日にち跨ぎました」

エイト「しょうがない奴だな」

作者「面目ない」

エイト「まあ、更新は日曜か月曜としているわけだから問題ないね」

作者「そうだといいですね」

エイト「それでは、アルトさんの登場だね」

作者「どうぞ」

アルト「新キャラのアルトリート・エックハルト少尉だ。歳は28、国籍はカールスラントにある」

エイト「歳と整備士の割に下士官ですよ、アルトさん？」

アルト「お前さんが言うのと嫌味にしか聞こえないな」

エイト「本編に続きそのセリフか……」

作者「なんかエイトさんに対する決め台詞っぽいですよね」

エイト「僕は変人で嫌味な奴か……」

作者「（エイトさんが心に傷を負いました）」

アルト「ところで、作者。お前さんに質問がある」

作者「なんででしょうか？」

アルト「俺の登場が何故、13話なんだ？ 何かの嫌味か？」

作者「いえ、そんなつもりは（顔が怖いです）」

エイト「死亡フラグ……かな」

アルト「……何？」

作者「偶々です！ 偶々!!！」

エイト「偶々で縁起の悪い数字で新キャラ出すなよ」

作者「先週、思いついたばかりのキャラですから……」

アルト「少し考えろや！」

作者「モブキャラなので……」

アルト「出番がないのか……俺……」

エイト「考えて物を言え、作者！ アルトさんが可哀想だろ！！」

作者「大丈夫です。ちよくちよく出しますから」

エイト「有言実行だぞ」

作者「了解です」

アルト「頼むぞ、作者！」

作者「お二人とも必死すぎます！！」

エイト「当たり前だろ、親友のためだ！」

アルト「エイト……お前さん………！！」

作者「（エイトさんが何故か、熱いキャラになってます（汗））」

エイト「明日と！」

アルト「友と！」

エイト&アルト「「祖国の為に！！」」

作者「それではこの辺で」

夜のエスコート（前書き）

作者「更新いっきまゝす!!」

エイト「待て!!」

作者「ぐべしっ!」

エイト「何なんだこのタイトルは!?!」

作者「今回の内容に合うかな、と」

エイト「ふざけるな!」

作者「ぐはっ!!」

エイト「全く、邪な勘違いをされたらどうするつもりだ?」

作者「ぼろりよくはんたゝい」

エイト「【?】 天より注ぎし礫の如く、我に仇なす者を穿ち蒼を刻め」

作者「ちよっ、じょうだn————」

エイト「消えろ」

作者「ぎゃああああ——」

エイト「終わったか」

作者「……………」

エイト「騒がしてしまつてすいません。それでは」

「『魔術師の戦律』 第14話 コホンッ「夜のエスコート」」

「はじまります」

夜のエスコート

「で、この子たちを診るのを手伝って貰いたいのですよ」

アルトさんと仲良くなったついでに、僕はストライカーの点検を共にすることにした。

この子たちとは言わずともわかるだろうが、自作のストライカーである。

自作って言うとき少し子どもっぽいかな？

独自開発と言った方がいいのか……。

「ほう。こいつが……」

感嘆の声を漏らす彼。

アルトさんは僕が開発したストライカーを前に目を輝かせる。

「分解ばいしていいか？」

「ダメです！」

何故だ。

何故、整備士君たちや研究者やシャーリーは見た瞬間、分解を始めようとする。

これが技術者の性か！

斯く言う僕も新型のストライカーを見れば、構造や性能を知りたくなるのだけども。

「見てみてダメなようならオーバーホールしますから」

「マジか!!」

アルトさんがオーバーホールに食い付いてきた。
先程まで大らかな対応をしていた彼はどこに行った。
やはり、この人を信用したのが間違えだったか。
時既に遅し。

「後日ですけど……」

「ダメだ! 今分解せ!! 今すぐだ!!」

「コホンッ。取り敢えず落ち着きましょうか、エックハルト少尉?」

この手の対応は慣れている。

慣れたくはなかったが。

あまり使いたくない手ではあるが、ここは軍隊。

僕に不相応なこの階級を十分に発揮できるときである。

ハッと我に返るアルトさん。

彼は気づいたようだ。

僕が言わんとしている意味に。

「くっ、申し訳ありませんでした、グライナー少佐」

流石、カールスラント仕込みの敬礼。

惚れ惚れするほど整っている。

顔をには不服の文字と言葉には皮肉が込められてはいるが。

「構えを解いて、宜しい。元々、咎めるつもりはないからな」

緊張を解くアルトさん。

いや、そんな睨まなくてもいいじゃないか。

「やはり、お前さんは人が悪いな」

「誤解ですよ。それに、今回のことに関してはアルトさんが話を聞かないのがいけないんですよ」

僕は決して間違った行動をとってないはずだ。

「まあ、察してくれいや」

肩を竦めるアルトさん。

反省の色なし。

落ち着いただけでも良しとしよう。

「なんで、今日オーバーホールしないんだ？ 早いに越したことはないだろうに」

泣く子も黙るような形相で睨み付けてくるアルトさん。

口ではまともなことを言っているが、魂胆見え見えですからね。

「こんなくらい所でオーバーホールなんてできるわけじゃないじゃないですか」

明らかな光源不足。

いま無理にオーバーホールやって、部品を無くす方が怖い。

むしろ、無くすに決まっている。

「ちょい待ってろ」

アルトさんは手持ちのライトを持ってどこかに行ってしまう。
そうになると光源は近くで先程整備したばかりのストライカーを照らすライトと月の明かりぐらいしかなくなる。
空を見上げると星がきれいだ。

「っ！」

眩い閃光。

視界を覆う光。

あまりに強い光に僕の視界はホワイトアウトする。

「どうだ、これで満足か？」

「ライトをつけるなら早く言ってもらいたい」

「わりい、わりい」

数十秒後、僕の視界が戻ると目の前にはアルトさんが立っている。
言葉の割に態度が伴っていない。

「早く整備しようぜ」

「了解です」

うきうきしたアルトさんを止めれるはずもなく、僕は諦めてストライカーの整備に取り掛かるのだった。

「げっ！」

ストライカーのフレームを外して一言。

内部のパーツの多さにアルトさんが漏らした。

だか、これだけで驚いてもらっては困る。

「馬鹿でかいストライカーだとは思ってたが中がこうなっていたとは……」

確かにいま点検を行っているOEG-05は平均的なストライカーに比べると約1、3倍長いのだ。

まあ、ストライカーによって大きさが異なる為、気にするほどでもないが。

「中にエンジン二つって……おい!!」

さっそく気づいたなこの人。

OEG-05には開発当初から二つのエンジンを付けているのだ。

昔はレシプロエンジンとジェットエンジンの二種類。

前者は発進、低速域で安定を得る為。

後者は高高度で出力を上げ、高速戦闘を行うために取り付けられている。

何故、こんな機体になったかというときちんとした理由がある。

僕が作り始めた頃はジェットエンジンというものの自体が机上の空論から脱し始めた頃だった。

当初のジェットストライカーは燃費がすこぶる悪くて、加速性、

特に低速での安定性ときたら無いにも等しい、じゃじゃ馬ぶりであった。

僕が造った、ジェットエンジン装備の04も着陸に失敗して炎上するという事態に陥ったのだ。

あの時は本当に死ぬかと思ったがなんとか無傷で生還できた。

研究者やテストパイロットから奇跡だ、と驚かれたぐらいである。僕もそう思う。

要はOEG-04での失敗を元に低速域でレシプロを代用しようと考えた、ジェットストライカーの成り果て。

05はそういう機体である。

余談になるが今では、燃費が悪いのは相変わらずだが、当初の欠点は改善されたらしい。

この前、本国に寄った時にウーシュが自慢そうに言っていた。純粋なジェットストライカーを諦めた僕としては悔しい限りだ。

「何なんだこのエンジンは！！ 見たことないタイプだぞ！！」

そして、目の前の男はエンジンを軽く見て新型だと判断した。その眼力恐るべし。

やはり、アルトさんは只者ではない。だが。

「興奮しすぎです。落ち着いてください」

力いっぱい僕の体をゆするのはやめてほしい。

いや、是非ともやめてくれ。

そうしないと……………うぷっ……………。

＊

「悪かった」

アルトは只今、上官であるエイトに対して平謝りの最中である。

「次から気を付けてください」

エイトは少し青ざめた顔でアルトに注意する。

いかにエイトが偉大な科学者であろうと屈強な軍人であろうと所詮は人の子である。

栄養を取らないと生きていけないし、空気を吸わないと生きていけないし、そして脳を揺さぶられれば気持ち悪くなったりもする。

「すまん」

もう一度謝罪の言葉を口にするアルト。

テンションが上がっていたとはいえ、あのような行いをした自身を恥じているのだ。

「もういいですよ」

ため息をつくエイト。

彼はそんなに怒ってもないのでここまで謝られると困るのだ。

「早く整備に戻りましょう」

「そうだな」

アルトは整備と聞いた途端に、再び目を輝かせ始めた。

「これは先程見た感じではオーバーホールが必要のようですね」

「なら、さっそく……」

いち早く作業に取り掛かろうとするアルト。

今の彼からはストライカーを分解しようとする執念が見て取れる。

「何をしているのですか、アルトさんは？」

勇み足のアルトに質問を投げかけるエイト。

「何って、分解そうと……」

「一体、誰がいまからオーバーホールをすると言いましたか？」

「しないのか……」

「見るからに落ち込まないでください!!」

エイトの言葉に落胆の色を隠せないアルト。

整備という名の分解をやる気満々だっただけにその落差も大きい。

「それに早くしないと時間になってしまいますから」

「何?」

再び耳にするエイトの言葉をアルトは訝しむ。

「あれ？ 言ってませんでしたっけ？ いまから僕、夜間哨戒に出るんですよ」

「はあ？」

耳を疑うアルト。

それもそのはずだ。

エイトが夜間哨戒に出るとは一言も聞いていないのだ。

「もう一度言ってくれるか？」

「いまから夜間哨戒に出るのでその為にストライカーを整備するんですよ」

何度聞いても同じ言葉が返ってくるのだろう。

すでにエイトが夜間哨戒に出るのは決定事項なのだ。

「ちょっと待て！！」

アルトは慌てて、ハンガーの中に唯一ある掛け時計に目をやる。
夜間哨戒が始まる時間まで――――。

「後三十分しかねいじゃねいか！！！！！！」

大声を上げるアルト。

後たった半刻でオーバーホールの必要かもしれないストライカーを整備仕直さなければいけないのだ。

衝撃の事実に驚きを隠せないでいる。

「こんな夜中遅くに大声を出さないでください！ 迷惑ですよ」

ただ、この現況を作った男は平然としていたのだった。

＊

閑散と静まり返った廊下。

月明かりがほんのりと石畳を照らし出す。

「サーニヤ、寒くないか」

「大丈夫よ、エイラ」

静寂を破る少女たちの声。

片や、独特の趣のある少女の声。

片や、自然と空気に溶け出してしまうような澄んだ少女の声。
奏でる音色からは、温かさを感じられる。

「寒くなったらいつでも言うんだゾ」

「うん」

エイラはサーニヤのことを気遣う。

まだ、4月上旬と夜は冷え込む時期なのだ。

その証拠に月明かりに映し出される少女たちの姿は厚手のコートにと、着込んでいるのがすぐに分かるのであった。

「サーニヤも今日は災難だったナ」

「なにが？」

「あの兄妹のことダヨ」

エイラは内心で毒づいていた。

妹のユリアには散々な目に遭わされ、兄のエイトは何故かサーニヤに好意を抱いていることになっているのだ。

エイラの中では。

「兄妹って………？」

一方でサーニヤは小首をかしげる。

サーニヤはエイトとユリアが兄妹であることを知らないのだ。

「もしかして……エイトさんとユリアさんのこと？」

あの兄妹と言われてサーニヤが疑いをかけたのは、今日付けで501に転属してきた二人の男女。

だが、サーニヤが見てきた感じでは、兄弟というより仲のいいカップルであった。

特に夕食での出来事が印象的であったのだ。

それ故にエイラに問いかける。

「そうダゾ」

サーニヤの言葉を肯定するエイラ。

この時初めて、エイトとユリアが兄妹であることを知ったサーニ

ヤであつた。

「兄妹ってあんな感じなの？」

彼らが兄妹だと知って沸上がる疑問。

兄弟とはあんなにも仲が良いものなのだろうか。
ひとりこのサーニャには分からない。

「どうだろうナ？ 私のところはそうじゃなかったけどナ」

サーニャの言葉にエイラは姉に姿を思い浮かべる。

「エイラ……兄妹がいたの！？」

エイラに兄妹がいたことに驚くサーニャ。

「あれ、言ってなかったカ？」

てっきり言っていたものだと思っていたエイラ。

常にサーニャ、サーニャと言っているのに、いい加減にもほどがある。

「……聞いてない」

サーニャは隠し事をしていたエイラを咎めるが如く、冷たく言い放つ。

「さ、サーニャ！ 違うんだ！！ 別に隠してたわけじゃ————」

「今度、聞かせて？」

エイラが狼狽を見せたことで態度を一変させるサーニャ。
優しく微笑みエイラに問いかける。

対するエイラは手のひらの上で転がされたようで面白くない。

「聞いて面白いことじゃないゾ」

「それでも……」

「分かったヨ」

観念したエイラ。

またの機会に話すようだ。

「ちょっと早かったナ」

「早めがいいと思うわ」

気づけば彼女たちは目的地であるハンガーにいた。

時計を見ると後五分。

いつもより早めに着いたのだ。

エイラがハンガーを見渡すと整備士がちらりほらり。

作業をしてないところを見ると、すでに準備が済んでいるようだ。
った。

（んナ……!?!?）

声にもならない驚きの声を上げるエイラ。

エイラの固有魔法・未来予知。

人より鋭い勘ゆえか、はたまた生存本能ゆえか、その固有魔法が警鐘を鳴らす。

「サーニャー!!」

ハンガー内の視線がすべて向けられるのを承知で声を張り上げる。
エイラはいつでもサーニャを守る位置に着く。
右手は拳銃に手が伸びていた。

「どうしたの、エイラ!？」

「……………」

無言を貫くエイラ。

予知能力で黒衣の男が現れた物陰。
そこを睨み、万一の事態に備えて体勢を崩さない。

「全く、夜遅くに大声を出すなというのに君たちは……………」

ため息交じりに物陰から出てくる黒衣の男。
手には汎用機関銃でもあるMG42が携帯されている。

「まあ、いいや」

黒衣の男は肩を竦める。
そして……………。

「僕と一緒に夜間哨戒に行かないかい？」
デート

と、黒衣の男こと、エイト・グライナーは無邪気に笑いかけるの
だった。

夜のエスコート（後書き）

エイト「今回は後書きの方にサーニャちゃんとエイラが初登場ですよ」

サーニャ「サーニャ・V・リトヴァクです、よろしくお願いします」

エイラ「エイラ・イルマタル・ユーティライネンダ、よろしく」

サーニャ「この人（作者）は大丈夫なのでしょうか……？」

作者「……………」

エイト「『返事がない、ただの屍のようだ』」

エイラ「先に片付けとけヨ。サーニャが怖がっているダロ」

エイト「そうだね。片づけておくよ（ずりずりずり……）」

サーニャ「なんだかすごい現場を見たような……」

エイラ「き、気のせいなんだナ」

エイト「さて、聞きたいこととかあるかな？」

サーニャ「先程の登場シーン……説明をしてください」

エイト「後書きのかな？」

エイラ「本文のダヨ！ 本文の」

エイト「『夜遅くに大声を出して』の下りかな？」

サーニヤ「はい……どうして、物陰から出てきたんですか？」

エイト「座って君たちを待っていたら偶々物陰だったわけだよ」

エイラ「なんで、MG42なんて物騒なものを持っていたんだヨ。
びっくりしたゾ」

エイト「久々に使うから整備してたんだけど……」

サーニヤ「最後の質問です」

エイラ「『一緒にデートにいかないかい』ってどういう意味ダヨ」

エイト「そのままの意味なんだけどね」

サーニヤ「……直球過ぎです……」

エイラ「サーニヤをそんな目で見んナアアアアア」

エイト「はい？ 僕は夜間哨戒と一緒にいかないと誘っただけなんだけど……」

サーニヤ「えっ……そうなんですか？」

エイト「そうだよ。別に僕はお買いものでも構わないけど、いまだと時間帯が合わないからね」

エイラ「じいーーーー」

エイト「そういうわけで誤解は解けたかな？（全く、あのダメ作者め手間を取らせやがって！）」

サーニヤ「はい」

エイラ「ぬぬぬぬぬ」

エイト「誤解も解けたところで」

サーニヤ「次回もお願いします」

エイラ「サ、サササササーニヤは渡さないんだナアアアア」

サーニヤ「え、エイラ／／／／／」

Night tag(上) (前書き)

作者「やっとのことで更新です」

エイラ「待ちくたびれたゾ」

サーニャ「遅いです……」

エイト「この遅刻魔め」

作者「すみません、少しスランプなもので……」

エイト「スランプもスクランブルもあるか!! 軍人たる者、万事に備えて――」

エイラ「おいおい、大尉みたいになってるゾ。それと作者は軍人じゃないからナ」

サーニャ「気がならないことは誰でもあることですよ」

作者「ああ、天使が舞い降りた……」

サーニャ「／／／／／で、でも、できないとあきらめたらできませんよ」

エイラ「そうなんだナ(怒)!! さっさと書けばいいんだナ!!」

サーニャ「エイラ……そんな言い方ないでしょ」

エイラ「さ、サーニャ」

エイト「で、いつも通り書くことは可能なのか？」

作者「サーニャさんの口調には苦戦していますが、大丈夫かと」

エイト「それならいい」

サーニャ「そんな難しいですか……？」

作者「だ、大丈夫です、問題ありません（そんな消えそうな声で言われると……）」

エイラ「問題ないってサ」

サーニャ「良かった」

エイト「そろそろ時間が！」

作者「サーニャさん、頼みましたよ！！」

サーニャ「……え！？（聞いてないです！）」

エイラ「頑張るんだナ」

サーニャ「うん！！」

「それでは……」

「はじまります……」

N i g h t t a g (上)

冷たく吹き付ける風。

天高く昇る蒼月。

大地を包む夜天の恵みが、生けるもの全てに安らぎを与えていく。

「……………」

闇に眠る常世を見渡せば、一對の妖精が星空に舞い踊る。

端麗な妖精エイラと清廉な妖精サーニャ。

淡い光に照らされた彼女たちの姿は神秘的だ。

透き通るような雪色の肌、夜風になびく絹糸のような美しい髪は、身体に纏う夜露が輝きを見せるとき幻想の世界を創り出す。

そして、夢の世界で踊る妖精は、今宵も人々の安全を見守り続けるのであった。

「……さつきから一人で何言ってるんだヨ」

「変なエイトさん」

ぐふっ。

二人の痛烈な言葉が胸に突き刺さる。

夜間哨戒を行う彼女たちの姿を見て、咄嗟に思い付いたことを口にしたのだが……。

言葉の選択を間違えたのであろうか。

精進しないといけないね、精進。

「そうじゃないダロ……」

何故か、エイラは諦め顔である。

「ふふふ」

サーニャちゃんは僕を見て微笑んでいるし……。
なんか僕が痛いやつみたいだ。

まあ、それはさておき、いま僕はエイラ、サーニャちゃんの三人で夜間哨戒を行っている。

いつもより早めの速度でだそうだ。

原因はここに来るまで地上で一悶着あったからだ。

内容は割愛とさせてもらう。

結果だけ言うと、様子を見に来たミーナの一言で決着がつき、僕はここにいます。

『グライナー少佐からは後でお話を伺うとして、早く哨戒任務に就きなさい』

だもんな。

さすがは世界を震撼させるブラックスマイル。

誰も抗えない。

待てよ、いま考えればそのまま唯々諾々と従ってよかったのか。
後でお話を伺うって……。

危険な香りがしてくる。

生命のピンチかもしれない。

「えーと、大丈夫ですか？」

「うん、ちょっと気疲れがしただけだから問題ないよ」

「そうですか……」

僕の心配をしてくれるサーニャちゃん。
なんて、優しい子なんだろう。

「むむむむむ」

一人サーニャちゃんを挟んだ向こう側で唸っているけれど、大丈夫だろうか。

「そういえば、サーニャちゃんのストライカーは見れない型式だね」

「……これですか？」

そうそれ。

サーニャちゃんが履いている夜戦使用のストライカー。
色んなところを飛び回っていたが見たことないよ。

そのストライカー。

「オラーシャのミール・ガスウ——」

「ストップ！ MiGで分かるからね」

「そうですか？」

「そうだよ」

ミール・ガスウダールストヴァ設計局。
通称MiG。

いちいち会話で正式名称を言っていたら切がない。
なんかこの娘は素直な娘みたいだから、会話中ずっと言ってる
だし。

「この機体はMiG i-225の試作二号機だそうです」

「へえ」

試作先行機か。

道理で見たことないわけだ。

納得。

でも、どうやってオラーシャからロマーニャに持ってきたのだろ
うか？

ウラルの山脈にはネウロイの巣があるし、東部戦線を通っての輸
送も厳しいだろう。

となると、太平洋側を渡ってか。

ご苦労なことで。

「触ってもいいかな？」

「えっ？ 良いですけど……火傷しますよ？」

サーニャちゃんが驚いたような、哀れんだような目で見てくる。
いや、さすがに今じゃないって。

整備の時、整備の時。

「サーニヤをそんな目で見るナアアアアアア！……！！！」

意味が分からないことにエイラがロールでサーニヤちゃんを飛び越えて襲いかかってきた。

しかも、血眼な目で。

僕はそれを急旋回で躲す。

「逃がすカアアア！！！」

一撃目を躲したのはいいものの側面を取られ、高度の優劣も向こうが上とかなり分が悪い。

そして、エイラは僕が体勢を立て直す時間すら与えることなく、流れるような動きで再び突撃をしてくる。

「ちっ」

それも的確に、僕の逃げ道をつぶすが如く正確に。

「おとなしくするんだナ！」

何度かの防戦。

されど、未だに劣勢は崩せない。

むしろ距離を縮められた気がしてならないのだが。

「わたしから逃げ切るのはムリナンダナ」

どこかの物語の悪役が言ってそうなセリフを言い放つエイラ。その自信はどこから湧いてくるのだろう。

無傷のウィッチと呼ばれる所以か。

確かにあの巧みな空戦テクニックと驚異的なまでの先読み能力。厄介にもほどがある。

先程から何度、離脱を図ってに失敗したことか。きつと何か裏があるはずだ。

僕は身体を横方向に反転。

さらに、耳にかかる眼鏡を外し、鬼の形相で近づいてくるエイラの方を向いた。

「【?】 天より注ぎし至純の光明を以って、汝の真なる姿を晒し出せ」

左目に浮かぶ漆黒の五芒星。

僕は魔眼もどきを使って、エイラの体を調べる。

やはりか……。

エイラの突撃を高度を落とし紙一重で躲しながら、僕は一人頷く。偽魔眼でエイラの魔力の流れを調べたところ、ストライカーにしか供給されていないはずの魔力が頭へと流れ込んでいた。

おそらくは、固有魔法でも使っているのだろう。

未来予知とは厄介この上ない。

「未来予知を使うとは卑怯だよ、エイラ」

「エイトこそ、固有魔法使ってんだろ」

失礼なことを言わないでくれ。

僕はまだ固有魔法の使用はしていない。

この偽魔眼が固有魔法に入るか微妙なところではあるが……。

ちなみにいま話している間だけエイラの攻勢が止んだ。

なので、少しながら間合いを取ることに成功する。

偽魔眼を使って詰められた距離を取り戻したのだ。

（さて、どうする……）

距離が取れたことで、振出しに……ならないか。

高度を落としてエイラの突進を避けてきたからね。

海面までの距離を見たいがおよそでしか分からない。

9000フィート（約3000メートル）は切っているか。

「どうせ、逃げ切れないんだ。早く捕まったほうが楽になるゾ」

顔の横で手をわきわきさせるエイラ。

君は何を考えているんだよ。

余計に捕まりたくなってきた。

だが、このまま普通に逃げ続ければエイラが言う通り捕まりかねない。

あくまでも普通に逃げていればだが。

「生憎そんな趣味はないんで逃げさせてもらおうよ」

「ナッ!？」

空に飛びこむように頭を下に向け垂直降下を始める。

流石のエイラもこれには対応できなかったか。

所詮、未来予知は未来予知。

外れることもあり得るのだ。

特に本人が予想だりしない……つまり、無意識の内に否定しているような事態が起こった時に外れやすいようだ。

砂漠の反則紛いの某ウィッチも言っていたし……。

古い伝承やよく当たると噂の占い師に聞いた時も、大抵は予想外のことが起きた時に、外れやすいというデータが取れている。

何故、そんなデータを取っているかって？

趣味だよ、趣味。

どこかの国の皇帝陛下の。

しかしながら、エイラの裏を斯いた代償は大きい。

先の見えない闇の中へ、海という自然の絶壁へと急転直下。

いまはまだ速度が出ていないが、海面に着く頃には……海へと突っ込んだ結果を思いたくもない。

「おい！ なに、ばかやってんだヨ！！」

頭上で怒鳴りながら追いかけてくるエイラ。

馬鹿とはひどい物言いだね。

こちらも勝算がなくてやっているわけではないのに。

僕は眼下に広がる大海原に目を凝らす。

そう、残念ながら僕には見えているのだ。

この闇の中が。

(……海面まで6500フィート)

機体の速度も徐々に上がっていき、海面がよく見えてくる。
何故見えるかという、この目のおかげだ。

左目の人工魔眼。

視力が飛躍的に上がり、遠くの物も闇の中でも辺りを見渡すことができるのだ。

夜間で使えるという点は固有魔法の魔眼よりも優れている。

しかしながら、物には優れた点があれば、またその逆も然りである。

人工魔眼を発動すると視界がぼやけて見えるのである。
慣れればどうということはないのだが、普段澄んで見える光景が霞がかって見えるのには、やはり違和感がある。

その分、魔力の流れやネウロイのコアなど普通に生活していたら目にしないようなものが、際立って見えるのだが……。

他にも、薄い壁だとか、女性のスr―――。

はっ！ 何を考えているのだ、僕は！！

頭を激しく振って、邪なものを取り払う。

『死にたいのかこの馬鹿！！ 早く機首を上げないと海面に突っ込むぞ！！！！！！』

無線から響くエイラの怒鳴り声に耳がキーンと鳴る。

「大声を出さなくても……って!？」

やばい！

これは墜ちたかも。

不意にそう思えるぐらい海面が近づいていた。

そう言えども、墜ちるわけにはいかなかった。

墜落すればストライカーは壊れてしまうし……。

何より痛いから。

僕はスピードを落としながら、強引に機首を上げていく。

身体が、ストライカーが悲鳴を上げているが気にしている暇はない。

（力を貸してもらおうよ、相棒！）

僕を墜落させまいと悲鳴を上げ続ける愛機あいぼうはもちろんのこと、僕に力を与えてくれるもう一羽の使い魔あいぼうに問いかける。

すると、その問いに答えるかのように身体がスッと軽くなり、体内に溢れんばかりの魔力が供給される。

（風に乗るよ）

僕はフラウみたいに風を操ることはできない。

だが、風に乗ることはできるのだ。

使い魔が何処を如何飛べばもっとも良いか教えてくれるのだ。

空の王者は伊達ではない。

見る見るうちに多大な浮力を得て、機体は上昇を始める。

墜落の危機を逃れることに成功したのである。

使い魔様々だ。

それでも危なかったな。

顔を下に向けるとすぐそこには海が見える。
海面すれすれまで降下していたのだ。

『心配させるなヨ』

安堵の声を漏らすエイラ。
どうやら心配を掛けてしまったようだ。

上昇を続けエイラと同じ高度までたどり着く。

「墜ちたらどうするつもりだったんだヨ」

「悪かったよ、ごめんごめん」

半眼で睨んでくるエイラ。
仰る通りです。

「何をやっているんですか、エイトさん!!」

一部始終を目撃していたであろうサーニャちゃんも合流。
僕への非難の視線は増すばかりだ。

「いい気味ダナ」

してやったり顔のエイラ。
僕に非があるだけに言い返せない。
悔しい。

「エイラ……あなたもよ」

「ええっ!？」

「エイトさんを追いかけてなければ、こんなことにはならなかったでしょう?」

しかし、サーニャのお説教の手はエイラへも伸びる。

確かに原因はエイラだね。

そうだ、そうに違いない。

「エイトさんもエイトさんです。何であんな危険なことをしたんですか!？」

「それはだね……」

理由は色々あったが、襲われそうだったから逃げたというしかない。

途中から逃げるのが楽しくなってきたなどいうわけにはいかな

「え・い・と・さ・ん?」

「は、はい!？」

まるで僕の思考を読んだかのようなタイミングで詰め寄ってくるサーニャちゃん。

小声なのになんと迫力のあることか。

サーニャちゃん恐るべし。

「なあ、サーニャ。哨戒続けなくてもいいのか?」

「……そうね」

助け舟を出すエイラ。

あれは自分に降りかかる火の粉を振り払っただけかな？

まあ、どちらにしる助かった。

「哨戒任務に戻ります」

「了解」

僕とエイラは敬礼をして返す。

少佐が中尉に命令されているが仕方ない。

サーニャちゃんが夜会専従班の班長でもあるし、いまは特に……。

「エイラ、エイトさん……」

「何かな？」

「何ダヨ？」

「お話はまだ終わってませんから」

「「ええっ!?!」」

夜間哨戒を続けながら小一時間サーニャちゃんのお説教が続いたのは言うまでもなかった。

Night tag(上) (後書き)

作者「なんとか話がまとまっていたでしたね」

エイト「ぐだぐだだったろうが」

作者「ぐはっ！」

エイラ「ダメダメダナ（主にサーニヤの出番が少ないことに）」

作者「のはっ!!」

サーニヤ「しっかりしてください!!」

作者「サーニヤさんだけですょ優しいのは……（ユリアさんもだんだんエイトさんやミーナさんに似てきましたし……）」

サーニヤ「そうだ! エイラ」

エイラ「どうしタ？」

サーニヤ「作者さんの今週の運勢を占ってあげて」

エイラ「別にいいけど……」

エイト「エイラはタロットができるんだったかな？」

エイラ「そうダゾ」

エイト「当たるのかな？」

エイラ「ナッ！ 私の占いはあたるんだゾ！！」

サーニヤ「百発百中ですよ」

エイト「面白そうだね」

エイラ「待ってろ、作者の来週の運勢は……（サーニヤが見てるんだ。外すわけにはいかないゾ！！）」

一同「……………」

エイラ「これダ！！！！」

エイト「タロットナンバー？ 刑死者のカードだね」

エイラ「なんだ？ 知っているのか？」

エイト「齧った程度だよ」

サーニヤ「それで（わくわく）」

エイラ「刑死者の正位置 修行、忍耐、努力を意味するんだナ」

エイト「今の作者にぴったりだね」

作者「さいですか……」

サーニヤ「大丈夫ですよ。きっと報われる日が来ます！！」

エイト「それまで頑張ることだね」

エイラ「ダナ」

作者「努力します」

エイト「もうこんな時間か」

サーニヤ「あれ？ 腕時計じゃなくて、銀時計ですか？」

エイト「まあね。その話はまた今度ということだ」

作者「それではまた」

エイラ「日曜日にダナ」

作者「え！？」

エイト「頑張れ」

サーニヤ「努力です」

作者「はははは……はあ」

Night tag(中1) (前書き)

作者「久々の投稿になります」

エイラ「二週間もすっぱかして何やってたんだナ」

エイト「覚悟はできているのだろうか」

作者「これには訳があつたと言いますか……その……」

エイト「天誅！」

サーニヤ「待ってください、エイトさん！」

作者「（助かりました、サーニヤさん）」

エイト「サーニヤちゃん止めないでくれるか？ 僕はこの愚か者に――」

サーニヤ「ちょっと作者さんに伺いたいことがあるので……」

エイト「いや、しかしな……」

サーニヤ「……エイトさん」

エイト「うっ、分かったよ」

サーニヤ「では、作者さん逝きましようか」

作者「さ、サーニヤさん、自分はひとりでも歩けますから……って、なに物騒なことを言っているんですか!？」

サーニヤ「……きりきり歩いてくださいね（笑顔）」

作者「ひいー」

エイト「なあ、エイラ？　サーニヤちゃんに連れて行かせてよかったのかな？」

エイラ「（がくがくがく）」

エイト「え、エイラ？」

エイラ「さ、サーニヤが怒っているんだナ」

エイト「サーニヤちゃんが？」

エイラ「そうなんだナ。ほら、始まるゾ」

エイト「始まるって何が？」

エイラ「サーニヤの大粛清へ血の日曜日」が」

エイト「え？　え？」

作者「ぎゃあああああああー」

エイト「えーと……（今のは作者の悲鳴!？　いったい何起きているんだ!）」

エイラ「エイトがえ〜となんて言っても面白くなんかないゾ」

エイト「サーニャちゃんはその阿保に何をしているんだい？」

エイラ「それは国家機密ダナ（がくがくがく）」

作者「ぎゃあああああ————」

エイト「わ、分かったよ（爆発音からして大方フリーガーハマーで折檻でもしているのかな？）」

エイラ「エイトもサーニャを怒らせちゃダメだゾ」

エイト「肝に銘じておくよ」

エイラ「（ぶるぶるぶるぶる）」

エイト「エイラ、そろそろタイトルコールよろしく」

エイラ「な、何で私なんだヨ」

エイト「サーニャちゃんからの推薦だから」

エイラ「仕方がないんだナ」

エイト「（変わり身早いな）」

エイラ「それでは」

「『魔術師の戦律』 第16話 Night tag(中1)」

「エイトに天罰が下るんだナ」

エイト「え、マジですか……」

N i g h t t a g (中1)

「二時間後にまた会いましょう」

「サーニャ、やっぱり私も……」

「ダメよ、エイラ。エイトさんも困っているでしょ」

「あははは」

目の前で広がる光景に僕は乾いた笑しか出なかった。
こちらを睨みつけてくるエイラとそれを窘めるサーニャちゃん。
この三者の関係が既にデフォルメ化しているのは気のせいであろうか。

「それではエイラのことをよろしくお願いします」

「ああ、任せといてよ」

「さくにゃ」

軽い挨拶を交わすとサーニャちゃんは西へと飛んでいた。
エイラが情けない声を出しているが気にしてはいけない。

「ほら、行くよ。編隊長殿」

ロッテを組むことになったエイラの声をかける。

この采配はサーニャちゃんが言いだしたことだった。

何でも、自分は夜間哨戒に慣れているし、ロマーニャに来て間も

ない僕を氣遣ってだそうだ。

この地の空を飛ぶのは本当久しぶりなので助かりはするが……。サーニャちゃんもロマーニャに来て間もないはずなのだけれどもね。

ともあれ、サーニャちゃんのイメージが変わったのは確かだ。しっかり人を見て考えているし、きちんと言う時には言うようだ。将来、優秀な指揮官になることは間違えないだろう。

「迷子になるナヨ」

「ならないって」

少し雲は出ているが、概ね今日の空は澄んでいる。
この見通しの良い状況でどう迷子になるのか知りたいものだ。

「ふんダッ！」

エイラは何が気に食わないのかそっぽを向いてしまう。
まあ、何が気に食わないか想像するのは容易いが。

「置いてくゾ」

「ま、待ってよエイラ」

編隊長殿は僕を置いて、全速力で先に行ってしまう。

前言撤回。

やはり、サーニャちゃんの采配は間違えだろう。

取り留めもないことを考えながら、僕はエイラの後を追いかけて東へと向かっていくのだった。

＊

「何なんダヨ、アイツは」

私の頭の中は珍しくむしゃくしゃしていた。

今日着任した、エイト・グライナーとか言う優男。
事の原因はこの男に有った。

アイツの所為でサーニヤとの楽しい時間は邪魔されるし。

アイツの所為でサーニヤには怒られるし。

アイツの所為でサーニヤと二人っきりで夜間哨戒できないし。

ほんと、空気読めヨ!!

サーニヤの目の前だから言えなかったけれど、サーニヤがいなかったら言っていただろう。

それに――――。

「あぁっ！　もう!!」

私は髪を掻き乱す。

昼間のことだ。

アイツはサーニヤのことを……サーニヤを……す、す、すすつつつつつつつ……！

頭の中が真っ白になる。

「――――エ――――イラ？」

声がした方を振り向くと、エイトが心配そうに私を見ていた。

「なんでもないゾ」

素っ気なく言葉を返してしまう。

正直、エイトとは話す気分になれないのだ。

「なんでもないってことはないよね？ 顔も真っ赤だし、髪も乱れているし」

「余計なお世話ダ！！」

私はエイトに食って掛かる。

しかし、目の前の男は大げさに肩を竦める。

「余計なお世話ってことはないだろ？ 挙動不審の女の子がいれば気になるのも仕方ないと思うんだけどね」

「誰のせいだと思っているんだナ！」

今日一日、エイトの所為で調子が狂いっぱなしなんだナ。

「悪かったよ、お詫びと言ってはなんだけど……ほら」

「!？」

何を思ったのかエイトは肩に手を回し、私の身体を引き寄せる。

「ナ、ナニスルンダナ!？」

「こら、暴れるなって」

「は・な・せっ!!」

私はエイトの腕の中で必死にもがく。

ストライカーの出力を上げても、急にスピードを落としてもエイトの手は離れない。

がっしり掴んでいるわけでもないのにどうやっているんだヨ。

「わ、分かったよ」

必死にもがき続ける私に観念したのかエイトの手が緩められる。

私はエイトの下から一目散に逃げ出した。

「何のつもりなんだナ!!」

「ちょ、ちょっと待てくれ!? 何か誤解をしている!..!」

私の行動に今度はエイトが慌てふためく。

黒光りする銃身。

構えるMG42のサイトにはエイトの頭がしっかり捉えられている。

「何をしようとしたか、三秒以内に答えるんだナ」

絶対、ろくでもないことをしようとしたに決まっている。

まともな言い訳をすれば中佐に突き出すだけで勘弁してやる。

下手な言い訳をする素振りでも見せたら………ここで、頭を撃ち抜いてやるんだからナ。

「そ、それはだね……」

「それは？」

不穏な空気を察したのか言いよどむエイト。

だが、時間は待たない。

三秒経過。

私は迷いなく引き金に指を絞る。

弾ける閃光。

響くのは乾いた音。

無慈悲なる凶弾が放たれる。

「……っ！」

放たれた7、92mm弾はエイトの顔を真横を、彼の黒髪を千切

っていった。

信じられないと言わんばかりにエイトの目は大きく見開かれる。
まさか、私が本当に撃つとは思っていなかったのだろう。
冗談なんて一言も言っていないゾ。

「じよ、冗談は止めにしてくれないか……心臓に悪い」

「……………」

未だに冗談だと思っているエイトに向けMG42の引き金に再度、
指を掛ける。

やはり、外すべきではなかっただろうか。

私の頭の中にそんな考えが駆け巡る。

「冗談……ではないのかな？」

エイトはやつと状況を理解したようダ。

状況把握も遅くて、次から次へと女の子に手を出すような変態。

こんな奴が少佐とは……世も末なんだナ。

不覚にも私はエイトに哀れみを覚えてしまう。

だが、こんな頭が可哀想奴でもやったことは許されない。

「もう一度言うゾ、一体いま私に何をしようとしたんだナ」

冷淡に自分でも驚くほど、ドスの利いた声でエイトに問いかける
のだった。

＊

現在、僕は非常に困った状況に陥っている。

それは目の前にいる顔を真っ赤に染めている少女が原因である。

顔を真っ赤に染めて俯いている少女なら、万人が愛らしく思うことであろう。

はたまた、顔を赤く染め食い掛ってくる少女なら、可愛いものだろう。

だが、僕の前にいる少女は血走った目で射る様にこちらを睨み付けてくるのである。

加えて銃撃のオマケ付きときた。

正直なところ、全品返却、返金はなしでいいから、とにかくここから逃げたい気分である。

今更ではあるが、何故こんなことになっているかは見当もつかない。

もしかしてあれか。

要らぬ節介、己を滅ぼすってやつか。

乱れたエイラの髪を解こうとしたのが間違えか。

髪は女の命ともいうものな、男の僕が触るのはまずかったのかな。でも、ユリアやフラウは気持ちよさそうにしてくれるんだけどな。乙女心はやはり難しい。

そんなことをあれこれ考えていると、エイラが動いた。

視界を覆うマズルフラッシュ。

不気味に光る銃身から吐き出される僅か8mmの凶弾。
至近距離で放たれた亜音速のそれを僕は躲すことができない。

「……………っ！」

耳を抑えたくなくなるような衝撃が鼓膜を揺らす。

その凶弾はまたしても狙い澄ましたかのように僕の顔の真横を突き抜けていった。

そして、遅れてやってくる鋭い痛み。

今の銃撃で耳たぶでも切ったのだろう。

生暖かいものが首筋を濡らしていく。

「次はないゾ」

淡々と告げてくるエイラ。

そこには明確な意志が込められている。

困ったね、全く。

殺気立つ彼女を見て、密かに微笑む。

「なに笑ってんだヨ」

「悪い、僕は女性を怒らすのが非常に上手だと思ってね」

「はあ？」

間の抜けた声を出すエイラ。

彼女の反応は正しい。

こんな緊迫した場面で、ふと思い浮かぶのがこんなことなのだ。
現に僕も笑っている。

「変だ、変だとは思っていたけど……まさかここまでとは思わなかったゾ」

エイラは嘆息して、呆れた目でこちらを見てくる。
止めてほしいな。

僕が何かやらかしたみたいじゃないか。
いや、実際にやらかしたんだと思うんだけど……。

それと、できればその認識を改めてくれないか。
変人とは偶に言われるけれども、流石に合った初日にその認識を
持たれるのは結構、堪えるよ。

後、非常に聞いてほしい要望が一つ。

「銃を降ろしてくれないかな？」

「私の質問に答えたらナ」

こちらにMG42を向けているエイラからはすでに殺気が感じられない。
しかしながら、こちらに向いているのは人を僅か数刻で死に至らしめる凶器である。

そんなものが向けられていたのでは落ち着かない。

「降ろしてくれたら、いくらでも答えるよ」

「ダメなんだナ。エイトが先に答えるんだ」

再び、銃を降ろすように説得するがエイラは聞こうとしない。

「僕をそんなに信用できないかい？」

「変態は信用に値しないんだナ」

「……………」

……………左様ですか……………。

何かものすごくへこむ。
すんごくへこむ。

今日一日で僕の認識が変態へとシフトアップされた気がする。
ユリアにフラウ、それにエイラまで…………。
僕ってほんとに変態なのかな…………。

「なに珍妙な顔してんだヨ」

「なんでもないよ……………」

もはや僕には力なく笑うだけの力しか残されていなかったのだ。
た。

＊

容姿に似付かわない黒塗りの大筒を手にする少女。

サーニャは西へと哨戒を続けていた。

「大丈夫かしら……あの二人？」

一人哨戒を続けるサーニャであつたが関心が赴くのは、サーニャと逆方向へと向かつた二人の事。

その証拠にサーニャは何度も、何度も背後を振り返る。

だが、決してネウロイへの警戒は怠つてはいない。

少女の頭で緑色の輝きを放つアンテナが周囲の様子を常に捉える。

固有魔法・全方位広域探査。

夜の戦線を支えるナイトウィッチの中でこれを持つ者は重宝されるスキルだ。

頭の魔法針は電波を発信・受信することで周囲の状況を把握するレーダーの役割を果たしている。

これにより彼女たちはいち早くネウロイを察知することができるのだ。

そして、サーニャはこの固有魔法を余すことなく使用する。

電波を送り、彼らの行動を盗聴ならぬ、盗み見しているのだ。

「……もう、エイラったら……」

サーニャは知覚した光景に嘆息する。

付いてこいと言わんばかりに先行をするエイラとそれをしかたなく追いかけるエイトの姿。

この一方的に離されるのがいまの二人の距離と言えた。

「何が気に入らないのかしら？」

度重なるエイラの不審な態度にサーニヤは小首を傾げていた。

普段は落ち着いた様子で細やかなことにまで気が利くエイラ。悪戯好きな面もあるが人間関係も良好である。

対して、エイトはユリア、ハルトマンと言った年下の少女達に周りに振り回されることが多いためか、包容力のある人柄である。さらに着任初日から、すでに501に解け込む順応な人間でもある。

一見、相性の良さそうな二人ではあるが、その実は先ほどの状況である。

「エイラも戸惑っているのかな？」

エイトさんはお茶目なところがあるから、とサーニヤは納得する。無論、原因はそれだけではないのだが……。

「ッ!？」

突然、サーニヤは弾かれた様な衝撃を受ける。

しかしながら、サーニヤ自身が外的要因で何か受けたわけではない。

サーニヤが衝撃を受けたのは数十キロ離れた空域を哨戒している二人の行動からだ。

「え、エイトさん……な、何を……!？」

サーニヤは顔を、耳まで真っ赤に染め狼狽え始める。

なんと、エイトがエイラに抱き付いたのだ。
許されざる暴挙である。

「えっと……えっと……」

予想だりしてなかった事態にあたふたするサーニヤ。
無理もない。

ストライカーを駆り、異形と戦うウィッチとはいえ、まだ年端も
いかない少女なのだ。

非常事態に頭が回らないのは仕方がないことだ。

そんな少女を置いて事態は悪化の一途をたどる。

「え、エイラ！ 何してるの！？」

再び上がったのはサーニヤの悲鳴。

彼方から冷たい空気に乗って聞こえるのは銃声。

束縛から逃げ出したエイラは有ろうことかエイトに向けて発砲を
始めたのだ。

「ダメ、エイラ！！」

サーニヤは自分の出せる精一杯の声でエイラの行動を止めようと
する。

だが、無常にもサーニヤの声が届くことはない。

彼女たちの距離はあまりにも離れているのだ。

そのことを失念するほどサーニヤは焦りを感じていた。

そして、次なる凶弾が放たれる。

「ッ！」

思わず息を呑むサーニャ。

遠方からでは分からないがおそらくエイラの放った凶弾はエイトを掠めていったのだろう。

ここまでエイラが放った凶弾は二発。

未来予知で相手の行動が分かる彼女が意図せず外すわけがない。

（おそらく次は……）

サーニャは最悪の事態の打開するべく必死に模索する。

「……！ そうだわ、無線なら！！」

活路を見出したサーニャは手早くチャンネルを合わせる。

「止めなさい！ エイラ！！」

『さ、サーニャ！？』

思いもよらぬ人物の声に無線越しのエイラは酷く動揺する。

「何をしているんですかあなたたちは……」

サーニャはため息交じりに無線の向こうにいる彼らを咎める。

そのため息の中に安堵の息が混じっていたのは知る人ぞ知るところである。

「グライナー少佐及びユーティライネン中尉は現空域での待機を命

じます」

『いや、サーニャちゃんこれは——』

「グライナー少佐？」

『Yes ma'am』

状況の不利を悟ったエイトはサーニャの言葉に従う。
瞬時に状況を理解したのは流石カールスラントの少佐。

『さ、サーニャ……これは違うんだ、何かの間違えなんだ』

「エイラ……そっちについてからしつかり話を聞かせてもらおうわ」

『さくにゃ』

サーニャはエイラに対して非情の判断を下す。
これもエイラの自業自得というところではあるが。

「エイラもエイトさんも“くれぐれも”喧嘩しないように」

『Yes, ma'am』

間違えても銃の撃ちあいにならないようにサーニャは釘を刺しておく。

「はあ」

無線での指示を終えて再度ため息をつくサーニャ。

厄介事を背負わされた少女は来た道を帰る羽目になるのだった。

Night tag(中1) (後書き)

作者「ひ、酷い目に遭いました」

エイト「お疲れ様」

エイラ「自業自得ダナ」

作者「暫く投稿できなかったのは反省していますが……」

エイト「で、その原因はなんだ？」

作者「書いていた小説を削除してしまったり、マウスが壊れたりと色々……」

エイト「ほう、ネットでアニメを興じていた人物のいい訳とは思えないな」

エイラ「そんなことをしてサボっていたのか!？」

作者「アニメも見ていましたが……マウスが壊れてしまったのも事実です! (マウスパットでは書きにくかったですし、おかげで執筆途中だった小説も消してしまったわけです……)」

エイト「言い訳は結構だ。その捻くれた根性今ここで叩き直してくれるわあ!!!」

作者「ちょ、ちょっと待って……」

エイト「問答無用！ 天誅！！」

作者「ぎゃああああああつ！！」

エイト「ふっ、常世の悪は滅びたか」

エイラ「こいつどうするんだヨ（こんな奴が常世の悪だったら、この世界ってすんごく安いんだナ）」

エイト「放置しておけば、また甦るだろう」

エイラ「リビングデッドカ！！」

エイト「エイラなにか不満そうだね？」

エイラ「こいつの片づけはどうするんだヨ！」

エイト「ちゃんと片づけておくよ（ずりずりずり）」

エイラ「はぁ……今回も色々ぐだぐだだったけど、次回もよろしくお願いするゾ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4384u/>

魔術師の戦律

2011年10月26日10時11分発行